

岩手県埋文センター文化財調査報告書第83集

川口 I 遺跡発掘調査報告書

国道4号川口バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
建設省岩手工事事務所

川口 I 遺跡発掘調査報告書

国道 4 号川口バイパス関連遺跡発掘調査

序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって、地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は県政の重点施策となっております。一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、この貴重な文化財を保護・保存することもまた県民の責務であります。

現代生活を豊かにするという開発指向と文化財の保護という両者の均衡を保つことはこのよ
うな中で大きな課題となってきました。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、県教育委員会事務局文化課の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査し、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、本県を縦断する一般国道4号の岩手町川口地内の交通緩和のために計画された「川口バイパス工事」に関連し、昭和57、58年度に発掘調査した川口Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。当遺跡では平安時代竪穴住居址と縄文時代と思われる陥し穴状遺構が多数発見されました。この成果は北上川流域における歴史解明の資料になるものと考えます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財理解の一助となることを期待しております。

最後に、発掘調査や報告書作成にあたり、ご協力ご援助を賜りました岩手町教育委員会、建設省岩手工事事務所をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和59年9月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 金子彰吉

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	金子彰吉	(県教育長)
副理事長	尾沢重遠	(県教育次長)
常務理事	熊谷正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田良和	(県農政部次長)
〃	高橋健之	(県林業水産部次長)
〃	穂積昭慈	(県土木部次長)
〃	板橋源	(県立博物館長)
〃	草間俊一	(県立盛岡短期大学長)
〃	小形信夫	(元常務理事)
監事	佐藤公志	(県教委総務課長)
〃	小野寺英二	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷正男
副所長	宮英一
所付	吉田努
〔総務課〕	
総務課長	菊池勉
庶務係長	阿部詔夫
主事	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男
〔調査課〕	
調査課長	近藤宗光
主任専門調査員	昆野靖
〃	国生尚
専門調査員	片方宗明
〃	長沼彬
〃	大原一則
〃	渡辺洋一
〃	田鎖寿夫
〃	佐々木嘉直
〃	栃沢満郎
〃	平井進

専門調査員	中村良一
〃	田村壮一
〃	岩渕久行
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	石川長喜
〃	三浦謙一
〃	高橋与右衛門
〃	高橋義介
〃	佐々木清文
〔資料課〕	
資料課長	名須川溢男
専門調査員	菊池利和
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	酒井宗孝

例 言

1. 本報告書は岩手県岩手郡岩手町大字川口第12地割二ツ森に所在する「川口 I 遺跡」の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 調査は、国道4号川口バイパス工事に伴う緊急発掘調査であり、建設省岩手工事事務所からの委託により財団法人岩手県埋蔵文化財センターが担当した。
3. 発掘調査は、昭和57年6月11日～8月31日と昭和58年10月17日～11月17日の2年にわたって行ない、57年調査区域をa区、58年調査区域をb区とした。
4. 発掘調査面積は、a区が3,800㎡、b区が1,630㎡である。
5. 調査担当者は近藤宗光、酒井宗孝である。
6. 検出した遺構・遺物は次のとおりである。

平安時代竪穴住居址・1棟、焼土遺構・1基、ピット・1基、陥し穴状遺構・29基、縄文式土器片、弥生式土器片、土師器、石器類、鉄器類
7. 石器の石質鑑定は岩手県立大船渡農業高等学校教諭佐藤二郎氏に依頼した。

火山灰の鑑定は岩手大学農学部助教授井上克弘氏に依頼した。
炭化物の放射性炭素年代測定は学習院大学教授木越邦彦氏に依頼した。
8. 発掘調査にあたり、北進考古館高橋昭治氏の御指導を得た。また、岩手町教育委員会、建設省岩手工事事務所の御協力を得た。記して謝意を表する。
9. 調査の方法は次のとおりである。

(1) 調査区の設定と遺構名

基準点1（平面直角座標第10系X：-10,202.57m、Y：+31,786.47m）と基準点2（平面直角座標第10系X：-10,178.72m、Y：+31,778.96m）を直線で結び、この直線と並行に西15mの位置に南北方向の中心軸を設定し、この中心軸に直交し、基準点1をとおり直線と並行に北15mの位置に東西方向の中心軸を設定した。中心軸は、交点を基点として、30m毎に区切り、北から南へA、B、C……F、西から東へI、II、IIIとした。これにより構成される30×30mを大区画とし、その呼称は両者の組み合わせによりA I区、B II区などとした。基点はD II区北西隅である（建設省設定の中心杭No.14）。遺構が検出された大区画には、3m間隔10等分の小区画を設け、北から南へa、b、c……j、西から東へ0、1、2……9とした。この小区画の呼称はA I a 0、B II c 2などとなる。南北の中心軸は磁北に対し17°西偏している。検出した遺構の名称は、それが発見された小区画名に遺構の種別を付して表わした。

(2) 粗掘・検出

任意の数箇所を3×3mの小区画で試掘して、遺構の検出面を把握した後、各地区毎に表土

除去、粗掘、検出を行なった。第一次検出面では平安時代住居址が発見され、縄文式土器片等が出土した。更に一層下を第二次検出面とし、ここでは陥し穴状遺構等が発見された。

(3) 精査・記録

第一次検出面、第二次検出面の順に精査し、遺構の平面図・断面図は縮尺20分の1で作成した。住居址のカマドの断面図は縮尺10分の1で作成した。写真はモノクロ35mm、6×7cm、カラーライド35mmの3種で撮影した。

10. 整理・まとめ作業については次のとおりである。

(1) 遺構配置図

野外調査時に作成した平面図をもとに縮尺100分の1で作成した。

(2) 遺構図

野外調査時に作成した図をトレースし、住居址や陥し穴状遺構などは縮尺60分の1、カマド断面は縮尺30分の1で掲げた。図中の記号Gは礫、Pは土器、P₁、P₂、P₃……P_nは柱穴である。

(3) 出土遺物図

土器実測図は縮尺3分の1、石器実測図は縮尺2分の1、拓本は縮尺3分の1である。写真は縮尺率不定である。

11. 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

- I. 調査に至る経過……………嶋 千秋（前調査課長）
- II. 遺跡の立地と環境 地形と地質……………酒井宗孝 歴史的環境……………高橋与右エ門
- III. 検出された遺構と遺物 遺構分……………近藤宗光 遺物分……………酒井宗孝
- IV. まとめ 遺構分……………近藤宗光 遺物分……………酒井宗孝

12. 野外調査時には、浦田高、浦田隆氏他地元作業員多数の協力を得た。

室内整理作業では、当センター室内作業員多数の協力を得た。

目 次

序

(財)岩手県埋蔵文化財センター組織

例 言

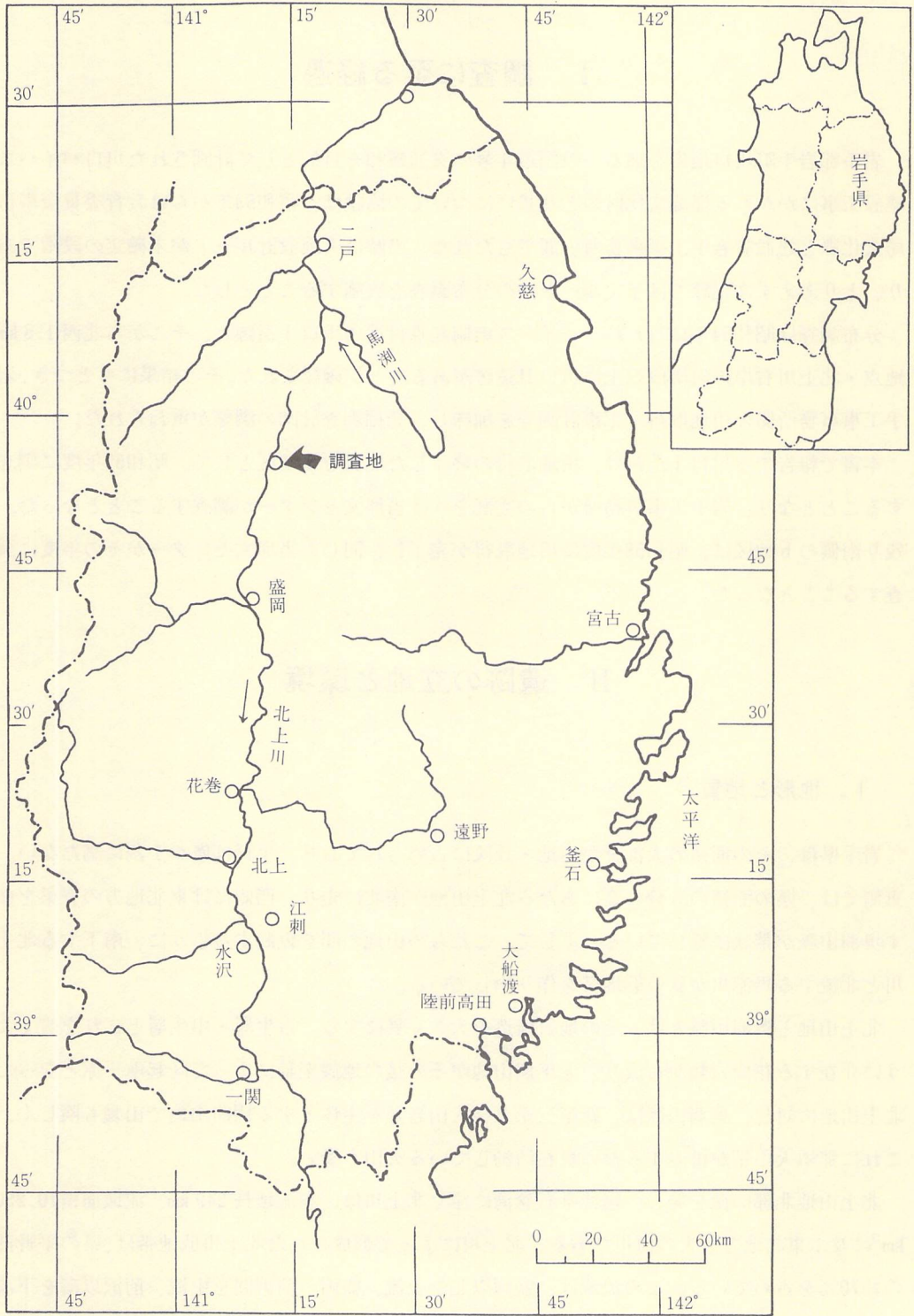
I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 地形と地質	2
2. 歴史的環境	9
III. 検出された遺構と遺物	15
1. 竪穴住居址——CIIa3住居址	15
2. 焼土遺構——CI f5焼土遺構	16
3. ピット——CIIa2ピット	20
4. 陥し穴状遺構——CIIi9、DIIIb2陥し穴状遺構	20
DIIb2-1、DIIb2-2陥し穴状遺構	21
CIIIh2-1、DII d9、DI g3陥し穴状遺構	23
EId3、EI f4陥し穴状遺構	24
EIIc0、EId9陥し穴状遺構	27
EIH6、FI c8陥し穴状遺構	28
EIH9、DIIa1陥し穴状遺構	29
DI b9、DI c8、DI d6、DI f5陥し穴状遺構	30
DI f4、CIIIh0、CIIIh2-2陥し穴状遺構	33
EIIb1、E Ia9、DI j7、DI i6陥し穴状遺構	34
DI h6、DI g6、DI e4陥し穴状遺構	36
5. 遺物包含地	37
6. 遺構外の遺物	37
IV. まとめ	43
岩手町川口I遺跡埋土中の火山灰	57

図 版 目 次

第1図	岩手県全体図……………	1	第13図	D I f5, D I f4, C III h0, C III h2-2, E II b1 陥し穴状遺構…	32
第2図	遺跡周辺地形分類図……………	3	第14図	E I a9, D I j7, D I i6, D I h6, D I g6, D I e4 陥し穴状遺構	…35
第3図	土層断面柱状図……………	5	第15図	出土遺物(C II a3住居址・遺構外出土遺物)……………	48
第4図	岩手町の遺跡位置図……………	7	第16図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	49
第5図	遺構配置図……………	13	第17図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	50
第6図	C II a 3 住居址……………	17	第18図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	51
第7図	C II a 3 住居址カマド……………	18	第19図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	52
第8図	C I f5 焼土遺構, C II a2 ピット, C II i9, D III b2 陥し穴状遺構	19	第20図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	53
第9図	D II b2-1, D II b2-2, D II d9, C III h2-1 陥し穴状遺構	… 22	第21図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	54
第10図	D I g3, E I d3, E I f4, E II c0 陥し穴状遺構……………	25	第22図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	55
第11図	E I d9, E I h6, E I h9, F I c8 陥し穴状遺構……………	26	第23図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	56
第12図	D II a1, D I b9, D I d6, D I c8 陥し穴状遺構……………	31			

写真図版目次

第1図	調査区全景……………	61	第10図	出土遺物(C II a3住居址・遺構外出土遺物)……………	70
第2図	C II a 3 住居址……………	62	第11図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	71
第3図	C II a3住居址、焼土、ピット、土層断面……………	63	第12図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	72
第4図	陥し穴状遺構No. 1……………	64	第13図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	73
第5図	陥し穴状遺構No. 2……………	65	第14図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	74
第6図	陥し穴状遺構No. 3……………	66	第15図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	75
第7図	陥し穴状遺構No. 4……………	67	第16図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	76
第8図	陥し穴状遺構No. 5……………	68	第17図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	77
第9図	陥し穴状遺構No. 6……………	69	第18図	出土遺物(遺構外出土遺物)……………	78



第 1 図 岩手県全体図

I 調査に至る経過

岩手郡岩手町川口地内を通る一般国道4号の交通緩和を目的として計画された川口バイパス建設工事にかかわる埋蔵文化財のとり扱いについての協議は、昭和53年から県教育委員会事務局文化課と建設省岩手工事事務所の間でもたれた。当時は実施設計ルートが未確定の段階であり、とりあえず文化課では予定ルート内の分布調査を実施することとした。

分布調査は昭和54年に行われ、バイパス南側起点付近の川口Ⅰ遺跡と、そこから北西1.8km地点・北上川右岸の河岸段丘上に川口Ⅱ遺跡があることが確認された。その結果にもとづき、岩手工事事務所側の用地取得・工事計画等を加味し、発掘調査計画の調整が重ねられた。

本書で報告する川口Ⅰ遺跡は、用地取得の終了した北側をa地区として、昭和57年度に調査することとなり、岩手工事事務所からの委託をうけ当埋文センターが調査することとなった。残り南側のb地区は、昭和58年度に用地取得が完了し、同じく当埋文センターがその年度に調査することとなった。

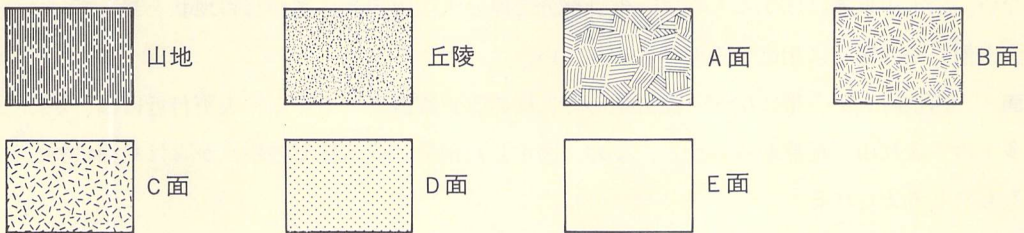
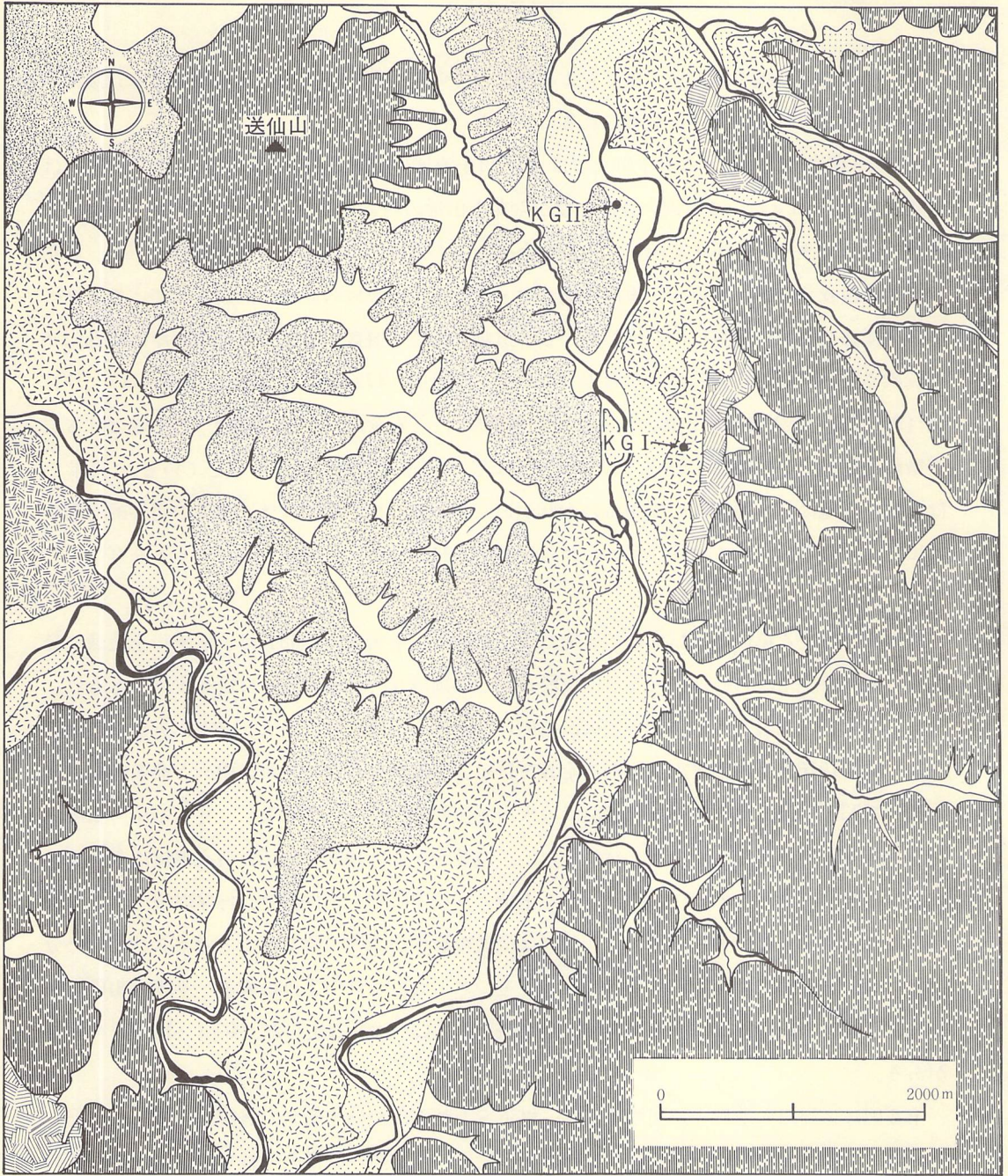
II 遺跡の立地と環境

1. 地形と地質

岩手県は、その面積の大部分が山地・丘陵に占められており、平野は僅か1割に満たない。東側では、県の面積の3分の2にあたる北上山地が南北に走り、西側には東北地方の脊梁をなす奥羽山脈が帯状に延びている。そして、これらの山地の間を縦断するように、南下する北上川と北流する馬淵川が狭い低地帯を作り出している。

北上山地と奥羽山脈とは、その地質構造を大きく異にする。古生層・中生層とこれを貫くように介在する花崗岩類から成り、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原となった北上山地に対し、奥羽山脈は、新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山地で山塊も険しく、これに那須火山帯が併走するため現在活動している火山も多い。

北上山地北部に源を発し、宮城県石巻湾に注ぐ北上川は、本流延長249km、流域面積10,250km²に及ぶ東北地方最大の河川である。北上川によって形成された北上川低地帯は、県の平野部の約70%を占めている。この流域は、盛岡以北を上流、盛岡～前沢間を中流、前沢以南を下流の3区域に区分されている。川の西岸と東岸では、前述した山地の構造の違いを受けて、その地形も対照的である。西岸は、奥羽山脈から流れ出す支流によって形成された大小の扇状地が



第2図 遺跡周辺地形分類図

みられ、この扇状地を刻む形で段丘もよく発達している。東岸では、北上山地に続く丘陵部縁辺に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。

川口Ⅰ・Ⅱ遺跡が所在する岩手町川口は、北上川上流域に含まれる。この区域では、北上川は川幅も狭く、両岸の小さな沢を合流しながら北上山地の西縁を曲流する。この後、玉山村好摩付近で八幡平から流下する赤川・松川を合せ、その水量・川幅とも増して盛岡へ下る。小抱以北では段丘の発達が悪いが、雪浦以南の主・支流域では数段の段丘が形成されている。2つの遺跡はこの段丘の縁辺部に立地している。遺跡の周辺を概観すると、北上川西岸には低起伏の丘陵や山地が広がり、丘陵から突出する形で、送仙山(472.4m)、白屋山(428.2m)、丹谷山(397.3m)などの孤立山体がみられる。南西には、「岩鷲山」・「南部富士」とも呼ばれる岩手県最高峰岩手山(2040.5m)が大きくそびえ、火山地帯特有の地形を呈している。東岸では、北上山地に続く標高300~500mの山々が迫っている。また南西には、雄大で男性的な岩手山に対し、その形状から女性に例えられる姫神山(1123.8m)が優美なシルエットを写しだしている。

当地域における第四系及び地形の研究は盛んである。中川他(1963)は、北上川上流域に発達する段丘を上位から、洪民段丘(中位段丘)と盛岡段丘(低位段丘)に区分するとともに、火山噴出物を古期のものから大石渡火山角礫岩、洪民火山灰、分火山灰、一本木火山礫に大別した。磯(1976)は、洪民火山灰の再定義を行い、下位のものを一ノ渡火山灰と命名した。また橋(1973・1978)は、赤川・松川沿岸の火山泥流と地形について調査し、赤川沿岸の松尾泥流と大更一帯の五百森泥流を明らかにした。この後大上他(1980)は、五百森泥流について再定義するとともに、この地における段丘を上位より松内段丘・洪民段丘、好摩段丘・門前寺段丘の4段に細分した。また、井上(1982)は、従来岩手山の噴出物であると考えられていた分火山灰が、秋田駒ヶ岳起源のものであることをつきとめ、これの上位に載る一本木火山礫を細分した。最近の研究では、岩手山麓や五百森泥流の¹⁴C年代を測定した土井他(1983)の報告がある。

第2図に、周辺の地形分類図を示した¹⁾。以下、これらについて若干の概説をする。

A面 緩傾斜地形を一括した。北上川左岸では、下位の段丘面と連続し、明瞭な境は認められない。岩手山東麓に広がるものは、裾野部分で厚い火山噴出物に覆われ台地状を呈している。大上他の松内段丘に相当する面かもしれない。

B面 西根町大更一帯に広がる泥流地形で、橋の五百森泥流にあたる。大更付近には、かなり多くの「流れ山」地形がみられる。なお、図示した部分は段丘地形の観点からはC面に相当するものと考えられる。

C面 中川他の盛岡段丘、大上他の好摩段丘にあたる。当地域で最も良く発達する段丘で

低位段丘に相当する⁽²⁾。北上川をはじめ松川・赤川沿岸に広く分布しており、新鮮な面を残し開析は進んでいない。浚民部落、好摩部落、川口部落などを載せ、現在では水田や畑地、果樹園として利用されている。川口 I 遺跡は当段丘の縁辺部に立地している。分火山灰および一本木火山礫を載せる。遺跡での観察によれば、表土下 4 m 前後で 10cm 内外の円礫や砂から成る段丘構成礫層が確認された。明瞭な段丘崖をもち、下位の段丘面との比高は 4 ~ 5 m である。

D 面 沖積段丘の古期面である。当面における旧河道や自然堤防などの微高地も一括した。後の氾濫によって島状に取り残されている部分もみられる。川口 II 遺跡は当段丘面に立地している。雪浦付近では、一本木火山礫が確認されているが、遺跡内ではその堆積は認められず、流失したものと考えられる。シルト層の下に小礫と砂による構成礫層が観察された。現在では、その大部分が水田として利用されている。

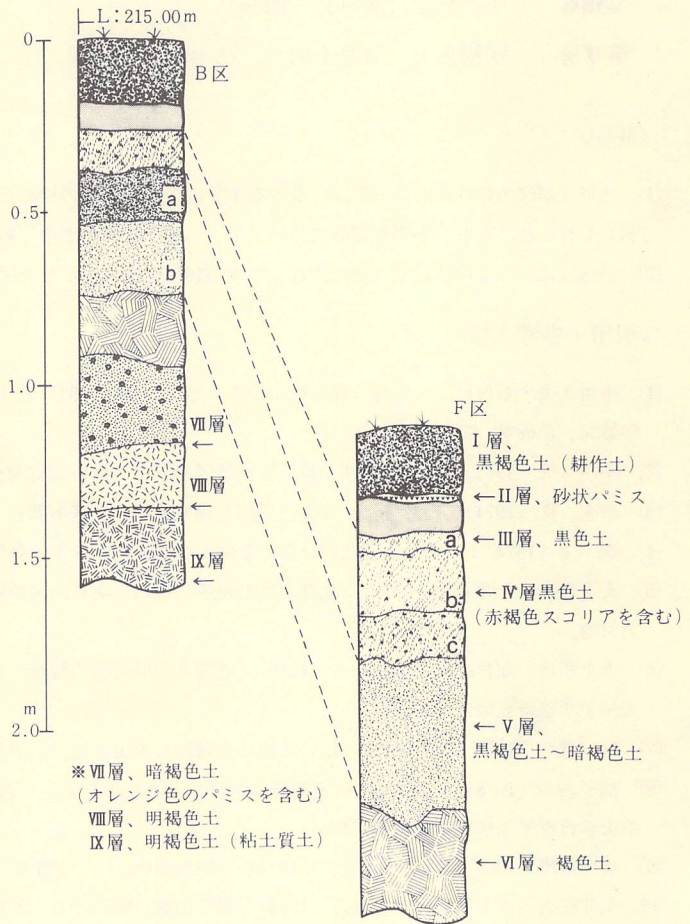
E 面 沖積新期面である。小規模な段丘や氾濫原、旧河道やこれにともなう自然堤防なども一括した。また、沢による山地や丘陵の開析地もこれに含めた。

川口 I 遺跡は、北上川左岸の低位段丘面（標高 215 m 前後）に立地している。段丘の背後は、山地から流れ出す小規模な沢によって扇状地形を呈し、緩斜面となっている。このため、段丘崖下ではいくつかの湧泉が観察された。現地地形面は、南北方向の高低差が 100:1 m とほぼ平坦であるが、遺構検出面である褐色火山灰層は、沢の入る南側で急激な落ち込みをみせ、この間には黒色土が発達している。

第 3 図は、当遺跡における深掘土層断面図である。これを基本層序とした。

第 I 層 黒褐色土（層厚 18 ~ 20cm）耕作土である。

第 II 層 砂状のパミス層で、



第 3 図 土層断面柱状図

落ち込みが始まるD区付近から堆積がみられた。

第Ⅲ層 黒色土（層厚10～13cm）

第Ⅳ層 黒色土（層厚15～40cm） 層中に粒径2～5mmの赤褐色スコリアを含む。F区では、スコリアの包含率によってa～c層に細分した。

第Ⅴ層 B区では、上部の黒褐色土層（a層）から下位の暗褐色土層（b層）へと漸移するが、F区ではほとんど差異は認められなかった。なおb層からは縄文時代前期に位置づけられる土器群が出土している。（層厚35～45cm）

第Ⅵ層 褐色土（層厚35～45cm） 遺構検出面となっている層である。F区の深掘りでは、下位の層は確認できなかった。

第Ⅶ層 暗褐色土（層厚20～30cm） 層中に粒径1～2cmの発泡の良い明褐色パミスを含む。

第Ⅷ層 明褐色土（層厚15～20cm）

第Ⅸ層 明褐色土（層厚不明） 粘土質土である。

<註記>

- (1) 地形分類図の作成にあたっては、2万5千分の1の地形図の検討と空中写真の判読を主体とし、若干の現地調査も行った。なお、不明な部分については、岩手県発行の土地分類図によった。
- (2) 当地域における中位段丘（浜民段丘、中川他1963）は、図示した区域内では認められない。

<引用・参考文献>

- (1) 中川久夫・石田琢二・佐藤二郎・松山 力・七崎 修（1963）：北上川上流沿岸の第四系および地形、地質学雑誌、第69巻、第811号。
- (2) 中川久夫（1981）：第四系、北上川流域地質図説明書、長谷地質調査研究所。
- (3) 徳永 徹（1974）：地形分類、北上山系開発地域土地分類基本調査（沼宮内）、岩手県。
- (4) 磯 望（1974）：北上山地西北部における斜面物質移動、日本地理学会講演要旨。
- (5) 大上和良・土井宣夫（1978）：北部北上低地帯の鮮新一更新両統の層序について、岩手大学工学部研究報告、第31巻。
- (6) 大上和良・畑村政行・土井宣夫（1980）：北部北上低地帯の鮮新一更新両統の層序について（その2）、岩手大学工学部研究報告、第33集。
- (7) 橘 行一（1973）：東八幡平・柏台東部の丘陵地の火山泥流。岩手大学教育学部研究年報、第30集。
- (8) 橘 行一（1978）：「岩手森」・「五百森」の多くの流れ山を生じた岩手火山の縄文期の噴火活動について、岩手大学教育学部研究年報、第38集。
- (9) 高橋信雄（1980）：地形・地質、松尾村長者屋敷遺跡（I）、岩手県埋文センター文化財調査報告書第12集。
- (10) 土井宣夫・川上雄司・大石雅之（1983）：岩手山麓、柳沢浮石・五百森泥流の¹⁴C年代—岩手火山噴出物とそれに関連する堆積物の¹⁴C年代（その1）、岩手県立博物館研究報告、第1号。
- (11) 井上克弘（1982）：東北地方北部の火山灰、考古風土記、第7号。



第4図 岩手町の遺跡位置図

2. 歴史的環境

岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡台帳に登録されている岩手町内の遺跡数は170遺跡である。遺跡の中には時期の重複するものがあり、時期別に延遺跡数をみると210遺跡となる。このうち184遺跡が集落跡や遺物散布地で、時代別では縄文時代が147、弥生時代が16、古代が20である。それ以外は古墳・寺院跡・祭祀遺跡が各1で、これらは古代に属するものと思われる。中世の城館跡は9である。時代や性格の明らかにされていない遺跡は14である。

縄文時代の遺跡147のうち、早期は3遺跡と少ないが、白浜式や寺の沢式に近似した土器が出土している。前期は10遺跡であるが、苗代沢遺跡や尾呂部遺跡からは初頭の丸底や尖底の土器、丹藤遺跡と細沢遺跡からは大木系の土器が出土している。中期としては14遺跡知られているが、そのほとんどからは大木8式が出土し、黒内開拓遺跡からは円筒上層a式が出土している。後期と晩期は遺跡数も多いため、該期全体に属する土器が出土しているものの、両時期とも前葉に属する土器の出土が多いようである。遺跡数は後期32、晩期31である。後・晩期の遺跡としては豊岡遺跡^①やどじの沢遺跡が著名である。豊岡遺跡は昭和30年に草間俊一氏等によって発掘調査^②され、非常に多くの晩期の土器や石器と土偶等を出土している。どじの沢遺跡も同氏によって昭和35年に発掘調査^③されており、検出された4棟の竪穴住居跡は大洞BC式土器を共伴する晩期に属する住居跡として県内では初例である。昭和58年には音無遺跡が東北大学によって発掘調査^④されている。この遺跡は昭和31年に晩期の完形土器が8点出土するなど、後・晩期の土器や石器を出土することで著名である^⑤。当町川口の秋浦地区には秋浦貝塚^⑥と呼ばれる内陸性貝塚があり、中期や後期の土器とともに淡水産貝類の貝殻や獣骨が出土することが知られている。

弥生時代の土器が出土する遺跡は16カ所である。また弥生時代に並行すると言われる北海道を中心とする後北式土器の出土例も1遺跡登録されている。所謂北海道系土器の出土は、実際にはもっと多くの例が知られ、高橋昭治・武田良夫両氏の論文^⑦がある。芦田内遺跡や乙茂内遺跡は、当期の良好な資料が出土したことで著名^⑧である。

古代の土師器や須恵器が出土した遺跡として20カ所知られているが、奈良時代であるか平安時代かは定かでない。古代の遺跡として注目すべきは、埋没しきらない多くの竪穴住居跡が一方井地区を中心に存在することであろう。このことは最初小田島緑郎氏によって注目され、その概要が大正13年に発表されている^⑨。氏によれば、一方井地区の宮沢・葉木田・十二夜・輪台・今松・鴨沢・新田・浮島・土川・御堂地区の仙波堤・久保等10カ所に合計151の竪穴住居跡があるとされている。仙波堤・今松両竪穴群は昭和32年に県の史跡指定を受けている。この遺跡はその後、昭和43年に草間俊一氏によって発掘調査を含む精細な調査が行なわれている^⑩。そ

の他では、沢口遺跡が昭和33年に発掘調査され、奈良時代の竪穴住居跡2棟が発見されている。^⑪
 なお、この時期については草間俊一氏や高橋昭治氏の数多くの報告がある。^⑫

古墳では浮島古墳がある。付近では玉山村の谷地田古墳、西根町の谷助平古墳があり^⑬、これらは古代の竪穴住居跡群を囲むような位置関係を示している。この古墳に最初に注目したのは小田島祿郎氏である。氏はその報告書の中で、大正12年7月に時の内務省史蹟名勝天然記念物調査会考査官であった柴田常恵氏が実地踏査したことや、同年9月にはその時京都大学の考古学教室に教務嘱託で勤務していた梅原末治氏が発掘調査したこと等を記している。^⑭これらの報告書では、本古墳群には14基の古墳が存在することを述べ、さらにその中の1基が既に盗掘されていたことや、一号墳とした墳丘を発掘し、その状況を詳しく報告している。

寺院跡と言われているのは、一方井大森にある「黄金堂遺跡」である。同地の研究者田中定一氏によって礎石列の検出や鉄磬の出土が発表されて後、古代寺院跡の存在が推定されていた。それが昭和58年の発掘調査によって、平安時代の集落跡と寺院跡と推定される掘立柱建物跡が検出されたことから、寺院跡としての可能性が強くなった。^⑮

祭祀遺跡とされているのは一方井大森どじの沢で発見された「小堂跡」である。この遺跡は草間俊一氏によって昭和35年に発掘調査され、小高い丘の頂上部で3間×3間の掘立柱建物跡を検出し、遺物としては須恵器破片、青銅鏡(瑞花双鸞八稜鏡)、小鱈口が出土したことから、この建物跡は平安時代の小規模な堂社跡であろうとしている。^⑯

中世城館跡は9カ所登載されているが、日本城郭大系には15カ所存在すると記載されている。この中には一方井刑部が住し南部信直が出生した城といわれる一方井城(輪台城ともいう)や沼宮内民部が城主といわれる沼宮内城、川口氏の川口城等が含まれる。

当地区では、発掘調査された遺跡が多くあり、また地元の研究者によって多くの遺物が表面採集され、それらが地元へ保存され、その状況が報告書として刊行されていることが特筆される。^⑰

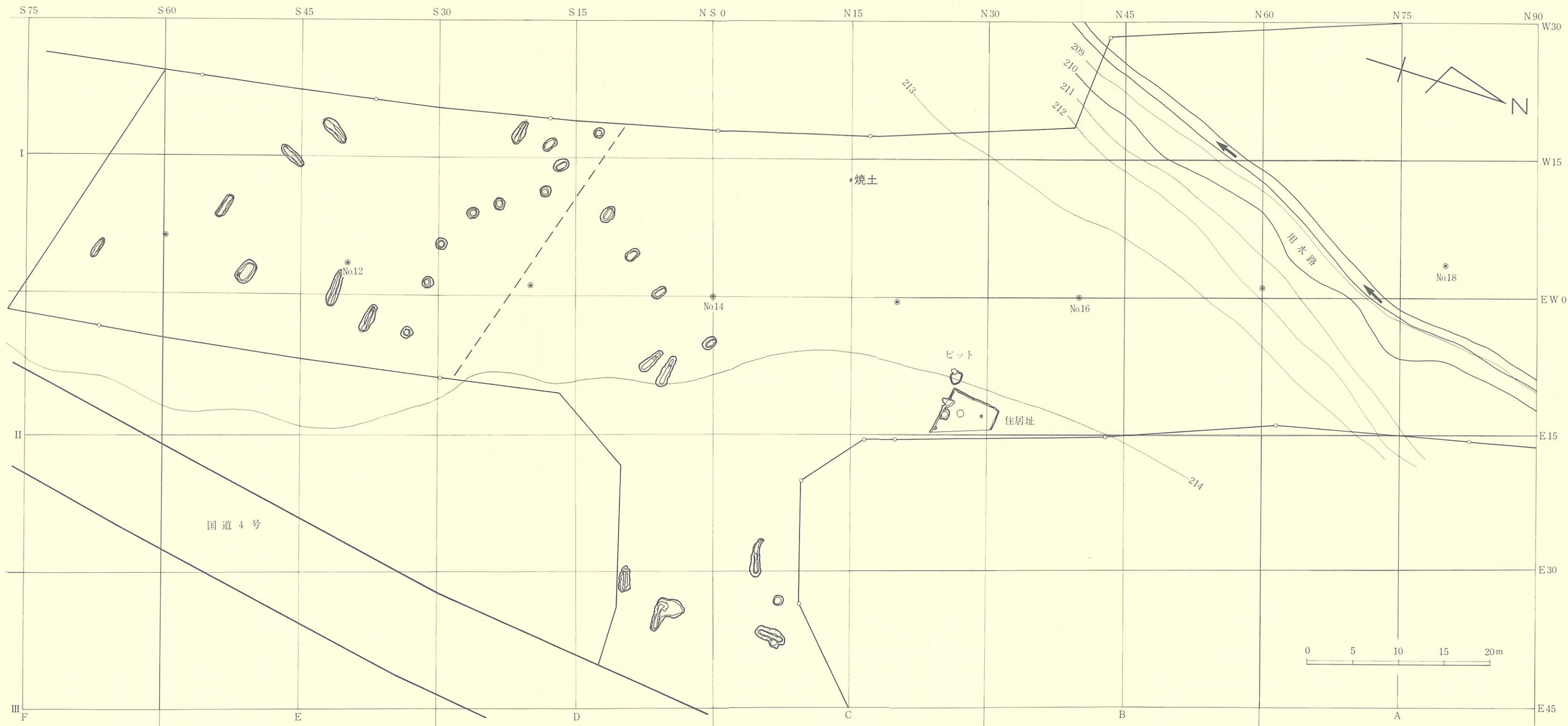
- | | | | |
|------|--|-----------|-------|
| ①⑤⑥⑧ | 高橋昭治「豊岡遺跡」岩手町遺物出土表 | 高橋昭治 | 1965年 |
| ② | 草間俊一「岩手県岩手町豊岡遺跡」岩手大学学芸学部研究年報第17巻 | 岩手大学 | 1960年 |
| ③ | 草間俊一「岩手町大森どじの沢遺跡」岩手大学教養部報告No.1 | 岩手大学 | 1966年 |
| ④ | 報告書未刊 | | |
| ⑦ | 高橋昭治・武田良夫「岩手県における後北式文化」北奥古代文化No.13 | 北奥古代文化研究会 | 昭和57年 |
| ⑨ | 小田島祿郎「県下に於ける竪穴及びチャシに関するもの其一」史蹟名勝天然記念物調査報告4 | 岩手町教育委員会 | 昭和34年 |
| ⑩ | 草間俊一「仙波堤・今松遺跡」 | 岩手町教育委員会 | 昭和34年 |
| ⑪ | 草間俊一「浮島古墳・沢口遺跡」 | 岩手町郷土史研究会 | 昭和34年 |
| ⑫ | ⑩⑪と高橋昭治「北上川上流地域の考古学資料」 | 北進考古学資料室 | 1975年 |
| ⑬ | 昭和49年岩手大学で発掘調査、現地に標識がある。(報告書未刊) | | |
| ⑭ | 草間俊一「岩手県西根村谷助平古墳」岩手大学学芸部年報第18巻 | 岩手大学 | 昭和36年 |
| ⑮ | 小田島祿郎「県北における古墳の2・3」史蹟名勝天然記念物調査報告4 | 岩手県 | 大正14年 |
| ⑯ | 梅原末治「陸中一方井古墳群の調査」歴史と地理第13巻5号 | 史学地理同好会 | 大正13年 |
| ⑰ | 「黄金堂遺跡」岩手県埋蔵文化財発掘調査略報 | 岩手県埋文センター | 昭和58年 |
| ⑱ | 草間俊一「岩手町一方井大森どじの沢小堂跡」岩手史学研究No.35 | 岩手史学会 | 昭和35年 |
| ⑲ | 本堂寿一編「日本城郭大系2「岩手県」 | 新人物往来社 | 昭和55年 |
| ⑳ | 高橋昭治氏による遺物の収集と展示公開、報告書の刊行 | | |

第1表 岩手町内の遺跡一覧表

(昭和59年1月31日現在の県教委文化課遺跡台帳による)

整理番号	遺跡登録番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物	備考
1	J E-77-1066	ネズバタ	散布地	大字一方井		
2	J E-87-0384	石羽根	"	大字御堂字前ヶ沢	土器、縄文中期末～晩期、石器、フレーク	
3	J E-87-2289	湯の沢	"	大字一方井字黒石溝の沢	土器、縄文晩期	
4	J E-87-2297	豊岡	"	" 字久保	土器、縄文晩期	
5	J E-88-0097	前ヶ沢	"	大字御堂字前ヶ沢	土器、縄文中・晩期、弥生、石器、フレーク	
6	J E-88-2092	茂ノ口	"	大字一方井字黒石湯の沢	土器、縄文晩期	
7	J E-96-1323	大股開拓	"	" 字大股開拓	縄文後期、土器、壺、土偶、打製石斧、石鏃、石匙	
8	J E-96-2138	黒内開拓	"	" 字黒内	土器	
9	J E-96-2259	黒内V	集落跡	" 字葉木田	縄文中～後期土器	
10	J E-96-2265	黒内VI	"	" "	縄文式土器	
11	J E-96-2361	黒内XII	"	" 字黒内	縄文中期円筒系土器	
12	J E-96-2391	黒内	"	" 字葉木田	縄文式土器(時期不明)	
13	J E-97-0052	窪	散布地	大字黒石字窪	縄文後期(安行2式併行) 香炉型土器	
14	J E-97-0129	坊主長峯	"	" 字坊主長峯	土器、縄文晩期	
15	J E-97-0191	弘	"	" 字弘沢	土器、縄文晩期	
16	J E-97-0272	ニカルモチ	"	大字一方井字黒石ニカルモチ	土器、縄文後・晩期	
17	J E-97-1149	道遠	"	" 字黒石道遠	土器、縄文後期	
18	J E-97-1193	甘酒	"	" 字黒石甘酒	土器、加曾利BIII 2式1ヶ、大木9～10	
19	J E-97-1311	長田屋敷	"	" "		
20	J E-97-2181	土師ヶ沢	集落地	" 第16地割	縄文晩期土器、石器	
21	J E-97-2374	細沢	散布地	" "	縄文後期土器(壺)	
22	J E-98-1383	登戸	"	大字沼宮内字登戸	縄文土器	
23	J E-98-2331	尾呂部I	"	" 字尾呂部	弥生、縄文前期縦横土器	
24	J E-98-2381	尾呂部館	館跡	" "		
25	J E-98-2382	尾呂部II	散布地	" "	縄文土器、土師器	
26	J E-99-2183	横沢	"	大字沼宮内	土器、縄文後・晩期	
27	K E-06-0197	倍田II	"	大字黒内字倍田	縄文土器	
28	K E-06-0208	倍田III	"	" 第1地割字倍田	縄文式土器	
29	K E-06-0214	黒内VIII	集落跡	" " "	土器、縄文時代中期	
30	K E-06-0215	倍田IV	散布地	" " "	縄文式土器、後期? 晩期	
31	K E-06-0217	倍田V	"	" " "	縄文式土器	
32	K E-06-0219	宮沢I	"	大字葉木田第1地割字宮沢	縄文式土器	
33	K E-06-0227	黒内VII	集落跡	大字黒内第1地割字倍田	縄文土器、土師器	
34	K E-06-0245	黒内IX	"	大字黒内	土器、縄文時代中期	
35	K E-06-0262	黒内XIII	散布地	" "	縄文土器	
36	K E-06-0301	上黒内	"	大字葉木田第1地割字宮沢	縄文土器中期? 縄文土偶、フレーク	
37	K E-06-0311	黒内XI	集落跡	" " "	土器、弥生時代、天王山系土器	
38	K E-06-0332	宮沢II	散布地	" " "	縄文式土器、石器類、フレイク	
39	K E-06-0349	黒石薬師前	"	" 字黒石	土器	
40	K E-06-0362	宮沢III	"	" 第1地割字宮沢の字黒内	縄文式土器	
41	K E-06-0368	宮沢IV	"	" " "(の字御堂)	縄文土器	
42	K E-06-0371	黒内IV	集落地	" 第1地割	土師器	
43	K E-06-0398	御嶽I	散布地	大字一方井第1地割字御嶽	縄文土器(後期)?	
44	K E-06-1118	倍田I	集落地	大字黒内字倍田	縄文前期土器	
45	K E-06-1204	キャナイ	"	" "	縄文中期土器、石器	
46	K E-06-1238	黒内開拓B地区	散布地	" "	縄文中・晩期	
47	K E-06-1266	新建(新宅)	集落地	" "	土器、縄文中～後期	
48	K E-06-1289	宮沢V	散布地	大字葉木田字宮沢	土器、縄文前・晩期	
49	K E-06-1307	御嶽II	"	大字一方井第1地割字御嶽	縄文式土器	
50	K E-06-1315	黒内III	"	大字黒内	縄文式土器	
51	K E-06-1316	御嶽III	"	大字一方井第1地割字御嶽	縄文土器	
52	K E-06-1339	岩沢	散布地(集落?)	" " "	縄文式土器	
53	K E-06-1343	黒内II	散布地	大字黒内	縄文式土器	
54	K E-06-1344	黒内I	集落跡	" "	"、土師器	
55	K E-06-1347	黒内XIV	散布地	" "	"	
56	K E-06-2215	クラ	"	" "	縄文土器	
57	K E-06-2258	山王	"	大字葉木田字山王	縄文前期土器	
58	K E-06-2332	蟹沢	集落跡	大字葉木田(蟹沢)	土師後期土器、鏃、鏃(?)	
59	K E-06-2361	山王下	散布地	" "	縄文中期土器	
60	K E-07-0000	岩佐	"	大字一方井字黒石岩佐		
61	K E-07-0034	妻の神I	"	大字葉木田	土器、縄文後期	
62	K E-07-0037	"	IV 集落跡	" 字黒石(妻の神)	土器、縄文晩期	
63	K E-07-0080	御嶽III	散布地	大字一方井御嶽	縄文土器	
64	K E-07-0088	妻の神II	集落跡	大字一方井第2地割字十二夜	土器、縄文晩期	
65	K E-07-0111	大森とじの沢小堂跡	祭祀跡	大字葉木田第16地割	須恵器、瑠花双鬘八稜鏡、鰐口、板状鉄器	
66	K E-07-0183	ヌカヅカ	散布地	大字一方井大森(ヌカヅカ)	土器、亀ノ岡式土器片、マガタマ、石器、摩製石斧、石棒	
67	K E-07-0208	大森東の沢	"	" 第7地割字大森	縄文晩期土器、土偶、土棒、石鏃	
68	K E-07-1001	十二夜II	"	" 第12地割字十二夜	縄文土器(後期)	
69	K E-07-1002	ジヨージ	"	" 第2地割字十二夜	縄文晩期土器	
70	K E-07-1010	十二夜III	"	" 第12地割字十二夜	縄文式土器	
71	K E-07-1018	妻の神III	集落跡	" 第2地割字十二夜	土器、縄文晩期	
72	K E-07-1023	十二夜I	散布地	" "	土器、縄文晩期	
73	K E-07-1044	"	IV	" 第12地割字十二夜	縄文土器後期～晩期?、土師器	
74	K E-07-1055	"	V	" "	縄文土器	
75	K E-07-1065	妻の神I	"	" 第2地割字十二夜	土器、縄文前・晩期土器	
76	K E-07-1076	十二夜VI	"	" 第12地割字十二夜	"	
77	K E-07-1079	"	VII	" "	縄文土器	
78	K E-07-1088	大森II	"	" 第16地割字大森	縄文土器	
79	K E-07-1095	十二夜VIII	"	" 第2地割字十二夜	縄文土器	
80	K E-07-1146	トウヤモリ	"	" 字大森	縄文中期土器、石匙、石鏃	
81	K E-07-1193	黄金堂寺院跡	"	" 第16地割字大森(黄金堂)	土師器、縄文土器	
82	K E-07-2044	四本木	散布地	" 第3地割字四本木	縄文早・晩期土器、須恵器	
83	K E-07-2109	大森III	"	" 第16地割字大森(黄金堂)	縄文土器	

整理番号	遺跡登録番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物	備考
84	KE-07-2113	大森 I	散布地	大字一方井第16地割字大森(黄金堂)	縄文片	
85	KE-07-2165	土蔵館	集落跡	" 字大森(土蔵館)	縄文晩期土器	
86	KE-07-2227	大森 IV	散布地	" 第16地割字大森(黄金堂)	縄文土器	
87	KE-07-2368	千刈田 I	"	大字久保第4地割字千刈田	縄文土器、土師器	
88	KE-08-0275	川原木	"	大字五日市字川原木	縄文土器	
89	KE-08-1184	五日市	"	" 字五日市	"	
90	KE-08-1192	土峰 I	"	" 第2地割字土峰	"	
91	KE-08-2053	千刈田 II	"	大字久保第4地割字千刈田	縄文片、土師器、鏝片	
92	KE-08-2112	土峰 II	"	大字五日市第7地割字土峰	縄文片	
93	KE-08-2141	宮手	"	大字久保第9地割字宮手	"	
94	KE-08-2155	天神前	"	大字五日市第7地割字天神前	"	
95	KE-08-2272	沼宮内城館	跡	大字沼宮内第11地割字寺山	土器、石棒、石器	
96	KE-08-2293	城山	散布地	大字沼宮内字寺山	縄文土器	
97	KE-09-0158	上横沢	"	大字御堂字高森	土器、縄文後・晩期	
98	KE-16-0319	中田の坂	集落跡	大字一方井字中田(竹花)	"	
99	KE-16-0322	飼鷹 II	"	" 第8地割字水無	土器	
100	KE-16-0362	" I	"	" "	土師器	
101	KE-16-2267	ペゴ屋敷 I	散布地	大字土川第4地割字新田	"	
102	KE-17-0026	輪台	"	大字一方井字輪台	"	
103	KE-17-0029	一方井小学校裏	集落跡	" 字町裏	土師器、須恵器	
104	KE-17-0033	打越	散布地	" 字打越	縄文土器、土師器	
105	KE-17-0047	輪台城跡館	跡	" 字輪台	"	
106	KE-17-0100	フルイ役場	集落跡	" 字中田	土師器	
107	KE-17-0175	ざるくぼ	散布地	" 字坊	縄文晩期土器	
108	KE-17-1010	今松	集落跡	" 第7地割	土師器	S 32. 7. 19 黒指定史跡
109	KE-17-1120	大明神館	跡	" 字土川(松長詣神社)	"	
110	KE-17-1148	仙波堤	集落跡	大字久保第7地割字沢口	土師器、須恵器	S 32. 7. 19 黒指定史跡
111	KE-17-1224	沢口	"	" 字沢口	土師器、切子玉、磁石、紡錘車、土製勾玉	
112	KE-17-2018	鴨沢	散布地	大字土川字鴨沢	土師器	
113	KE-17-2214	久保	"	大字久保字落合	"	
114	KE-17-2363	内の沢	"	大字子抱第14地割字長日向	"	
115	KE-18-0152	石神下 II	"	大字五日市	縄文土器	
116	KE-18-0170	" I	"	" "	弥生土器	
117	KE-18-0185	沼宮内	"	大字沼宮内第16地割字加徳沢	"	
118	KE-18-0302	大坊 I	"	大字大坊	縄文(後)土器	
119	KE-18-0306	" III	"	" "	"	
120	KE-18-0320	" II	"	" "	弥生式土器	
121	KE-18-0332	大坊館	跡	" "	"	
122	KE-18-0346	大坊 IV	散布地	" "	縄文土器	
123	KE-18-1009	石神下 III	"	大字五日市	江別式土器	
124	KE-18-1045	苗代沢	"	" 字苗代沢	土器、縄文晩期、古代土器	
125	KE-18-1126	江刈内 I	"	大字江刈内第6地割字八口	弥生式前期土器、縄文式晩期土器、石鍬	
126	KE-18-1147	" II	"	大字江刈内	弥生土器	
127	KE-18-1159	江刈館	跡	" "	"	
128	KE-18-2019	大袋	散布地	大字子抱第5地割字笹川久保	縄文前期、後期土器	
129	KE-18-2059	乙茂内 I	"	大字江刈内	土師器	
130	KE-18-2122	一辺沢	"	" "	縄文(後)土器、弥生土器	
131	KE-18-2144	乙茂内 II	"	" "	縄文(後)土器	
132	KE-18-2164	" III	"	" "	"	
133	KE-26-0372	浮島古墳群	古墳	大字土川字浮島	列葬品、土師器、直刀、鉄楯	S 34. 3. 17 黒指定史跡
134	KE-27-0018	オオヤモリ	散布地	大字土川字土川	土師器	
135	KE-27-0049	浮島ガシヤ(蟹沢)	"	" 字浮島	縄文土器(早期、貝から文)	
136	KE-27-0185	桐ヶ久保	"	" 字桐ヶ久保	土器、縄文早・前期(貝殻文様)	
137	KE-27-1111	藪場平	"	" 字土川	土器	
138	KE-27-1152	桐ヶ久保 II	"	" "	土器、縄文後期	
138	KE-27-2321	川口 II	集落跡	大字子抱17地割字岩崎地内	縄文後期	
140	KE-28-0073	子抱館	跡	大字子抱	"	
141	KE-28-0082	子抱	散布地	大字子抱第6地割字川原新田	土器、縄文後・晩期、石鍬、石匙、石斧、フレーク	
142	KE-28-0250	乙茂内 IV	"	大字江刈内第2地割乙茂内	弥生式前期土器、石棒、石皿、石鍬	
143	KE-28-1009	芦田内 I	集落跡	大字川口	縄文(晩)土器、弥生土器	
144	KE-28-1120	" II	"	" "	"	
145	KE-28-1123	" III	散布地	" "	" "	
146	KE-28-1125	" IV	"	" "	" "	
147	KE-28-1136	" V	"	" "	縄文(後)土器、弥生土器	
148	KE-28-1168	" VI	"	" "	" "	
149	KE-28-1250	" VII	"	" "	縄文土器、 "	
150	KE-28-2009	丹藤	"	" 第18地割山下	縄文式土器前・後期土器	
151	KE-29-1234	大平	"	" 字大平	"	
152	KE-37-1317	草桁	"	" 第12地割字二ツ森	土器、縄文	
153	KE-37-1337	二ツ森 I	"	" "	土器、縄文、土師器、フレーク	
154	KE-37-1346	" II	"	" "	土器、縄文	
155	KE-37-0387	川口 I	集落跡	" "	縄文土器、石器、土師器	
156	KE-38-0039	秋葉 IV	"	大字川口字秋葉	縄文(前・中)土器	
157	KE-38-0112	" I	散布地	" "	土師器	
158	KE-38-0126	" III	"	" "	縄文(後・晩)土器	
159	KE-38-0131	" II	集落跡	" "	縄文(後)土器、土師器、貝	
160	KE-38-1041	草桁	散布地	" 字草桁	土器、縄文	
161	KE-38-1105	高梨	集落跡	" 字高梨	土器、縄文後～晩期、石器	
162	KE-39-2218	エゾ森館	跡	" 字北山形枇杷	"	
163	KE-20-1116	態の権現	散布地	" 第44地割	土器	
164	KE-21-2168	大金形	沢	大字川口大金沢	土器	
165	KE-30-1201	穴沢	"	" 穴沢	土器	
166	KE-30-2011	南山形中学校裏	"	" 字南山形	縄文晩期土器、石斧、石鍬	
167	KE-30-2059	桜	"	" 字桜	土器、土偶、石錘、摩製石斧	
168	KE-30-2099	大渡コソ森跡館	跡	" "	"	
169	KE-40-1382	細金	散布地	大字川口字南山形	土器、縄文晩期、フレーク	
170	KE-41-2298	カバユリ	"	" 字穀蔵(カバユリ)	縄文前期土器	



第5図 遺構配置図

III 検出された遺構と遺物

I 竪穴住居址

CIIa3 住居址 遺構（第6.7図・写真図版2）

〈検出〉 a区東側境界線際に発見され、東側の一部は調査区外にのびる。検出面は表土下50cmの黒褐色土上面で、砂状バミスを含む黒色土の広がりとして発見された。〈規模・形状〉西辺と南辺はそれぞれ5.5mである。北辺の東側と東辺は調査区外のため不明であるが、方形と思われる。〈埋土〉上から順に①住居址の中央付近に広く堆積する黒褐色土で、砂状のにぶい黄褐色の火山灰の純層をブロックで含む層である。この火山灰ブロックはレンズ状に並んでいる。②埋土の大部分を占める層で、黒色土である。③住居址の南側の床面直上を覆っている層で、黒褐色の汚れた火山灰である。④住居址の北側床面直上や壁近くに堆積する褐色の汚れた火山灰である。⑤壁際に見られ、しまりなく軟かい。一部に汚れた火山灰を含んでいる。〈床面〉褐色土と黒褐色土を混合した汚れた火山灰で全面貼床している。貼床はカマド前面では20cmほどの厚さで、他はうすい。南壁東側近くでは特にうすく、掘り込みが浅かったようである。床面はあまりかたかく小さな凹凸があるが、貼床の厚いカマド前面はかなり硬い。また貼床が特にうすい南壁東側付近は非常に硬い。〈周溝〉西壁から南壁にかけて幅10cm前後、深さ4～9cmで存在するが、北壁では溝状でなく杭跡の列となっている。南壁東側では周溝がなく前述の非常に硬い床に連続しており、出入口であったことが考えられる。〈壁高〉南壁で32cm、北壁で35cm、西壁で25～30cmである。〈柱穴〉南壁際に2基あり、カマド西袖に接したものと出入口と推定される所の東側にある。また北壁・西壁それぞれから1.5mの位置に1基ある。柱穴は4基あると思われるが、他は調査区外にあると推定される。柱穴規模はP₁：径27×24cm、深さ70cm、P₂：径30×22cm、深さ85cm、P₃：径30×18cm、深さ76cmである。埋土はやわらかい暗褐色土で、掘り方と柱あたりの区別はつかない。

〈カマド〉南壁西寄りにある。南西隅から1.5mである。袖部は1mの幅で三角形状に長さ80cmほどの粘土などの堆積となって残存し、崩落している。礫を芯として粘土や火土灰で固めて構築したと思われ、西側に30×20×15cmほどの礫があり、貼床の土でおさえている。東側の袖の礫は失われている。カマドの前面には長さ30cm前後の礫が十数個あり、カマドの構成礫であったことも考えられる。カマドの燃焼部は壁から80cmの位置にあり、直径55cmほどの円形に焼土が形成され最大厚8cmで時計皿状になっている。燃焼部の掘り込みは不明である。焼土の上には礫や土器片があった。煙道は壁から50cmほど突出しており、約18度の上り勾配になってい

る。埋土は暗褐色土で、炭化物及び焼土塊を多量に含んでいる。埋土の一部には天井部の残存と思われる焼土粒を含む粘土塊がある。^{*}炭化物の放射性炭素年代測定結果は1550±110でA.D.400年であった。この炭化物は当住居址構築以前のものである。

〈ピット〉カマド東側にある。開口部は長径120cm、短径90cmの楕円形である。底面は直径約75cmの円形である。深さは35cmである。埋土の大部分は褐色の汚れ火山灰で、上部中央付近には3層のレンズ状の堆積があって、その上位は粘土質の褐色土、中位は炭化物・焼土・灰を含む暗褐色土、下位は炭化物・灰を含む黒褐色土である。カマドの灰などをすてたことも考えられる。〈焼土〉カマドの前面近くにあり、現地性のものである。地床炉かどうか不明である。長径70cm、短径50cmの楕円形を呈し、焼土の最大厚は7cmほどで、貼床に形成されている。

出土遺物（第15図）

出土した遺物は、土器と鉄製品である。土器には、埴形のものや甕形のものがある。いずれもカマドの中や、周辺から出土した。甕形土器は、小破片で実測はできなかった。ロクロ不使用のもので、口縁部がわずかに外にひねり出されている。体部は、粗いヘラケズリ調整が施こされている。

〈埴形土器〉（第15図1）

ロクロ成形された台付埴である。体部は、内彎ぎみに立ち上がる。台部は、切り離し後に付けたもので内部は粗くヘラケズリされているため、底部の切り離し技法は不明である。器面は内外面ともヘラミガキ調整されており、内面は調整後黒色処理されている。丁寧にヘラミガキ調整されていることから、外面も黒色処理が施されていたものと考えられるが、一部をのぞいて消失している。

〈鉄製品〉（第15図2）

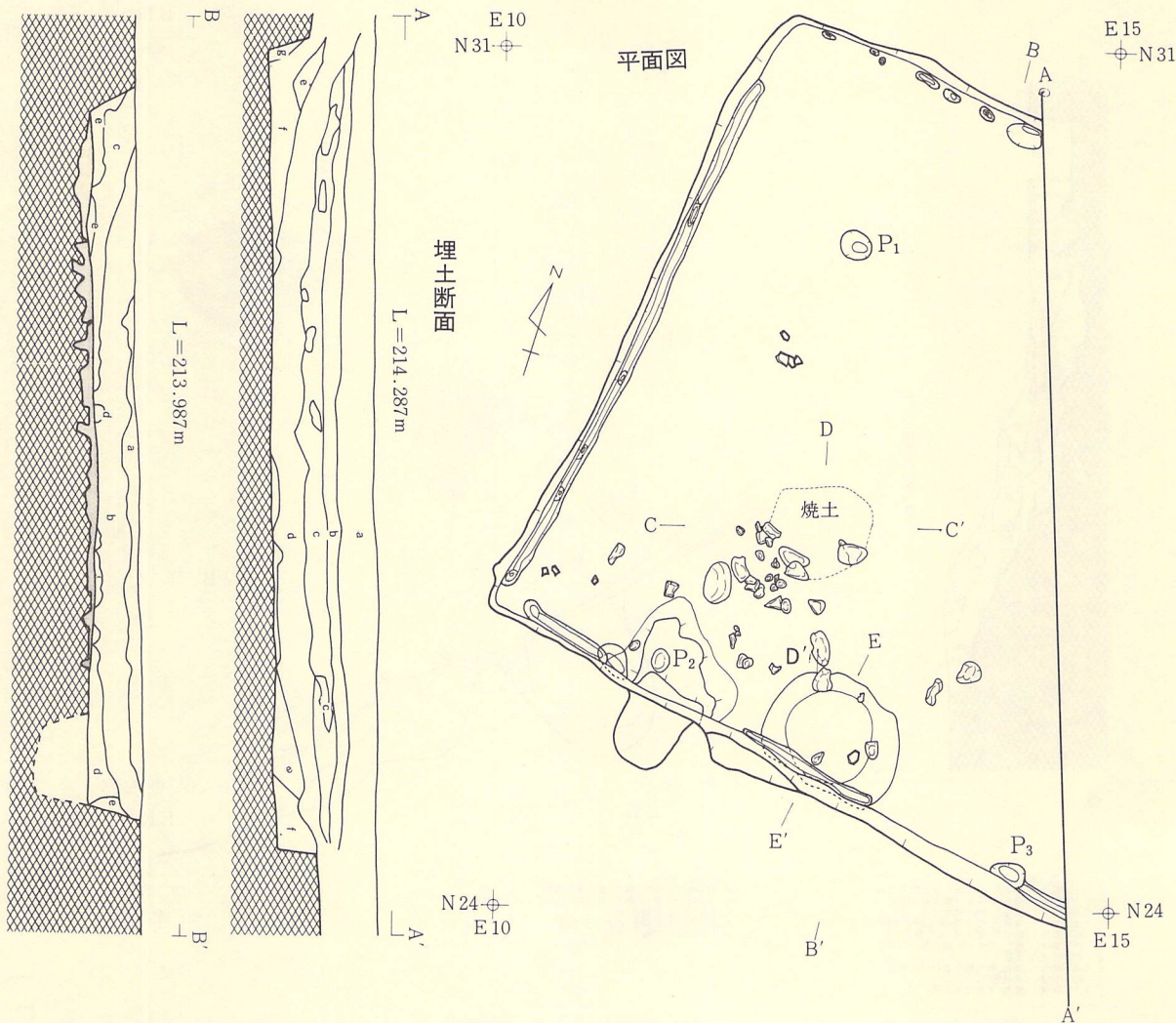
鑿根形の鉄鏃と考えられる。現存長は14.5cmを測る。鏃のため身と篋被の境は不明である。身幅は0.8cm、篋代長は5.7cmを測る。篋被・篋代部の断面形は長方形を呈す。

時期 平安時代、11世紀頃の住居址と思われる。

2. 焼土遺構

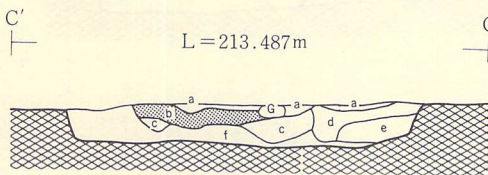
Cif5焼土遺構（第8図・写真図版3）

調査区の西寄りの地点・地表下85～90cmの暗褐色土層で検出された。焼土規模は長径35cm、短径30cmで楕円形を呈し、上部には炭化物が認められた。焼土は皿状に形成され、最大厚は4cmほどである。焼成変化は下位の明褐色土層まで及んでいる。この付近からの出土遺物は極めて少ない。この層は遺物が出土する層から30～40cm下位にあたる。層序から縄文時代の古い時期のものと思われるが、詳細は不明である。

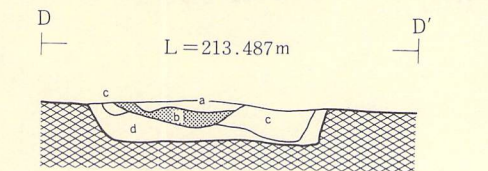


- A-A'
- a 7.5 YR2/2 黒褐色 耕作土
 - b 7.5 YR2/1 黒色
 - c 7.5 YR2/2 黒褐色 砂質パミスを含む
 - d 7.5 YR5/4 緑・褐色 砂質パミスの純層
 - e 7.5 YR1.7/1 黒色
 - f 7.5 YR2/3 極暗褐色 汚れた火山灰
 - g 7.5 YR5/4 暗褐色 汚れた火山灰
 - h 7.5 YR5/8 明褐色

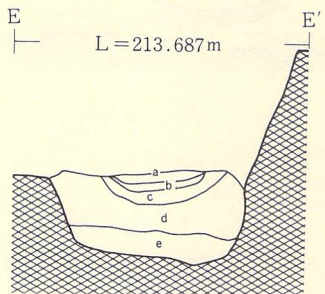
- B-B'
- a 10 YR2/2 黒褐色 砂質パミス(一部純層)を含む
 - b 10 YR1.7/1 黒色
 - c 10 YR4/6 褐色 汚れた火山灰
 - d 10 YR3/2 黒褐色 汚れた火山灰
 - e 7.5 YR5/8 明褐色



- C-C'
- a 7.5 YR4/4 褐色 焼土・炭化物を含む
 - b 2.5 YR4/8 赤褐色 焼土
 - c 10 YR3/4 暗褐色 炭化物を含む汚れた火山灰
 - d 10 YR4/6 褐色 汚れた火山灰
 - e 10 YR2/4 暗褐色 汚れた火山灰
 - f 7.5 YR5/8 明褐色



- D-D'
- a 7.5 YR4/4 褐色 焼土・炭化物を含む
 - b 2.5 YR4/8 赤褐色 焼土
 - c 10 YR3/4 暗褐色 炭化物を少量含む汚れた火山灰
 - d 7.5 YR5/8 明褐色 地山

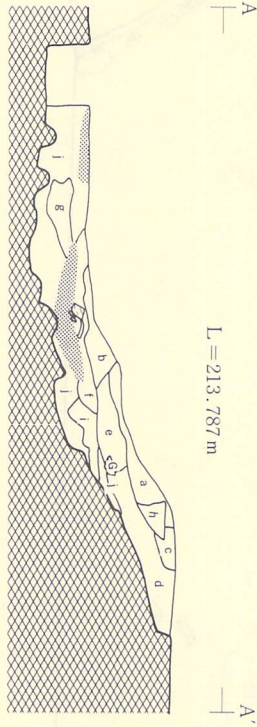


- E-E'
- a 10 YR4/4 褐色 粘土質土
 - b 7.5 YR3/3 暗褐色 焼土・炭化物を含む
 - c 7.5 YR2/2 黒褐色 炭化物を含む
 - d 7.5 YR4/4 褐色 汚れた火山灰
 - e 7.5 YR2/4 暗褐色

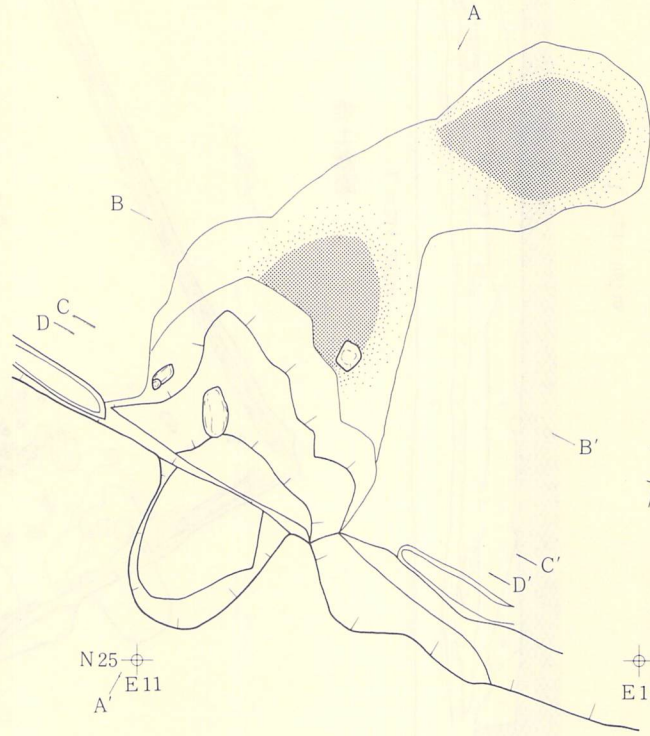
焼土断面

ピット断面

第6図 C II a 3住居址

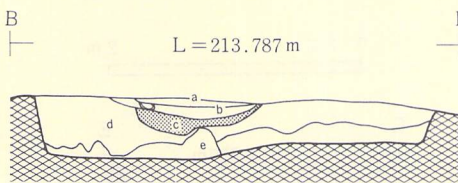


L = 213.787 m

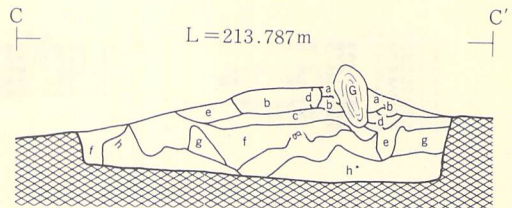


- A-A'
- a 7.5YR3/3 暗褐色 わずかに焼土粒を含む
 - b 7.5YR4/4 褐色 わずかに焼土粒を含む
 - c 7.5YR3/2 黒褐色 焼土塊を含む
 - d 7.5YR3/4 暗褐色 焼土塊・炭化物を多量に含む
 - e 10YR3/4 暗褐色 焼土塊・炭化物を含む
 - f 10YR4/4 褐色 焼土・灰・炭化物から成る
 - g 10YR7/1 黒色
 - h 7.5YR4/6 褐色 焼土粒を含む粘土質土
 - i 10YR2/2 黒褐色
 - j 7.5YR4/4 褐色 汚れた火山灰

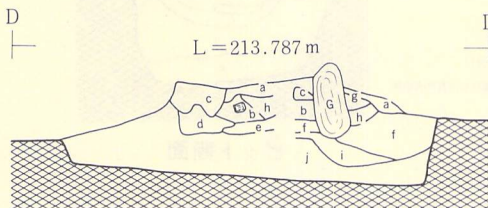
- B-B'
- a 7.5YR5/8 褐色 焼土・炭化物を含む
 - b 10YR6/6 褐色 焼土・炭化物・アスファルトを含む
 - c 2.5YR4/8 赤褐色 焼土
 - d 7.5YR3/3 暗褐色 汚れた火山灰
 - e 7.5YR5/6 明褐色 地山



L = 213.787 m



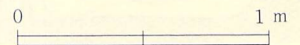
L = 213.787 m



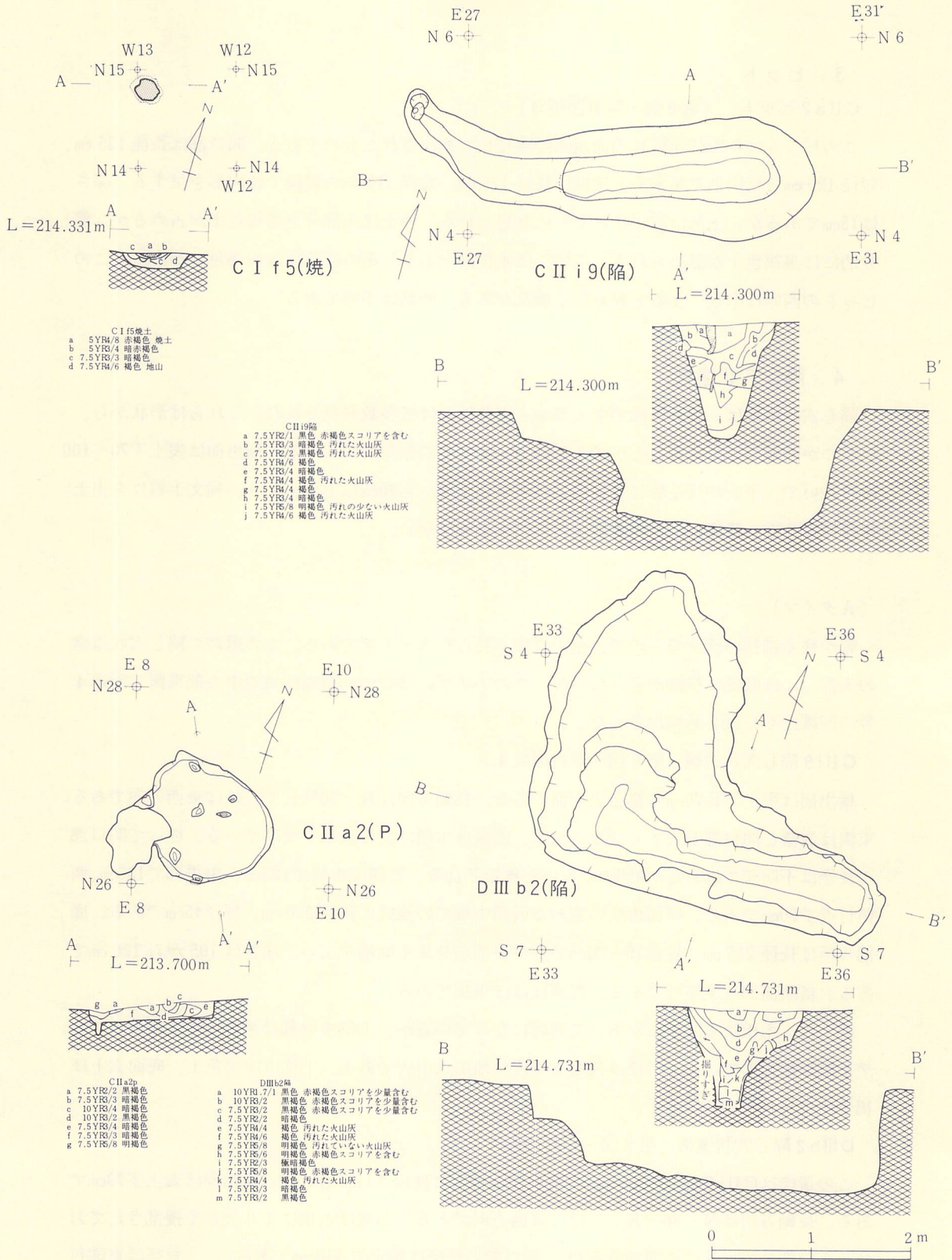
L = 213.787 m

- D-D'
- a 7.5YR3/4 暗褐色 焼土・炭化物を含む
 - b 7.5YR4/6 褐色 焼土粒を多量に含む
 - c 7.5YR5/8 明褐色 粘土質土
 - d 10YR6/6 黄褐色 汚れの少ない火山灰
 - e 10YR2/2 黒褐色
 - f 7.5YR3/4 暗褐色 汚れた火山灰
 - g 7.5YR2/3 暗褐色 汚れた火山灰
 - h 7.5YR3/4 暗褐色 焼土粒を少量含む
 - i 7.5YR5/6 明褐色 わずかに汚れている
 - j 7.5YR5/8 明褐色 粘土質土

- C-C'
- a 7.5YR3/3 暗褐色 焼土・炭化物を少量含む
 - b 7.5YR3/2 黒褐色 焼土・炭化物を含む
 - c 7.5YR4/4 褐色 焼土粒を多量に含む
 - d 7.5YR4/6 褐色 焼土を少量含む粘土質土
 - e 10YR3/4 暗褐色 焼土・炭化物を少量含む
 - f 7.5YR3/4 暗褐色 汚れた火山灰
 - g 7.5YR5/6 明褐色
 - h 7.5YR5/8 明褐色 粘土質土



第7図 C II a 3住居址カマド



第8図 C I f 5 焼土遺構・C II a 2 ピット・C II i 9・D III b 2 陥し穴状遺構

3. ピット

CIIa2 ピット (第8図・写真図版3)

このピットはCIIa3住居址の南西隅に隣接して検出されたものである。開口部は長径 135 cm、短径 120 cmで楕円形を呈する。底部は長径 125 cm、短径 110 cmの規模で楕円形を呈する。深さは15cmであるが、上部は前平されたものと思われる。埋土は大部分を暗褐色土が占めるが、部分的には黒褐色土が認められる。北側には木根跡があり、その部分には明褐色土がある。このピットの西側は木根によると思われる攪乱がある。時期は不明である。

4. 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は、調査区域の中央部から南側にかけて多数発見された。これらは形状から、いくつかの類型に分けることができるので、次にその類型別に述べる。検出面は表土下70~100 cmぐらいで、平安時代住居址を検出した黒褐色土層から20cm以上深くなり、縄文土器片を出土する面よりも一段深い。どの遺構からも出土遺物はない。

[Aタイプ]

幅が狭く細長い溝状のもので、県下に広く見られるタイプである。この遺跡の陥し穴状遺構の大部分には底部に杭跡が見られるが、このタイプにはない。調査区域の中央部東側(国道4号の西端近く)に2基検出された。

CIIi9 陥し穴状遺構 (第8図・写真図版4)

検出面は表土下約70cmの褐色土上面である。長軸方向はN-70°-Eで、ほぼ東西方向である。東側は崩落し開口部が大きくなっており、西側は木根による攪乱を受けている。従って開口部の長径は不明確ではあるが290cmぐらいと推定される。短径は東側で125cm、中央部で105cm、西側付近で80cmである。壁面角度の変わる所謂中端での規模は長径 220 cm、短径45cmである。底部規模は長径 215 cm、短径15~30cmで、中央部がせまく両端が広い。深さは 105 から 120 cmである。横断面形はV字状である。底面はほぼ平坦である。

埋土は、木根による攪乱があって複雑になっているが、上位中央部は黒色土で赤褐色スコリアを極少量含んでいる。中位は褐色土で汚れ地山火山灰である。下位は明褐色土、底面直上は褐色土で汚れ火山灰である。

DIIIb2 陥し穴状遺構 (第8図・写真図版4)

この遺構はCIIi9 陥し穴状遺構の南東10m付近に検出されたもので、検出面は表土下70cmである。長軸方向はN-86°-Eで、ほぼ東西方向である。西側は木根により大きく攪乱されており、その部分の形状は不明であるが、開口部の長径は推定で 350 cmである。短径は東端付

近で85cmである。中端での規模は長径 320 cm、短径は中央部35cm、東端部65cmである。底部規模は長径 280 cm、短径は中央部で12cm、両端部で35cmである。深さは東側で80cm、西側で 105 cmである。横断面形は Y 字状である。底面はほぼ平坦である。

埋土は、上位中央部が黒色土～黒褐色土で赤褐色スコリアを極少量含んでいる。上位壁際は褐色土で汚れ火山灰である。中位はその褐色土が入り込む他極暗褐色土が見られる。下位は褐色土～暗褐色土の汚れ火山灰であり、底面直上は黒褐色土になっている。

〔Bタイプ〕

平面形は A タイプ同様溝状を呈するが、幅が広く底面の西側が一段浅く階段状になっている。このタイプは 2 基検出され、調査区域の中央付近に対を成してある。底面に杭跡はない。

D II b 2 - 1 陥し穴状遺構（第 9 図・写真図版 4）

検出面は表土下 85～90cm の明褐色土上面である。長軸は N-81°-W で、ほぼ東西方向である。開口部規模は長径 370 cm、短径・東端で 120 cm、中央部で 90cm、西端で 70cm である。底部規模は、東側の深い面で長径 210 cm、短径 35～45cm で、東端は 105 cm の深さであり、次第に浅くなって 70cm となり、その地点から一段高くなって階段状となり、その部分での長径 80cm、短径 25～30cm、深さは 30～35cm となる。横断面形は U 字状である。

埋土の上位は黒色土～黒褐色土で、赤褐色スコリアを含むが、その量は中間の層に多い。下位は暗褐色土で汚れ火山灰、底面直上は明褐色土である。

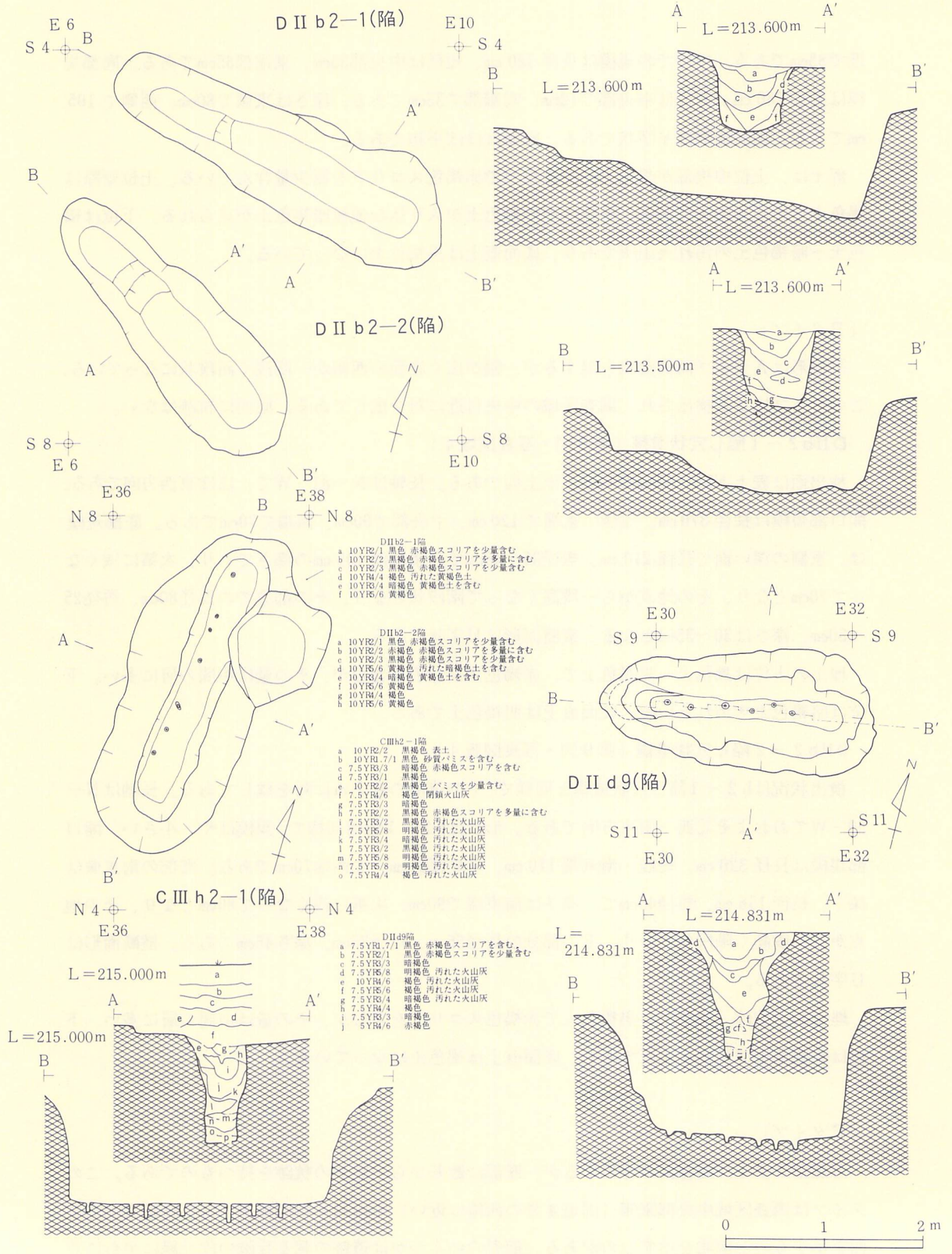
D II b 2 - 2 陥し穴状遺構（第 9 図・写真図版 4）

検出状況は b 2 - 1 陥し穴状遺構と同様で、その遺構の南 2 m に対を成してある。長軸は N-59°-W でおよそ北西-南東方向である。形状は b 2 - 1 遺構同様で、規模はや、小さい。開口部規模は長径 320 cm、短径・南東端 110 cm、中央部 95cm、北西端 70cm である。底部の南東側は深く、長径 156 cm、短径 45cm で、深さは南東端で 90cm、次第に浅くなって 80cm となり、その地点から一段高く階段状となり、その部分の長径 55cm、短径 35cm、深さ 45cm である。横断面形は U 字状である。

埋土の上位は、黒色土～黒褐色土で赤褐色スコリアを含むが、その量は中間の層に多い。下位は暗褐色土で汚れ火山灰である。底面直上は褐色土になっている。

〔Cタイプ〕

形状は A タイプ同様溝状を呈するが、底部に数基から十数基の杭跡を持つものである。このタイプは調査区域中央部東側（国道 4 号の西端に近い）や南側一帯に検出され、長軸方向が東西を示すものと南北を示すものがある。前者のいくつかは遺跡の載る丘陵の段丘縁に平行に並



第9図 D II b 2-1・D II b 2-2・D II d 9・C III h 2-1 陥し穴状遺構

ぶ。また後者は段丘縁に直角に並ぶようである。このタイプは9基ある。

CIIIh 2-1 陥し穴状遺構 (第9図・写真図版5)

この遺構は表土下70~80cmの明褐色土上面で検出されたものであるが、たまたま調査用ベルトにかかったため、埋土は表土から観察することができた。それによれば掘り込みは表土下50cmの黒褐色土層上面にあるようであり、それが本来の検出面であったかもしれない。長軸はN-5°Eで、ほぼ南北方向である。北側の東部はCIIIh 2-2 陥し穴状遺構を切っている。

開口部規模は、長径340cm、短径130cmで、開口部付近は崩落している。形状は細長い長方形になっている。中端の規模は長径290cm、短径50cm、底部規模は長径260cm、短径30cmである。深さは110~115cmである。横断面形はY字状である。底面はほぼ平坦で、西壁寄りに7基の杭跡が検出された。杭穴の径は5cm前後で、深さは9~20cmである。杭はほぼ一直線に並び、その間隔は45、15、30、50、30cmである。

埋土の上位は暗褐色土~黒褐色土で中間に褐色土の混入が見られる。全体に赤褐色スコリアが含まれるが、褐色土下位の黒褐色土部分には多量に含まれる。中位は明褐色土~暗褐色土である。下位は明褐色土で、床面直上は褐色土である。

DIII d 9 陥し穴状遺構 (第9図・写真図版5)

この遺構は、CIIIh 2-1 陥し穴状遺構の南15cmほどに検出され、検出面は表土下70cmほどの明褐色土層である。長軸はN-78°Eで、ほぼ東西方向である。開口部には崩落が見られ、それは東側ほど大きい。開口部規模は、長径280cm、短径・東端130cm、中央部115cm、西端80cm、中端の規模は長径250cm、短径70cm、底部規模は長径200cm、短径20cmである。深さは東端115cm、西端130cmである。横断面形はY字状である。底部はほぼ平坦でかたくしまっており、6基の杭跡がややジグザグに検出された。杭穴の径は約5cmで、深さは6~10cmである。その間隔は東側から25、25、30、35、25cmである。

埋土の上位は黒色土で赤褐色スコリアを含んでいる。壁際には汚れ火山灰の明褐色土がある。中位は褐色土で汚れ火山灰である。下位は暗褐色土~褐色土で、底面直上には赤褐色土がある。

D I g 3 陥し穴状遺構 (第10図・写真図版5)

この遺構は、調査区域の西側境界線に接して発見され、開口部の西端は調査不能である。検出面は表土下90cmの褐色土層で、赤褐色スコリアを含む黒色土の広がりとして発見された。長軸はN-79°Wで、ほぼ東西方向である。形状は溝状であるが、東側が広く西側が狭い。長軸の両端は、壁面が内傾し、オーバーハング状態になっている。横断面形はY字状である。

開口部規模は、長径280+xcm、短径・東端125cm、中央部110cm、西端付近70cmで、中端規模は、長径265cm、短径・東端60cm、西端25cm、底部規模は長径265cm、短径・東端45cm、西

端10cmである。深さは東側で110cm、西側で80cmである。底部は黄褐色でしまりがあり、8基の杭跡がある。この杭跡は両端にはなく、中央部に集中しており、配列は規則的でない。杭穴の径は2～5cmで、深さは10～16cmであるが35cmのものが1基ある。その間隔は20、20、20、30、15、35、10cmである。なお中央部分の杭跡で横に並ぶものがある。

埋土の上位は黒色土で赤褐色土スコリアを含む。このスコリアはブロックで純層になっているものがある。上位壁際には黒褐色土がある。中位は暗褐色土である。下位は褐色土で、底面直上は明褐色土である。

E I d 3 陥し穴状遺構（第10図・写真図版5）

この遺構は、調査区域西側境界線に近く、D I g 3 陥し穴状遺構の南々東20m付近に検出されたもので、検出面は表土下90cmである。長軸はN-31°Eで、ほぼ北東-南西方向である。南西側がや、広い溝状を呈しており、底部はへら状に南西側が広がっている。また長軸両端の壁面は内傾し、オーバーハング状態になっている。横断面形はV字状である。

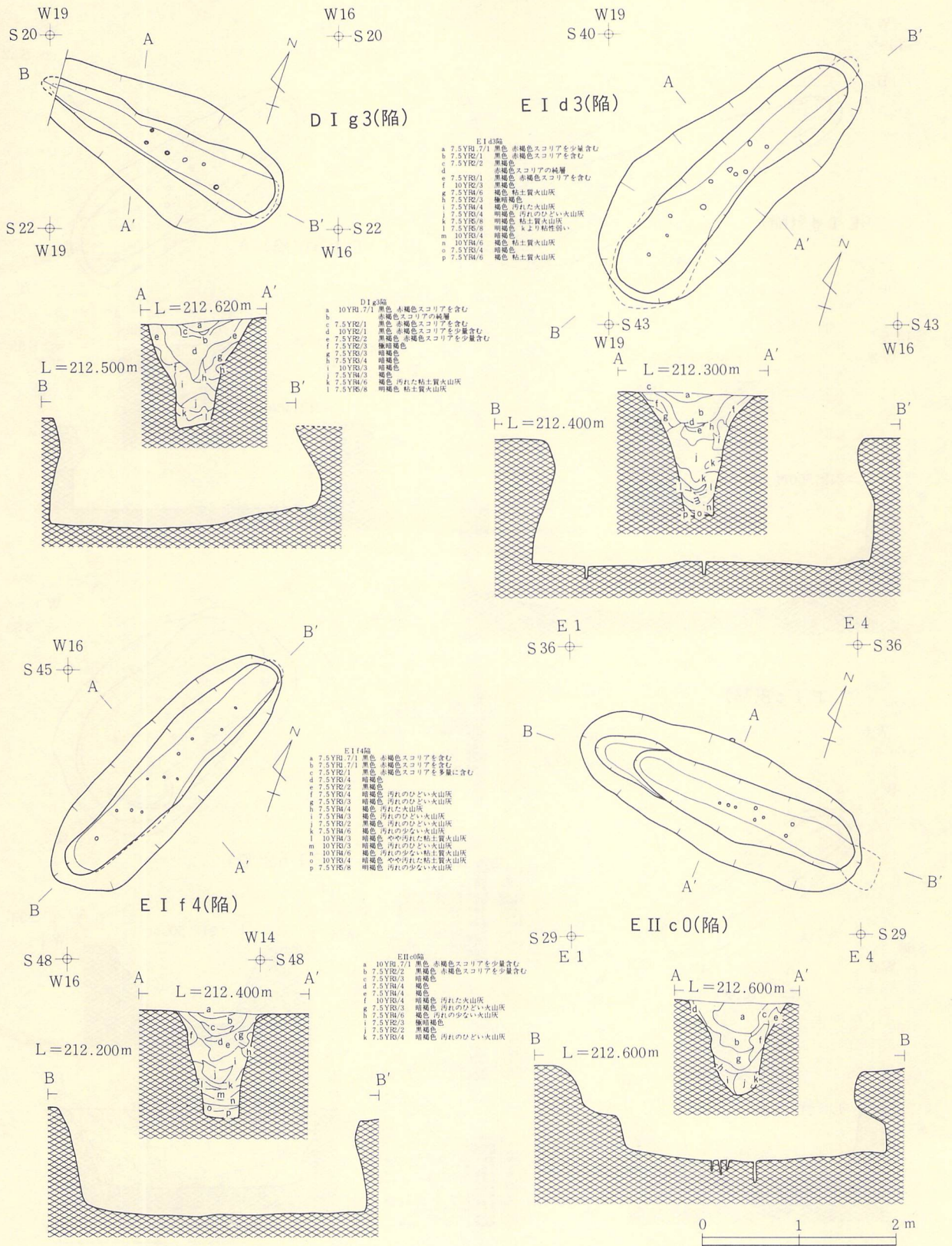
開口部規模は、長径330cm、短径・南西端140cm、中央部115cm、北東端95cm、である。中端の規模は、長径315cm、短径50～65cm、である。底部規模は、長径350cm、短径は南西部で80cm、他は25cmである。深さは125cmである。底部はほぼ平坦で、10基の杭跡がある。杭跡は北東部にはなく、中央部から南西部にかけてある。配列には規則性はないが、長軸に対し斜位に並列して配置したかに見えるところがある。杭穴の径は3～6cmで、深さは9～20cmである。その間隔は北東から20、30、10、10、25、25、35、20、25cmである。

埋土の上位は黒色土で赤褐色スコリアをわずかに含む層とその下位に赤褐色スコリアの純層がブロック状にみられ、更にその下位に赤褐色スコリアを含む黒褐色土のうすい層がある。上位の土層のうち壁際は黒褐色土～極暗褐色土である。中位は暗褐色土で汚れ火山灰である。下位は明褐色土～暗褐色土で、底面直上は褐色土である。

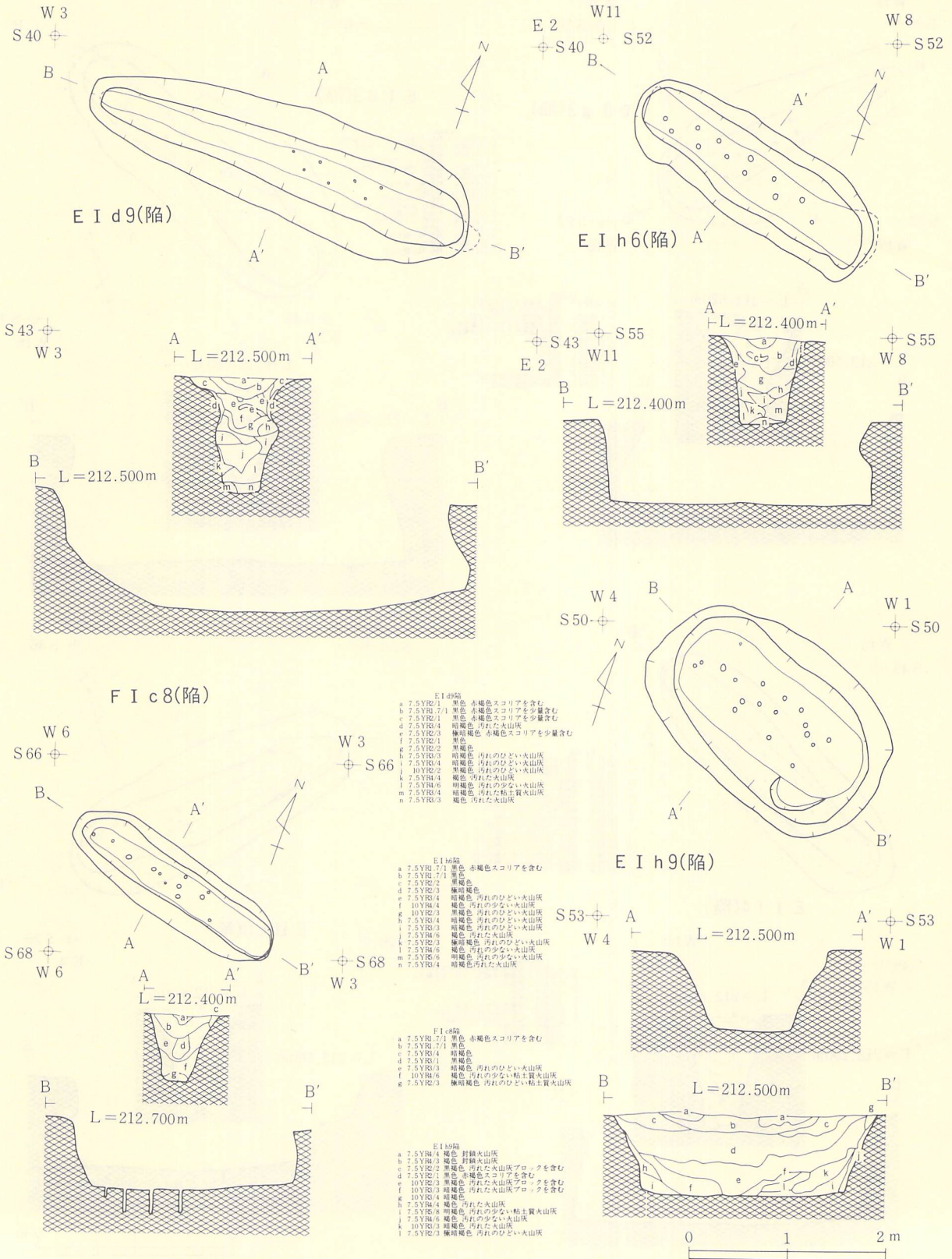
E I f 4 陥し穴状遺構（第10図・写真図版5）

この遺構は、E I d 3 陥し穴状遺構と並んで、東5mの位置に検出されたもので、検出面は表土下90cmである。長軸はN-29°Eで、北東-南西方向に近い。北東端壁面は内傾しており、オーバーハング状態になっている。横断面形はV字状である。

開口部規模は長径320cm、短径95cm、中端の規模は長径295cm、短径55cm、底面規模は長径295cm、短径30～40cm、である。深さは90～115cmである。底部はほぼ平坦で、杭跡が11基ある。杭跡は北東端にはなく、配列に規則性はないが、長軸に対して斜位に3基ずつ並んだ箇所が2カ所ある。杭穴の径は約3cmで、深さは21～27cmである。その間隔は北東から30、30、20、35、10、15、35cmである。



第10図 DI g3・EI d3・EI f4・EI c0陥し穴状遺構



第11図 E I d 9・E I h 6・E I h 9・F I c 8 陥し穴状遺構

埋土の上位は黒色土で、赤褐色スコリアを含んでおり、それは黒色土下位に多い。上位の壁際は黒褐色土～暗褐色土で汚れ火山灰のブロックを含む。中位は褐色土で一部黒褐色土が見られる。下位は褐色土～暗褐色土で汚れ火山灰であり、底面直上は明褐色土である。

EIIc0 陥し穴状遺構（第10図・写真図版6）

この遺構は、調査区域東側境界線に近く、EId3 陥し穴状遺構の東20mにある。この遺構の南にEId9、Eih6、北に調査区域外をはさんでDIIId9 陥し穴状遺構があり、これらとともに段丘縁に平行に並ぶようである。長軸はN-82°Wで、ほぼ東西方向である。長軸方向東端の壁は大きく内彎し、オーバーハング状態になっている。また西端は階段状になっており、その点でBタイプに類似している。また底面は中央部が深く、両端部はやや浅くなっている。横断面形はV字状である。

開口部規模は長径320cm、短径・西端90cm、中央部115cm、東端100cmである。中端の規模は長径290cm、短径55cm、底部規模は長径270cm、短径・東端30～40cm、西側20cmである。深さは中央部95cm、両端が85cmであるが、西側の階段状の部分は深さ50cmで長さ30cmほどになっている。底部には8基の杭跡がある。この杭跡は中央部に集中して検出され、両端部にはない。配列に規則性はないが、2基並列の箇所が2カ所、あとは一列であるようにも見える。杭穴の径は3cm前後で、深さは15cm前後であるが7cmや24cmのものもある。間隔は東から15(並列)、30、10、10(並列)、20、10、10cmである。

埋土の上位は黒色土～黒褐色土で、赤褐色スコリアをわずかに含んでいる。上位の壁際は褐色土～暗褐色土である。中位は暗褐色土で汚れ火山灰である。下位は褐色土・極暗褐色土～黒褐色土である。

EId9 陥し穴状遺構（第11図・写真図版6）

この遺構は、EIIc0 陥し穴状遺構の南5mに、長軸方向をほぼ同じにして検出されたものである。長軸はN-87°Wで東西方向である。東側は幅広く、西側は狭い。長軸東端の壁面は内彎し、オーバーハング状態になっている。底面は大きく彎曲し、中央部が深く、東端、西端は浅くなる。特に西側は彎曲が大きく開口部まで擂鉢状になっている。横断面形はY字状になっている。

開口部規模は長径410cm、短径・東端120cm、中央部110cm、西端50cmである。中端の規模は長径395cm、短径・東側65cm、西側30cmである。底部規模は長径415cm、短径・東側30cm、西側15cmである。深さは中央部115cm、東部90cmである。底面の杭跡は7基で中央から東側にあるが、東端にはない。杭の配列は2列になっているが、各々の杭は横に並ぶことがなく、全体として大きなジグザグの状態である。北側壁に沿う杭穴は径3cmで、深さ22～28cmであり、

その間隔は東から30、40、30cmである。南側壁に沿う杭穴は径3cmで、深さ21～27cmであり、その間隔は東から40、30cmである。この2列の杭列の間隔は15cm前後である。杭穴の埋土はしまりがなく、空洞化しているものもあった。

埋土の上位は黒色土で、赤褐色スコリアを含んでいる。その含む量は上位ほど多い。中位は黒褐色土～暗褐色土で汚れ火山灰である。下位は明褐色土で、底面直上は褐色土の汚れ火山灰である。

E I h 6 陥し穴状遺構（第11図・写真図版6）

この遺構は、調査区域南地域で、E I d 9 陥し穴状遺構の南15m付近に検出されたものである。長軸はN-74°Wで、おおよそ東西方向である。平面形は細長い長形状を示し、横断面形はV字状である。長軸方向東側壁面は内彎し、オーバーハング状態になっている。

開口部規模は長径280cm、短径100cm、中端の規模は長径265cm、短径65cm、底部規模は長径280cm、短径30～45cmである。深さは85cmである。底部には12基の杭跡があり、2列に配置されている。2列の杭のおのおのは並列することなく、位置がずれた配置になっている他、一直線上にのらないものもある。

南側壁に沿う列の杭穴は径5cm前後で、深さ14～25cmであり、その間隔は東から45、40、25、30、30、15cmである。北側壁に沿うものも同じ規模で、その間隔は東から35、30、35、25cmである。この2列間の距離は15cmである。

埋土の上位は黒色土で、赤褐色スコリアを含んでいる。上位の壁際は暗褐色土である。中位は黒褐色土で汚れ火山灰である。下位は暗褐色土～褐色土であり、底面直上は暗褐色土である。

F I c 8 陥し穴状遺構（第11図・写真図版6）

この遺構は、調査区域の南端部に検出されたもので、E I h 6 陥し穴状遺構の南東15mの位置にある。長軸はN-75°Wで、おおよそ東西方向である。長軸東端壁は内彎ぎみに立ち上がる。横断面形はV字状である。

開口部規模は長径240cm、短径70cmである。中端の規模は長径225cm、短径40cmである。底部規模は長径215cm、短径20～30cmで東側が広く西側がせまい。深さは東側55cm、西側が深くなって70cmである。底部には杭跡が12基ある。配列に規則性はないが、2基または3基並列するところもある。またほぼ一直線に並ぶようでもある。東側には杭跡はなく、西側は端部ぎりぎりにまである。ほぼ一直線に並ぶ杭穴は径2～6cmで、深さは9～24cmであり、その間隔は東から25、15、10、10、30、25、20cmである。この列の南側東寄りには2基の杭跡が40cmの間隔であり、径3～4cmで深さ15～18cmである。また北側壁際には28cmの間隔で2基の杭跡があり、径3cm前後で深さ10～20cmである。

埋土の上位は黒色土で、赤褐色スコリアを含んでいる。中位は暗褐色土～黒褐色土で汚れ火山灰である。下位は褐色土で、底面直上で極暗褐色土である。

〔Dタイプ〕

このタイプは長楕円形を呈し底面に杭跡のあるものである。形状は次に述べるEタイプに似ているが、それより規模は大きい。Dタイプは1基のみの検出である。

E I h 9 陥し穴状遺構（第11図・写真図版6）

この遺構は、調査区域南部に検出され、長軸はN-69°-Wでおおよそ東西方向である。形状は隅丸長方形、断面形は逆台形である。開口部規模は長径270cm、短径170cmである。中端の規模は長径235cm、短径130cmであり、底部規模は長径215cm、短径90cmである。深さは80cmである。底部に17基の杭跡があり、配置は不規則で底面全体に散在している。杭穴の径は3～6cmで、深さは10cm以下のもの9基、12～20cmのもの8基である。

埋土の上位中央部には褐色土と暗褐色土があり、他の遺構と異なって、この部分には赤褐色スコリアが含まれない。人為的な埋め戻しも考えられる。中位は黒色土で赤褐色スコリアをわずかに含んでいる。下位は黒褐色土～暗褐色土で汚れ火山灰ブロックを含む。底部壁際には褐色土や明褐色土がある。

〔Eタイプ〕

このタイプは、長楕円形を呈し比較的小型で、浅いものであり、断面形は逆台形である。底面に杭跡がない。北東-南西の方向に6基が並んで検出され、段丘縁から50mほど離れて平行に配置されている。それぞれの遺構の間隔は、北東から、8、5、5、7、3mである。

D II a 1 陥し穴状遺構（第12図・写真図版7）

この遺構は、調査区域のほぼ中央に検出され、6基並んだ陥し穴状遺構の北東端のものである。長軸はN-52°-Wで北西-南東方向である。検出面は表土下75～80cmの褐色土面で赤褐色スコリアを含む黒褐色土の広がりで見出されたものである。赤褐色スコリアを含む量は、近接して検出されたD II b 2-1やb 2-2 陥し穴状遺構より少ないので、両者間の時期差が考えられる。開口部は長径165cm、短径110cmで楕円形を呈する。中端の規模は長径130cm、短径60cmである。底部は長径120cm、短径50cmである。深さは80～85cmである。

埋土の上位は黒褐色土で中間に黒色土がある。上部には赤褐色スコリアをわずかに含む。中位は暗褐色土～極暗褐色土である。下位は褐色土で、底面直上は暗褐色土である。いずれも汚れ火山灰である。

D I b 9 陥し穴状遺構（第12図・写真図版7）

D I I a 1 陥し穴状遺構の南西 8 m に検出されたもので、検出面は表土下75～80cmである。長軸はN-51°-Wで北西-南東方向である。開口部は長径 170 cm、短径95cmで楕円形を呈する。中端の規模は長径 150 cm、短径65cmである。底部規模は長径 135 cm、短径45cmである。深さは60～65cmである。

埋土の大部分は黒褐色土で、上部には赤褐色スコリアを極く少量含む。下位の黒褐色土には地山褐色土や暗褐色土などをブロックで混合している。底面近くには黒色土のうすい層がある。

D I c 8 陥し穴状遺構（第12図・写真図版7）

D I b 9 陥し穴状遺構の南西 5 m に検出されたもので、検出面は表土下70～80cmである。長軸はN-52°-Wで北西-南東方向である。開口部は長径 170 cm、短径 100 cmで、楕円形を呈する。中端の規模は長径 140 cm、短径75cm、底部規模は長径 135 cm、短径60cmである。深さは70cmである。

埋土の上位は黒色土で赤褐色スコリアを含む。中位は黒褐色土で赤褐色スコリアを含む。下位はにぶい黄褐色土で赤褐色スコリアを少量含み、黒褐色土で汚れている。

D I d 6 陥し穴状遺構（第12図・写真図版7）

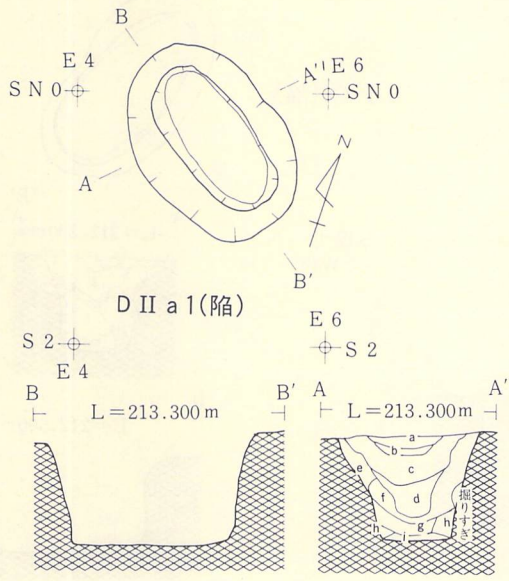
D I c 8 陥し穴状遺構の南西 5 m に検出されたもので、検出面は表土下75～80cmである。長軸はN-75°-Wで東西方向に近くなる。開口部は長径 195 cm、短径 130 cmで楕円形を呈する。中端の規模は長径 155 cm、短径80cmで、底部規模は長径 130 cm、短径40cmである。深さは75～80cmである。

埋土の上位は黒色土で赤褐色スコリアを含む。中位は黒褐色土で、壁際には上部から続く暗褐色土がある。下位は褐色土で、一部に暗褐色土が入りこんでいる。いずれも汚れ火山灰である。

D I f 5 陥し穴状遺構（第13図・写真図版8）

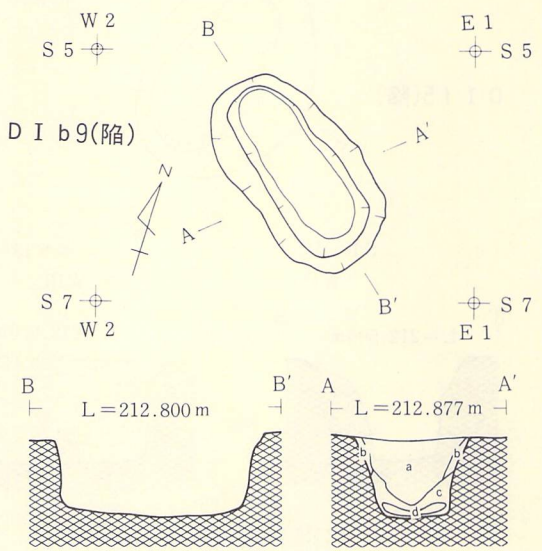
D I d 6 陥し穴状遺構の南西 7 m に検出されたもので、検出面は表土下75～80cmである。長軸はN-49°-Wで北西-南東方向である。開口部は長径 180 cm、短径 135 cmで楕円形を呈する。中端の規模は長径 140 cm、短径65cmで、底部規模は長径 130 cm、短径55cmである。深さは80～85cmである。

埋土の最上位は黒色土でうすい。上位から中位にかけては黒褐色土で、その上部には赤褐色スコリアをわずかに含んでいる。下位は暗褐色土で汚れ火山灰のブロックを含んでいる。



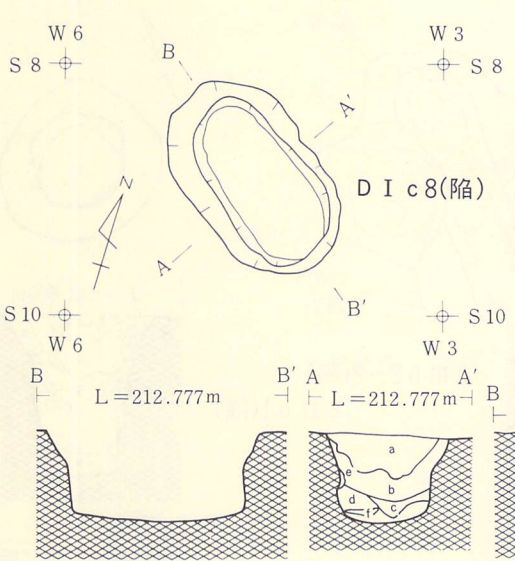
D II a 1(陥)

- D II a 1陥
- a 7.5 YR2/2 黒褐色 赤褐色スコリアを含む
 - b 7.5 YR1.7/1 黒色 赤褐色スコリアを少量含む
 - c 10 YR2/2 黒褐色 赤褐色スコリアを少量含む
 - d 7.5 YR2/3 極暗褐色
 - e 7.5 YR3/3 暗褐色 汚れた火山灰
 - f 7.5 YR3/4 暗褐色 汚れた火山灰
 - g 7.5 YR4/4 褐色 汚れた火山灰
 - h 7.5 YR4/6 褐色 汚れた火山灰
 - i 10 YR3/3 暗褐色 汚れた火山灰



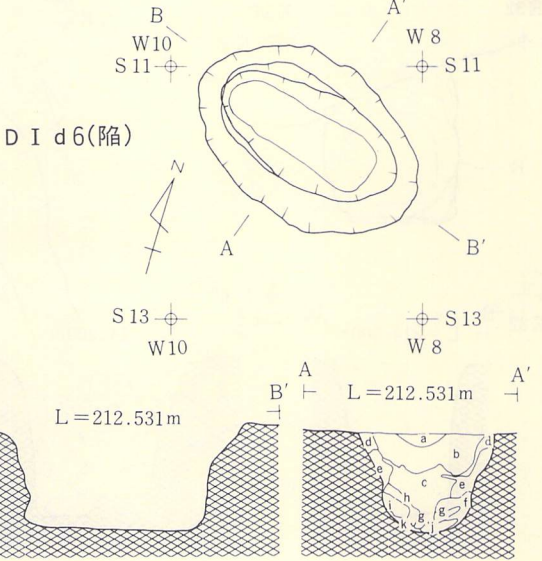
D I b 9(陥)

- D I b 9陥
- a 10 YR2/2 黒褐色 赤褐色スコリアを極少量含む
 - b 10 YR3/3 暗褐色
 - c 10 YR2/3 黒褐色
 - d 10 YR2/1 黒色



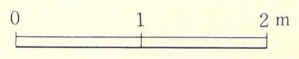
D I c 8(陥)

- D I c 8陥
- a 10 YR2/1 黒色 赤褐色スコリアを含む
 - b 10 YR2/3 黒褐色 赤褐色スコリアを含む
 - c 10 YR1/2 黒褐色 赤褐色スコリアを含む
 - d 10 YR4/3 緑・黄褐色 赤褐色スコリアを少量含む
 - e 10 YR5/6 黄褐色 (掘りすき)
 - f 10 YR2/3 黒褐色

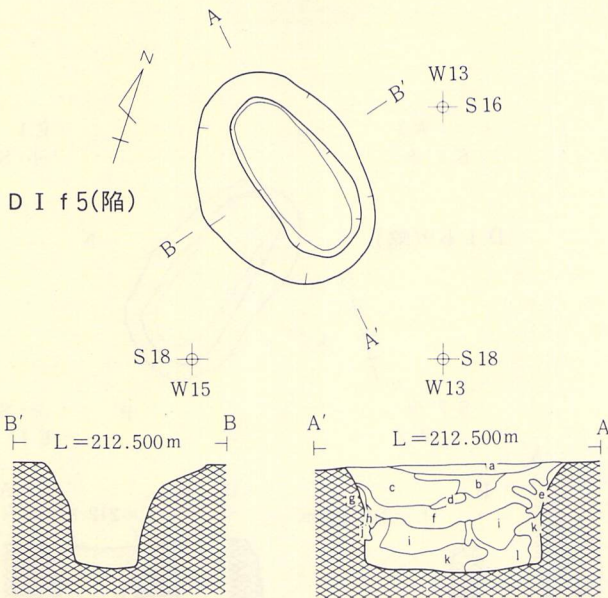


D I d 6(陥)

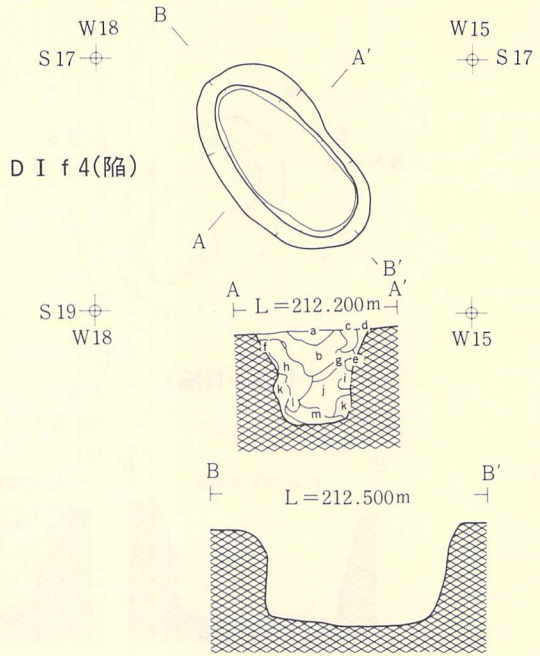
- D I d 6陥
- a 10 YR1.7/1 黒色 赤褐色スコリアを含む
 - b 7.5 YR2/1 黒色 赤褐色スコリアを少量含む
 - c 10 YR2/2 黒褐色
 - d 7.5 YR3/3 暗褐色 汚れた火山灰
 - e 7.5 YR3/4 暗褐色 汚れた火山灰
 - f 7.5 YR4/6 褐色 汚れた火山灰
 - g 7.5 YR4/4 褐色 汚れた火山灰
 - h 7.5 YR2/3 暗褐色 汚れた火山灰
 - i 7.5 YR4/4 褐色 汚れた火山灰
 - j 7.5 YR4/3 褐色 汚れた火山灰
 - k 7.5 YR3/4 暗褐色 汚れた火山灰



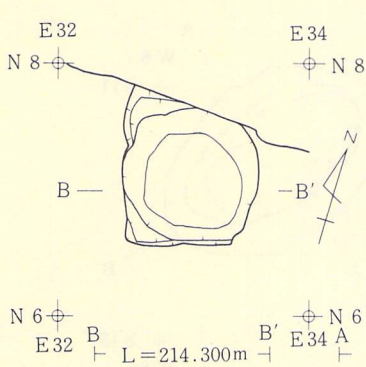
第12図 D II a 1・D I b 9・D I d 6・D I c 8陥し穴状遺構



- D I f 5陥
- a 7.5YR2/1 黒色
 - b 7.5YR2/2 黒褐色 赤褐色スコリアを少量含む
 - c 7.5YR2/2 黒褐色 赤褐色スコリアを少量含む
 - d 7.5YR3/3 暗褐色
 - e 7.5YR3/4 暗褐色 汚れた火山灰
 - f 7.5YR2/2 暗褐色 汚れた火山灰
 - g 7.5YR2/2 暗褐色
 - h 7.5YR2/2 暗褐色
 - i 7.5YR2/2 黒褐色
 - j 7.5YR4/6 褐色
 - k 7.5YR3/3 暗褐色
 - l 7.5YR2/3 極暗褐色

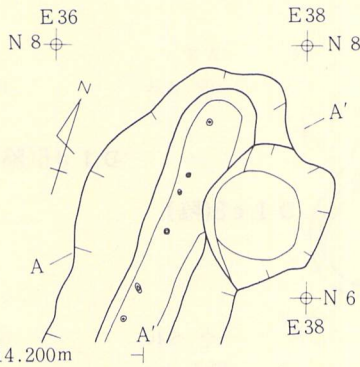


- D I f 4陥
- a 7.5YR1/7 黒色 赤褐色スコリアを少量含む
 - b 7.5YR2/1 黒色 赤褐色スコリアを含む
 - c 7.5YR2/2 黒褐色
 - d 7.5YR2/3 極暗褐色
 - e 7.5YR2/3 極暗褐色
 - f 7.5YR2/3 黒褐色 汚れた火山灰
 - g 7.5YR3/1 黒色
 - h 7.5YR3/3 黒褐色
 - i 7.5YR4/4 褐色 汚れた火山灰
 - j 7.5YR2/1 黒色
 - k 7.5YR2/3 極暗褐色
 - l 7.5YR2/2 黒褐色
 - m 7.5YR2/2 黒褐色



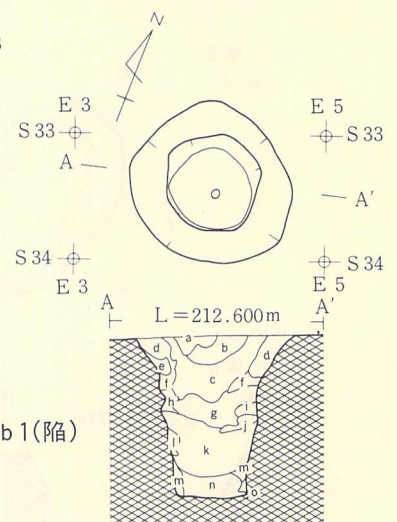
C III h 0 (陥)

- C III h 2-2陥
- a 7.5YR4/4 褐色 汚れの少ない火山灰
 - b 10YR4/3 暗褐色 汚れた火山灰
 - c 7.5YR2/3 極暗褐色 赤褐色スコリアを含む
 - d 7.5YR4/6 褐色
 - e 7.5YR2/1 黒色 赤褐色スコリアを少量含む
 - f 10YR3/4 暗褐色 汚れた火山灰
 - g 7.5YR2/2 暗褐色
 - h 7.5YR2/2 暗褐色
 - i 7.5YR5/8 明褐色 汚れの少ない火山灰
 - j 10YR4/6 褐色 汚れた火山灰
 - k 7.5YR4/6 褐色 汚れた火山灰
 - l 7.5YR5/8 明褐色 汚れの少ない火山灰
 - m 7.5YR5/6 明褐色

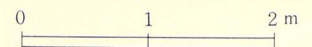


C III h 2-2 (陥)

E II b 1 (陥)



- E II b 1陥
- a 7.5YR1/7 黒色
 - b 7.5YR1/7 黒色
 - c 7.5YR2/1 黒色 赤褐色スコリアを少量含む
 - d 7.5YR2/2 暗褐色
 - e 7.5YR3/3 暗褐色 汚れのひどい火山灰
 - f 10YR2/3 暗褐色 汚れのひどい火山灰
 - g 7.5YR2/2 暗褐色
 - h 7.5YR4/4 褐色 汚れた火山灰
 - i 10YR3/2 暗褐色 汚れのひどい火山灰
 - j 10YR4/4 褐色 汚れた火山灰
 - k 10YR3/1 暗褐色
 - l 7.5YR4/3 褐色 汚れた火山灰
 - m 7.5YR4/6 褐色 汚れの少ない粘土質火山灰
 - n 7.5YR3/3 暗褐色 汚れた粘土質火山灰
 - o 7.5YR2/3 極暗褐色 汚れのひどい粘土質火山灰



第13図 D I f 5・D I f 4・C III h 0・C III h 2-2・E II b 1陥し穴状遺構

DIf4 陥し穴状遺構（第13図・写真図版8）

DIf5 陥し穴状遺構の南西3mに検出されたもので、検出面は表土下75～80mである。この遺構の南西3mほどで調査区域外となるので、この種の遺構の連続は不明である。長軸はN-62°-Wでほぼ北西・南東である。開口部は長径170cm、短径90cmで楕円形を呈する。中端の規模は長径145cm、短径70cmで、底部規模は長径140cm、短径65cmである。深さは70～80cmである。

埋土の上位は黒色土で赤褐色スコリアを含んでいる。中位の中央部は黒色土、壁際は暗褐色土で、いずれも汚れ火山灰を含んでいる。下位は暗褐色土～黒褐色土で汚れ火山灰ブロックを含んでいる。

〔Fタイプ〕

このタイプは、円筒形を呈するもので、底部に1～2基の杭跡のあるものである。調査区域中央部の東側（国道4号西側に近い）に2基、中央部南側を横断するように東西方向に並んで7基検出された。前者の遺構間の距離は5m、後者の遺構間の距離は、東から、6、5、5、3、5、9mである。

CIIIh0 陥し穴状遺構（第13図・写真図版8）

この遺構は、調査区域中央部東側で、調査区域境界線近くに検出されたものである。開口部は直径110cmの円形で、底部は直径75cmの不整形円形、深さは120cmである。検出の状況から木根跡と推定して掘り始めたため、断面図の作成はできなかったが、埋土の上層は黒褐色土で厚さ10cmぐらいであり、黄褐色土のブロックが混合していた。中・下層は軟らかい暗褐色土であり、壁際には褐色土で汚れた暗褐色土があった。底部付近には少量の炭化物がある。底部には杭跡があったものと思われるが、確認していない。

CIIIh2-2 陥し穴状遺構（第13図・写真図版8）

この遺構は、CIIIh0 陥し穴状遺構の東5mにあり、CIIIh2-1 陥し穴状遺構によって切られている。検出面は表土下70～80cmの褐色土層である。開口部は上記により不明の部分があるが、100～120cmの直径の円形と思われる。底部は直径70cmの円形で、深さは125cmである。埋土の上部はCIIIh2-1 陥し穴状遺構の埋土となって不明であるが、残存部分は黒褐色土～暗褐色土であり、暗褐色土は赤褐色スコリアをわずかに含む。中位から下位にかけては明褐色土で、底部には2枚のうすい層で褐色土がある。底部には杭跡があったと思われるが、確認していない。

EIIb1 陥し穴状遺構（第13図・写真図版8）

この遺構は、調査区域南側を横断するように、ほぼ東西方向に並ぶ7基のうちの最東端のものである。検出面は明褐色土層上面である。開口部は直径120～130cmの不整円形、底部は直径60～65cmの不整円形である。深さは130cmである。底部には1基の杭跡が中央付近にある。径6cmで深さ14cmである。

埋土の上位は黒色土で、赤褐色スコリアを極少量含んでいる。中位は上位壁際から続く黒褐色土で、壁際に褐色土が入りこんでいる。下位は暗褐色土で汚れ火山灰である。

EIa9 陥し穴状遺構（第14図・写真図版9）

この遺構はEIIb1陥し穴状遺構の西6mに検出されたもので、検出面は表土下70～80cmである。開口部は直径115～125cmの円形で、底部は直径60～65cmの円形である。深さは130cmある。底部には2基の杭跡があり、25cmの間隔で配置されている。一方は直径3cm、深さ8cm、他方は直径4cm、深さ17cmである。

埋土の上位は黒色土で、赤褐色スコリアを極少量含んでいる。中位は黒褐色土、上位壁際から続く暗褐色土で、汚れ火山灰である。下位は褐色土で、上方に黒褐色土の層がある。

DIj7 陥し穴状遺構（第14図・写真図版9）

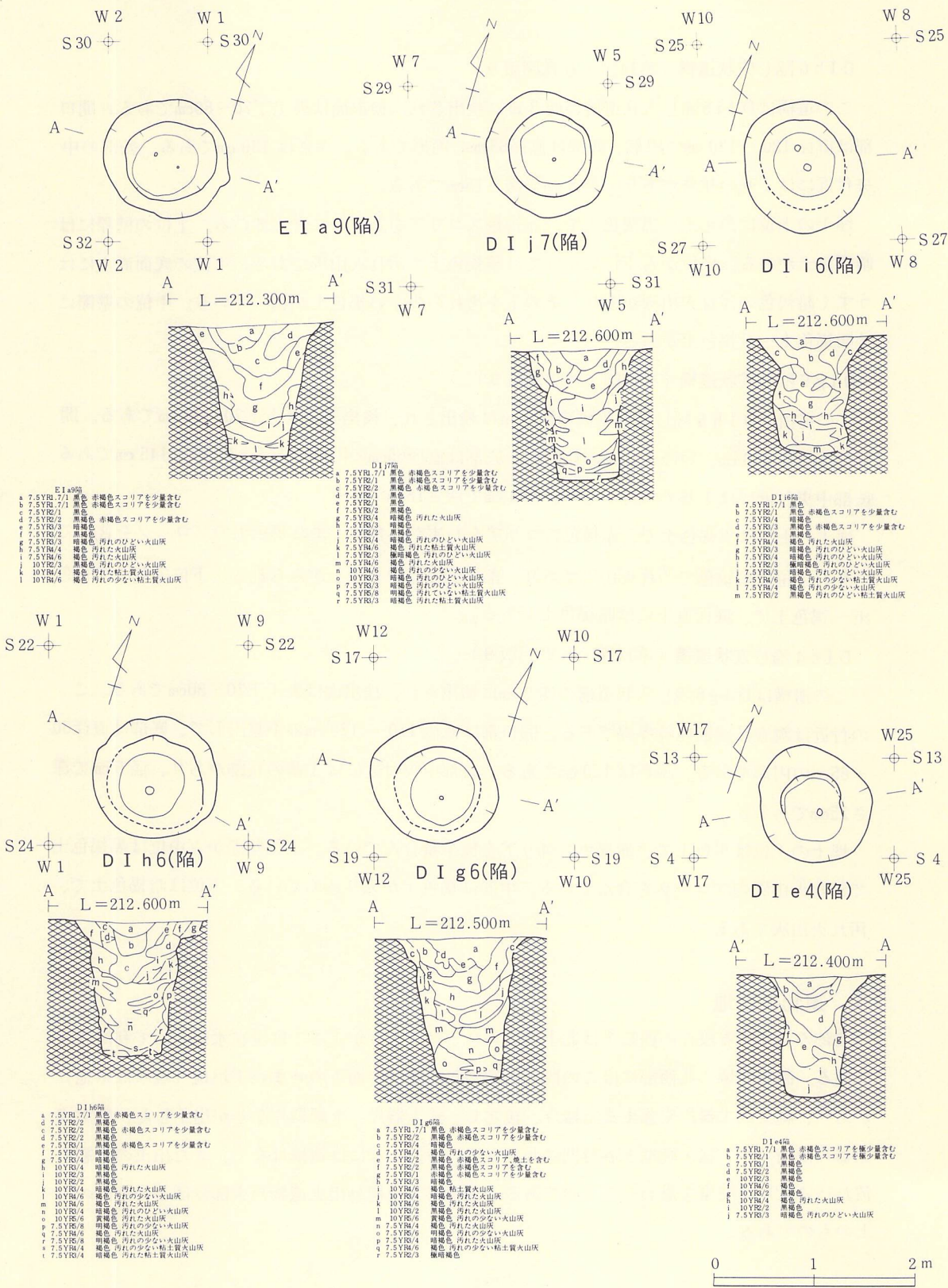
この遺構はEIa9陥し穴状遺構の西5mに検出され、検出面は表土下70～80cmである。開口部は直径130cmの不整円形、底部は直径60～65cmの円形である。深さは130cmである。底部中央付近には杭跡が1基あり、直径4cmで深さ24cmである。

埋土の上位は黒色土で、上方には赤褐色スコリアを含む。中位は黒褐色土～極暗褐色で、汚れ火山灰若しくは汚れ火山灰ブロックを含み、上位壁際からの連続がみられる。下位は暗褐色の汚れ火山灰で、壁際には明褐色土がみられる。

DIi6 陥し穴状遺構（第14図・写真図版9）

この遺構はDIi7陥し穴状遺構の西5mに検出され、検出面は表土下70～80cmである。開口部は長径130cm、短径115cmで楕円形を呈する。底部は長径70cm、短径60cmで楕円形を呈する。深さは115cmである。底部には2基の杭跡があり、25cmの間隔で配置されている。一方は径5cmで深さ6cm、他方は径7cmで深さ16cmである。

埋土の上位は黒色土～黒褐色土で、赤褐色スコリアをわずかに含む。上位壁際は暗褐色土である。中位は黒褐色土～暗褐色土で汚れ火山灰である。下位は極暗褐色土で、汚れ火山灰、底面直上は黒褐色土である。中・下位の壁際には褐色土がみられる。



第14図 E I a 9・D I j 7・D I i 6・D I h 6・D I g 6・D I e 4 陥し穴状遺構

D I h 6 陥し穴状遺構（第14図・写真図版9）

この遺構はD I i 6陥し穴状遺構の西3 mに検出され、検出面は表土下70～80cmである。開口部は直径120～130 cmで円形、底部は直径65cmの円形である。深さは130 cmである。底部の中央付近には1基の杭跡があり、径8 cmで深さ15cmである。

埋土の上位は黒色土～黒褐色土で、赤褐色スコリアをわずかに含んでいる。上位の壁際には暗褐色土がある。中位から下位にかけては暗褐色土で汚れ火山灰である。下位の底面直上にはうすく暗褐色の汚れ火山灰があり、その上を汚れの少ない褐色土が覆っている。中位の壁際には明褐色土～黄褐色土がある。

D I g 6 陥し穴状遺構（第14図・写真図版9）

この遺構はD I h 6陥し穴状遺構の西5 mに検出され、検出面は表土下70～80cmである。開口部は長径130 cm、短径115 cmの楕円形、底部は直径65cmの円形である。深さは145 cmである。底部中央付近には1基の杭跡があり、径4 cmで深さ16cmである。

埋土の上位は黒褐色土で、赤褐色スコリアをわずかに含む。また褐色土のブロックを含んでいる。中位は暗褐色で汚れ火山灰であり、部分的には黒褐色土がみられる。下位は黄・明褐色土～褐色土で、底面直上には暗褐色土がある。

D I e 4 陥し穴状遺構（第14図・写真図版9）

この遺構はD I g 6陥し穴状遺構の西9 cmに検出され、検出面は表土下70～80cmである。この付近は調査区域西側境界線である。開口部は直径110～120 cmの不整円形で、底部は直径60～65cmの円形である。深さは120 cmである。底部中央付近には1基の杭跡があり、径6 cmで深さ25cmである。

埋土の上位は黒色土で、赤褐色スコリアを極少量含んでいる。上位壁際から中位は黒褐色土で汚れ火山灰のブロックを含んでいる。中間に褐色土が入り込んでいる。下位は暗褐色土で、汚れ火山灰である。

5. 遺物包含地

遺跡の立地する段丘の西端下は北上川の谷底平野であるが、ここは現在水田として利用されている。調査区域の北西部にはこの段丘西端の斜面及び斜面下のせまい平地地（現状は草地）があり、縄文式土器片や弥生式土器片、後北C₂式土器片、土師器片などが出土した。縄文式土器片は前・中・後・晩期と各時期にわたっている。ここには遺構はなく、また出土の状態も流れ込みまたは廃棄を思わせるものである。当遺跡の遺構外出土遺物の大部分はこの地点の出土のものである。

6. 遺構外出土遺物

今回の調査で得られた遺物のほとんどが遺構外からの出土である。遺物には土器類・石器類
円盤状土製品があるが、量は少ない。

土器

土器類には、縄文時代前期から晩期までの各時期、弥生時代の土器、所謂北海道系土器、及
び土師器がある。これらは、基本層序の第Ⅰ層～Ⅴ層までの間に出土したものであるが、明確
に層位的関係を把握できたものは縄文時代前期の土器群のみであった。ここでは、便宜上各時
期毎にⅠ～Ⅶ群に分類して記述する。

第Ⅰ群土器（第15図3～19）

縄文時代前期に位置づけられる土器を本群とした。層位的には、第Ⅴ層から出土したものが
多い。胎土には、繊維を多く含んでいる。いずれも破片であり、全体の形状まで知り得るものは
無いが、底部形態には平底のものと尖底のものがある。3～8は、口縁部片である。7を除い
て口唇部は平担で角ばっている。8は、体部にLRの単節斜縄文を施し、口縁部には同一原体
による側面押圧文を施文している。また、これらの文様の境目には、棒状工具による刺突文が
みられる。この他の土器は、全て単節の斜縄文が施されている。9～12は、底部片である。9
～11は、尖底を呈するものである。9.11は、体部が外傾して立ち上がる。10は、体部の立ち上
がりが他に比べて緩やかで、頂部に乳頭状の突起をもつ。体部には、結束された羽状縄文が施
文されている。12は平底を呈するもので、体部は、わずかに外傾して立ち上がり、底面にも縄
文が施されている。13～19は体部片である。半転実測できた13・16は、体部がやや外傾してい
ることがわかる。13～15は、羽状縄文が施文されている。19は、0段多条の単節斜縄文をもつ。

第Ⅱ群土器（第16図1～12）

縄文時代中期の土器を本群とした。1は、器面に縄文原体の側面圧痕による文様が施されて
いる。2～9の土器片は、同一個体である。2は、口縁部片である。これによると、大きな波
状口縁を呈するものと考えられ、口縁部に2本の隆帯（貼付粘土紐）によって区画された無文
帯をもつ。体部は、下半に膨らみをもった後外傾しながら口縁部に続くものと考えられる。器
面には、縄文施文後に隆帯とこれを取り巻く沈線によって、縦の区画文とこれから枝分れする
渦巻文が展開されている。10は、小さな山形の口縁部である。口縁部は無文となっており、山形
に沿って、鱗状の隆帯が貼付されている。10は、口縁部と体部を隆帯によって区画し、中空の
突起をもつ。体部は外傾し、口縁部は直立するものと考えられる。体部には、複節の縄文が施
されるが、下部文様については不明である。12は、粗製土器の体部であるが、胎土や下部の形
態から本群とした。

第Ⅲ群土器（第16図13～24・第17図1～27図・第18図1～21・第19図1～10）

縄文時代後期に位置づけられる土器類を本群とした。出土した土器の中で本類が最も多い。第16図13は体部が直立し、口縁部は外傾して開く。口縁部は折り返し口縁で、折り返し部分の下端から頸部にかけて「C」字状の貼付け文が施されている。14・15は同一個体である。山形の口縁部をもち、口唇部は肥厚している。山形口縁の片側は、指押による凹凸が施されている。剥落によって文様の詳細は不明であるが、器面には口唇の肥厚部分を基点とした粘土紐の貼付け文が施されている。16は、山形の口縁部に「S」字状の隆帯が貼付されている。隆帯は断面が三角形で、両側は細いへら状の工具により刺突されている。18・19は同一個体である。体部はわずかに内傾し、口縁部は緩やかに外傾する。口縁部に3条の波線が巡り、3本目のものは山形口縁の下部で入組文を構成している。沈線によって区画されている内部は磨消帯となっているが、磨消は不十分なもので所々に縄文が残る。体部の文様は、縄文施文後に沈線による直線文や曲線文が横方向に展開されている。第16図20～24・第17図1～12は同一個体と考えられる。口縁部は山形で、口唇部はわずかに肥厚する。文様は縄文施文後に沈線によって構成されている。文様は、口縁部では平行沈線文、体部では渦巻文が施され、区画内の一部は磨消されている。16は渦巻状の磨消文様が施されるものと考えられる。17は沈線による渦巻文がみられる。19・20は、平行する2本の沈線による区画帯の中に孤状や入組文風の沈線文が施されている。地文には単節斜縄文が施文されているが、充填されてはならず粗雑なものである。21は鉢で、体部は外傾して立ち上がる。文様は、体部上半に縄文を施した後2本を1組とする沈線によって斜位に区画されるものである。口縁部は縄文が磨消されており、体部下半も無文である。22・23は、山形の折り返し口縁をもち、折り返し部には連続刺突文が施されている。体部の文様は不明であるが、沈線による縦方向の区画文が展開されるものと考えられる。24は体部がわずかに内彎し、頸部から緩く外反する。口縁部は、縄文が施された山形の折り返し口縁で、折り返し部分にはこれに沿って沈線が巡らされている。また、山形と山形の間際に突起をもち、この突起の側面と頂部及び山形の頂部には刺突が加えられている。文様は沈線による区画文で、無文帯と縄文帯で構成されている。山形口縁下を基点として頸部を方形に区画し、この部分を無文帯としている。体部にも同様の区画を行い、これによってできた帯状の部分を縄文帯としている。25は頸部に磨消技法による2本の縄文帯が巡らされている。26は高台付の鉢と考えられるが、高台部と口縁部を欠損する。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は大きく開くものと考えられる。高台部の破損部分はよく磨滅しており、破損後も利用した可能性がある。体部には、沈線によって「逆S」字状に区画された磨消縄文が施されている。また口縁部との境には沈線に沿って、連続刺突文が加えられている。第18図1～4は口縁部が内彎する。いずれも口縁部に縄文を施し、沈線を巡らせている。1は山形口縁をもち、4本の沈線が巡り、山形口縁

部では、これらの沈線を区画するようにコンパス文が施されている。3は5本の沈線を持ち、これを弧状の沈線が縦に区画している。5～7は同一個体である。体部に膨らみを持ち、この部分に沈線によって区画された入組文の磨消縄文が施文されている。8は口唇部に頂部を刺突された突起が貼付され、その直下に縦割りされた突起をもつ。これらは、弧状の沈線によって継がれている。また体部には、指でつまみ出された突起が連続している。器面は全体に磨かれているが、粗雑なものである。9～18は同一個体である。口縁部には小さな山形の突起をもつ。口縁部から体部上半にかけて、沈線に区画された連続刺突文が数本巡らされている。体部下半は無文となっている。19は、体部に縄文が施されている。20は前者より細い刺突が加えられている。21は粗製の台付鉢で、体部は内彎ぎみに立ち上がり、頸部で「く」の字状に屈曲した後口縁部は外傾する。地文は単節の斜縄文である。22は高台付の鉢で、裾は「ハ」の字状に開く。体部は単節斜縄文を地文とする。第19図1～3は粗製土器の口縁部である。1・2は口縁が無文帯で外反する。2は縄文原体の側面圧痕によって口縁部と体部を区画している。5～10は底部片である。5は台付の鉢と考えられる。7は小形の鉢で、体部には楯歯状の条痕文が施されている。8～10は深鉢の底部で、9の底面には網代痕をもつ。

第Ⅳ群土器（第19図11～19）

縄文時代晩期の土器を本群とした。11は台付鉢と考えられるが、台部は欠損している。体部は緩やかに内彎し、口縁は波状を呈する。体部上半に魚目状の入組文が施されている。12・13は同一個体である。器面はよく研磨され、「c」字状の入組文が施されている。14は体部片で、縄文が施された「c」字状入組文をもつ。17は壺形土器の頸部及び口縁部である。波状口縁で、頂部が単一のものと2個の山形のものがあり、単一の口縁下には2個の孔が窄たれている。16は浅鉢で、体部は外傾し口縁部でわずかに内側に屈曲する。口縁部には2個を1対とする山形の突起をもつ。体部上半に沈線による変形工字文が施されている。体部下半は細い単節斜縄文である。18・19は壺形土器の底部と考えられる。いずれも2本の沈線をもつ。

第Ⅴ群土器（第20図1～18）

弥生時代に位置づけられる土器類を本群とした。1は無頸の壺形土器の口縁部である。体部は緩やかに内傾した後、口唇部でわずかに外反する。口唇部に縄文を持ち、口縁部には4本の沈線が巡らされている。本数は不明であるが、体部上位にも沈線が巡らされている。2・3も壺形の土器である。2は頸部が「く」字状に外反するもので、頸部に4本の沈線が巡らされている。体部には単節の斜縄文が施されている。3も沈線を持ち、体部には横位の単節斜縄文が施されている。4は甕形土器の口縁部である。体部はやや内傾し、口縁部でわずかに外反する。頸部には2本の沈線が巡らされ、口唇部には斜めに刻み目が施されている。5～9は同一個体の甕形土器である。体部上半は内傾し、口縁部が「く」字に外傾するものと考えられる。頸部

には1本の沈線が巡らされている。破片のため詳細は不明であるが、体部には沈線区画された長方形の磨消縄文が施されている。地文は緻密な単節斜縄文で、磨消帯に被さる部分もある。10は口縁部が緩く外反する甕である。口唇部と口縁部に縄文が施され、頸部は指で撫でられて無文帯となっている。11・12は壺の体部で、緩く内彎する。口縁部は欠損するが、「く」字に屈曲するものと考えられる。頸部及び体部上位に3本の沈線が巡り、体部には弧状に区画された無文帯をもつ磨消縄文が施文されている。12では、沈線による三角形文がみられる。13は甕の口縁部で、口唇部に縄文が施されている。また頂部に縦の刻目をもつ小さな山形状の突起をもつ。13～14は、縦走する撚糸文が施された甕である。16は粗製の壺で、縄文が横位に施されている。17は地文に0段多条の単節縄文が施されている。

第VI群土器（第20図19～29）

所謂北海道系の土器群を本類とした。いずれも焼成は良く、胎土には若干の砂を含む。表面の色調は、黒褐色・褐色・赤褐色で、裏面は全て黒褐色を呈する。出土状況から、18～27は同一個体と考えられる。小破片であり全体の形態は不明であるが、鉢形か注口土器と考えられる。19～21は口縁部である。体部が緩く外傾した後、口縁部上端でわずかに外反する。緩やかな波状（山形）口縁を呈するものと考えられ、口唇部には内外両側に三角形の刻み目が施されている。この刻み目は、内側のものに比べて外側のものが細い。体部には带状縄文・微隆起帯と三角形の列点文によって文様が構成されている。文様は横・縦・斜位に3～5条の带状縄文を施し、微隆起帯がこれを区画するように併走している。带状縄文は、RL0段多条の原体の斜位押圧によって施文されたものである。三角形の列点文は、带状縄文や微隆起帯に併行して施文されている。

第VII群土器（第20図30・31）

古代の土器を本群とした。10数点が出土したが、いずれも小破片であり実測できたものは2点だけである。器種には、ロクロ使用の坏・ロクロ未使用・不使用の甕がある。30は、ロクロ成形された坏である。体部は外傾して立ち上がる。内面は、ヘラミガキ後黒色処理が施されている。体部外面下端から底面にかけては、手持ちヘラケズリによる再調整がなされている。このため切り離し技法は不明である。31は、ロクロ不使用の甕である。体部外面はハケメ・内面はナデ調整されている。

円盤状土製品（第20図31・32）

2点出土している。いずれも土器片の周辺を打ち欠いて作られている。31は縄文時代前期の土器片を利用したもので、胎土には繊維を含み、器面には結束された羽状縄文が施されている。32は、中期の土器片を利用したもので、器面には複節の斜縄文が施されている。

石器

石器類は35点が出土している。器種には、半円状扁平打製石斧・凹石・石鏃・石匙・石錐・搔器・削器・磨製石斧・及び剥片類がある。これらの中で土器群との共伴が明らかになったものは、第22図5・6だけである。

半円状扁平打製石斧（第21図1）

1個のみの出土である。半円状の扁平な自然礫を使用して作られており、このため加工は、刃部のみ施されている。刃部は、両面からの粗い剥離調整によって作り出されている。

凹石（第21図2）

破損品が1個出土している。表裏の両面に使用痕をもつ。また、片側面は平坦でこの部分に擦痕がみられ、磨石としても使用されたものと考えられる。

石鏃（第21図3～10）

石鏃は8個が出土した。3～5は、平基の無茎鏃である。3・4は先端部の角度が緩く、正三角形に近い形状を呈する。5は先端部が鋭角である。6は、凹基の無茎鏃である。7は、円基鏃である。先端部を欠損する。身部の両面にタールが付着している。8～10は、平基の有茎鏃である。8・9は基部の先端部が尖っており、9はこの部分にわずかにタールの付着がみられる。8・10は、他に比べて断面がやや厚くなっている。

石匙（第21図11～16・第22図1・2）

7個が出土した。第21図11・12は、横形の石匙である。いずれも底辺部分に片面からの細かい剥離調整によって刃部が作り出されている。13～16・第22図1・2は、縦形の石匙である。13は、周縁全体に片面からの剥離調整が施されている。14は、両側縁に両面からの剥離によって刃部を形成している。16・第22図1・2は細身の石匙である。1・2は、先端部を欠損する。16・1は、器面全体に片面からの深い剥離調整が施されている。16の刃部は、細かい剥離によって形成されているが、1の剥離調整は、全体に粗いものである。2は、両側面に片面からの剥離調整によって刃部が作り出されている。この調整は浅く小さいものである。

石錐（第22図3・4）

2個出土している。3は、細い縦長の剥片の両側に片面から剥離調整を施して刃部を作り出している。このため刃部の断面形は、三角形を呈する。4は、小形の剥片に両面から粗い剥離調整を施したもので、先端部には顕著な磨耗痕が観察される。

搔器（第22図5）

第V層から1個が出土した。縦長剥片の周縁を片面から剥離加工して作られている。片側の調整は粗く、刃部から一方の側縁にかけては細かな剥離が施されている。

削器（第22図6・7）

6は、前述の搔器と同様にV層からの出土である。これらは、同層から出土した第I群土器に伴う石器と考えられる。縦長剥片の周囲に、片面から細かな剥離調整を施している。7は、不整形な剥片の一側縁に剥離に刃部加工がみられる。

剥片類（第22図8～12・第23図1～5）

第22図8～10は、一部に刃部加工が施されているものである。8・9は、削器的に使用されたものと考えられる。8は、細長な剥片の鋭利な側縁に細かな剥離が施されている。9は、一側縁に外彎する刃部をもつ。10・11は、一側縁に細かな剥離調整によって内彎する刃部が作られている。12は、使用痕をもつ剥片である。鋭利な側縁部分に使用に伴って生じたと考えられる微細な剥離痕が観察される。

磨製石斧（第23図6）

1個が出土した。凸刃のもので、幅広で扁平な基部をもち側縁は直線的に開きながら刃部へ続く。刃部には、図裏面右側に刃こぼれ状の剥落がみられる。

石器計測表

番号	図版番号	名称	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	産地	備考
1	第21図-1	半円状扁平打製石斧	14.8	5.7	2.2	265.0	硬砂岩	北上山地	
2	-2	凹石	11.7	7.1	2.9	250.0	石英安山岩質凝灰岩	"	磨石と併用
3	-3	石錘	2.7	2.0	0.2	1.7	硬質凝灰泥岩	奥羽山地	
4	-4	"	2.1	1.9	0.15	0.9	"	"	
5	-5	"	3.1	1.8	0.2	1.1	珪質泥岩	北上山地	
6	-6	"	1.9	1.4	0.15	0.4	チャート	"	
7	-7	"	2.2	1.4	0.2	0.8	チャート質粘板岩	"	身部にタールの付着有り。
8	-8	"	3.4	1.5	0.4	1.81	チャート	"	
9	-9	"	3.9	1.6	0.3	1.48	珪質泥岩	"	基部にタールの付着有り。
10	-10	"	3.2	1.5	0.4	1.07	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地	
11	-11	石匙	3.6	6.2	0.9	24.5	珪質細粒凝灰岩	"	横形
12	-12	"	3.5	6.0	0.5	10.9	硬質泥岩	"	"
13	-13	"	7.0	3.7	0.9	23.75	硬質凝灰質泥岩	"	縦形
14	-14	"	6.6	3.4	0.85	25.1	チャート	北上山地	"
15	-15	"	6.9	2.3	0.5	10.57	硬質泥岩	奥羽山地	"
16	第22図-1	"	7.1	2.3	0.95	16.85	チャート質粘板岩	北上山地	"
17	-2	"	4.2	2.25	0.45	5.86	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地	"
18	-3	石錘	6.0	1.6	0.5	5.33	硬質泥岩	"	
19	-4	"	3.0	1.0	0.4	119	"	"	先端部の磨耗が顕著。
20	-5	搔器	7.3	3.9	1.0	36.5	"	"	
21	-6	削器	8.0	4.3	1.2	36.69	硬質凝灰質泥岩	"	
22	-7	"	6.4	4.6	0.6	19.46	珪質細粒凝灰岩	"	
23	-8	調整痕のあるフレイク	8.9	2.4	0.9	18.9	硬質凝灰質泥岩	"	削器に使用？
24	-9	"	4.1	2.8	0.45	5.85	硬質泥岩	"	"
25	-10	"	3.7	3.4	0.4	8.15	硬質凝灰質泥岩	"	ノッチ？
26	-11	"	4.4	3.5	0.9	14.42	珪質泥岩	北上山地	"
27	-12	使用痕のあるフレイク	3.7	2.5	0.5	6.15	珪質泥岩	上	削器に使用？
28	第23図-1	フレイク	3.9	2.9	0.6	10.65	硬質泥岩	奥羽山地	
29	-2	"	2.1	3.8	1.1	7.21	"	地	
30	-3	"	3.0	1.9	0.3	2.43	硬質凝灰質泥岩	"	
31	-4	"	2.1	2.0	0.5	1.25	硬質泥岩	"	
32	-5	"	2.6	1.9	0.4	2.45	チャート	北上山地	
33	-6	"	1.9	1.3	0.2	0.65	チャート	"	
34	-7	磨製石斧	10.2	4.5	2.0	160.0	凝灰質粘板岩	"	刃部に刃こぼれあり。

IV ま と め

1. 竪穴住居址

当遺跡で発見されたものは1棟だけであるが、調査区外北東方向に集落があったことも考えられる。住居址の形状、カマドの構築、出土遺物等から平安時代の住居址（11世紀）と考えられる。

2. 陥し穴状遺構

前述したとおり、形状からA～Fの6つの類型に大別したが、これらを瀬川司男の分類⁽¹⁾を参考にしながら、若干の説明をする。

<Aタイプ>

溝状で底面に杭跡のないもので、県下一般に見られるものである。当遺跡では2基検出され、いずれもほぼ長軸が東西方向で、段丘縁に向う形になっている。瀬川の分類ではA I型にあたり、長軸が290～350 cmで短軸が80～125 cm、深さは100 cm前後である。

<Bタイプ>

溝状ではあるが、底部が階段状になっており、幅がAタイプより広がっている。2 mの間隔で対になって2基発見された。長軸が370 cmのものと320 cmのもので、短軸は70～120 cmである。深さは70～105 cmである。全体の形状は瀬川の分類ではB II型であるが、底部が階段状なので該当しないし、県下では他に類例がない。当遺跡で発見された他の陥し穴状遺構と異質であり、他の機能をもった遺構とも考えられる。

<Cタイプ>

溝状で底部に杭跡のあるものである。底部における長軸と短軸の比は8：1から10：1ぐらいのものが大部分で、それらの長軸は200～280 cmである。長軸が350と415 cmのものは長軸と短軸の比が大きく14：1と18：1になっている。瀬川の分類ではB I型になるかと思われる。このタイプは安代町の荒屋II遺跡⁽²⁾のA型、有矢野遺跡⁽³⁾のものに類似する。ただ詳細にみると、当遺跡のものは底部の一端もしくは両端が上部開口部から外側にえぐり込まれているものが多く、杭跡を無視すれば瀬川の分類のA IIやA III、A V型のものである。また杭跡も一直線に並ぶものは一例のみで、ジグザグやずれてはいるが並列して2列のものが多い。そして一例のみであるが部分的には3列になっているものがある。杭跡も7基から12基と数が多い。

<Dタイプ>

次にあげるEタイプと同様長楕円形を呈し、比較的浅いものであり、底部に杭跡を有するものである。1例のみの検出である。長軸と短軸の比は3：1ぐらいであり、瀬川の分類ではB

Ⅲ型になるが、杭跡は不規則で17基も認められ、荒屋Ⅱ遺跡のB型とは異なる。底部規模が215×90cmと幅の広いもので深さ80cmのものである。

〈Eタイプ〉

Dタイプと同じ形状であるが、底部長軸120～140cm、短軸40～65cm、深さ60～85cmと小型であり、底部に杭跡がない。6基検出されている。この型は瀬川の分類のBⅨ型である。荒屋Ⅱ遺跡のC型と似ているが、それより長軸が短かくて幅が広く、浅いものである。

〈Fタイプ〉

円筒形を呈するもので、底部径が65cm前後、深さが120～145cmである。底部には1～2基の杭跡をもつものである。瀬川の分類ではCⅠ型である。CⅠ型は水沢市の袖谷地遺跡、南矢中遺跡、金ヶ崎町の館山遺跡⁽⁵⁾で検出されたものによっているが、当遺跡のものは杭穴が径4～8cmと細く形状もやや異なるようである。

〈立地と時期〉

遺跡のある地区は北上川上流地域で谷底平野の左岸段丘縁である。Cタイプのものは2基づつ対になって段丘縁に平行または直角に配置されている。Eタイプは段丘縁からおよそ50cmの所に平行に配置されている。Fタイプは段丘縁に直角に配置されている。等タイプごとにそれぞれ特色ある配置になっている。これらC、E、Fタイプの埋土の状態はいずれも上位黒色～黒褐色土中に赤褐色スコリアがみられ、大きな時期差が感じられない。またAタイプも同様である。ちがいが見られるのはBタイプで、埋土中に赤褐色スコリアがある。Dタイプの埋土は埋め戻しが考えられ、赤褐色スコリアは見られない。

陥し穴状遺構の検出面は、縄文時代の土器片が出土する層より20～30cm下位であったが、実際の検出面はその土器片の出土する層とほぼ同一平面であったかも知れない。この調査では時期を確定できる遺構などの資料がなく、陥し穴状遺構の構築時期も縄文時代のものとは考えられるものの時期の確定までには至らない。

〈註記〉

1. 瀬川司男 陥し穴状遺構について 紀要Ⅰ(昭和56年) 岩手県埋文センター
2. 岩手県埋文センター 東北縦貫自動車関連遺跡発掘調査報告書(荒屋Ⅰ遺跡) 昭和56年
3. " 上野遺跡・上の山Ⅹ遺跡発掘調査報告書 昭和57年
4. 岩手県教育委員会 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅠ 昭和56年
5. 岩手県埋文センター 館山遺跡第2次発掘調査報告書 昭和57年

〈参考文献〉

- 今村啓爾 縄文時代の陥し穴と民族誌上の事例の比較 昭和51年 物質文化No27
岩手県埋文センター 都南村湯沢遺跡 昭和53年 の他当センター発行報告書多数
村田文夫 おとし穴 昭和57年 季刊考古学創刊号
岩手県教育委員会 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 昭和54年 他

3. 出土遺物

〔土器〕

出土した土器は、縄文時代前期から平安時代にわたるものである。しかし、出土量は少なくしかも小破片が多いため、各時期の様相を把握できるだけの資料性に乏しい。ここでは各群ごとに若干の説明を加えることとしたい。

第Ⅰ群土器 縄文時代前期初頭に位置づけられる土器群である。ほとんどが第Ⅴ層からの出土で、胎土には多量の繊維を含んでいる。底部形態には平底と尖底があるが、胎土や焼成には差異はなく、同時期のものと考えられる。胎土に多量の繊維を含むことから、大木Ⅰ式または、それ以前の土器に併行するものと考えられる。

第Ⅱ群土器 大木7b・8b・10式に位置づけられる土器群である。

第Ⅲ群土器 出土した土器のうち最も多く、時的にも後期初頭から末葉までのものがある。初頭～前葉のものでは、沈線文や貼付文様を多用しており、東北南部の南境式、北部の前十腰内Ⅰ式に当たるものと考えられる。中葉のものでは、磨消縄文や平行沈線を弧状沈線によって結ぶものがみられ、十腰内Ⅱや加曽利B式に位置づけられるであろう。後葉～末葉では、磨消縄文による入組文や刺突文がみられ、宮戸Ⅲ式に当るものと考えられる。

第Ⅳ群土器 縄文土器の中では最も出土量が少ない。初頭の大洞B式と末葉の大洞A'式に相当すると考えられる。

第Ⅴ群土器 弥生時代中期に位置づけられる土器群と考えられる。文様は、口縁部・頸部への沈線文や磨消縄文である。甕形土器では頸部を磨消して無文帯にしているものがあり、粗製のものには、捺糸文が用いられている。田舎館式の土器群に類似する。

第Ⅵ群土器 所謂北海道系の土器群で、後北C₂式と考えられる。高橋昭治・武田良夫(1982)によれば、岩手県内でこの種の土器を出土する遺跡は30遺跡にのぼっている。この内6遺跡が岩手町内の遺跡であるが、出土した土器のほとんどは後北C式である。高橋信雄(1982)は、盛岡市永福寺山遺跡出土の後北C₂式土器を胎土と施文方式からA・Bの2タイプに分類した。さらに、相伴している古式土師器との関係については、Aタイプには塩釜式、Bタイプには南小泉Ⅱ式が対応する可能性を指摘している。当遺跡出土の土器は、胎土断面が黒いことや連続刺突文が鋭利なことからAタイプに属すると考えられる。

第Ⅶ群土器 土師器である。いずれも小片破で詳細は不明であるが、ロクロ技法を用いない奈良時代のものと、ロクロ成形された平安時代のものがある。

CⅢa 3 住居址出土の埴形土器については、盛岡市大新町遺跡R E 701 住居址から類似した遺物が多数出土している。これらは、燈明皿と考えられる小形の皿と相伴しており、時的には11世紀を降るものと考えられている。当遺跡のCⅢa 3 住居址もこれらとほぼ同一時期のもの

考えたい。

〔石器〕

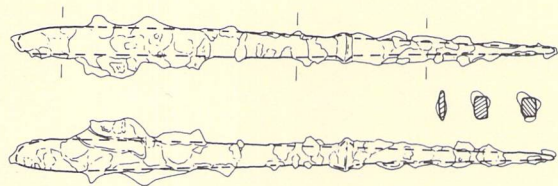
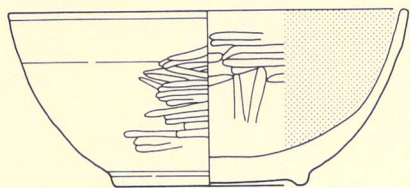
出土した石器類は、半円状偏平打製石斧1点、凹石1点、石鏃8点・石匙7点・石錐2点・搔器1点・削器類6点・ノッチ1点・フレイク6点・磨製石斧1点である。削器類としたものには、調整痕をもつ剥片や使用痕をもつ剥片も含めたが、用具として完成させたもの、あるいは使用されたものが多く、単なるフレイクやチップ類が少ないことが注目される。これらのうち、石鏃は4分の1、石匙を含めた搔器・削器類は2分の1の割合で出土している。全体の出土量が少なく、判断材料とする資料性に乏しいが、狩猟用具としての石鏃と解体用具として使用された可能性が強い搔・削器類の出土が多いことは、検出された各種の陥し穴と相俟って、狩猟場としての遺跡の性格を表わすものではないかと考えられる。

〈参考・引用文献〉

- (1) 熊谷常正(1983)：岩手県における縄文時代前期土器群の成立―条痕文系土器群から羽状縄文土器群へ―、岩手県立博物館研究報告 第1号
- (2) 高橋与右エ門(1983)：上里遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集
- (3) —————・大原一則(1983)：上斗内Ⅲ・Ⅵ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書、岩手県埋文センター文化財調査報告書第71集
- (4) 中村良幸(1979)：立石遺跡、大迫埋蔵文化財報告第3集、大迫教育委員会。
- (5) 八木光則他(1983)：大館遺跡群 大新町遺跡―昭和57年度発掘調査概報―、盛岡市教育委員会
- (6) 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正(1982)：岩手の土器、岩手県立博物館
- (7) 橘 善光(1979)：弥生土器―東北 北東北1～4―、考古学ジャーナルNo.160・162・166・168、ニューサイエンス社

版 图

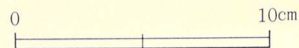
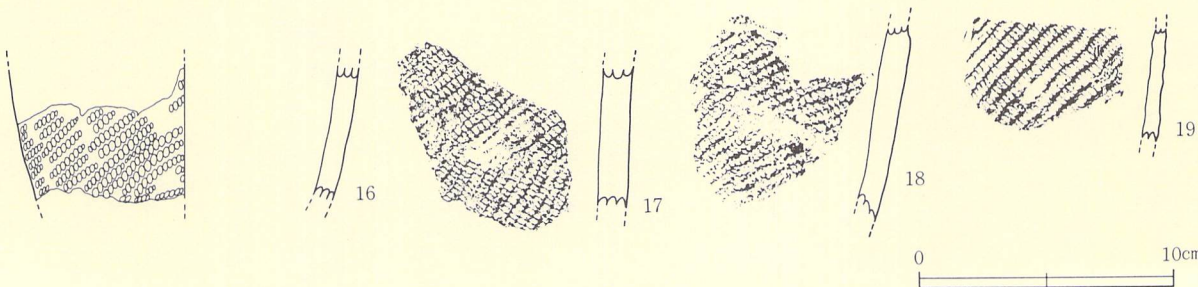
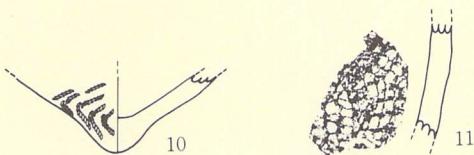
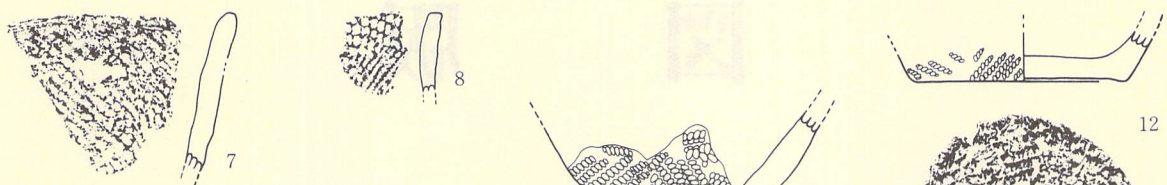
C II a 3 住居址



S = 1 / 2

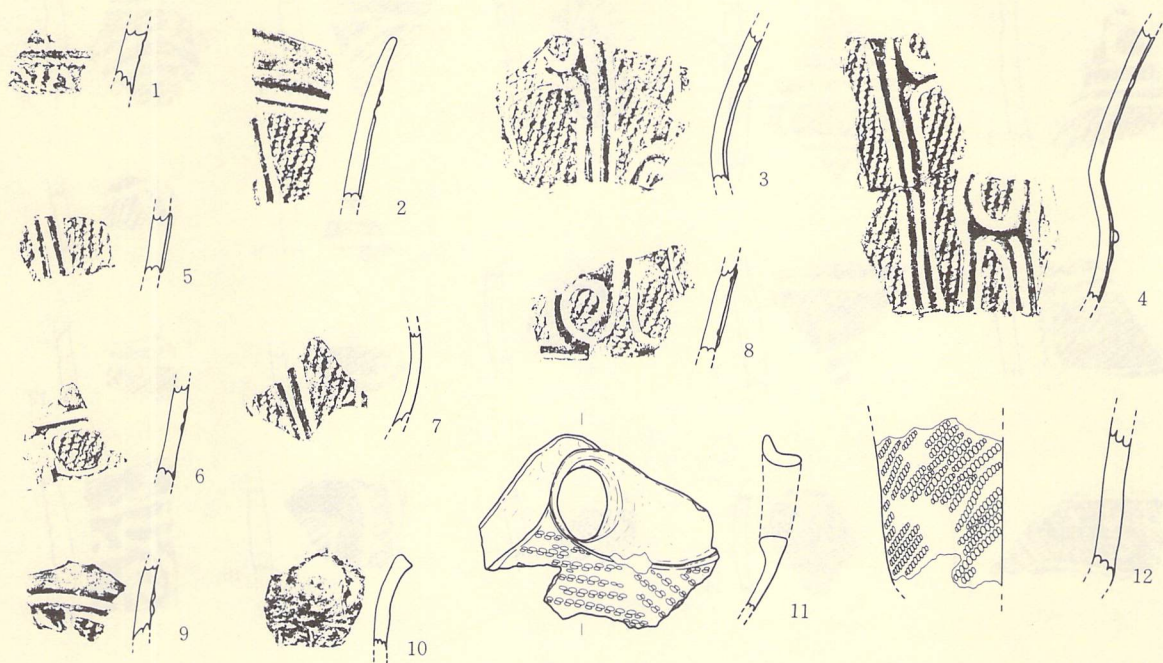
2

第 I 群土器

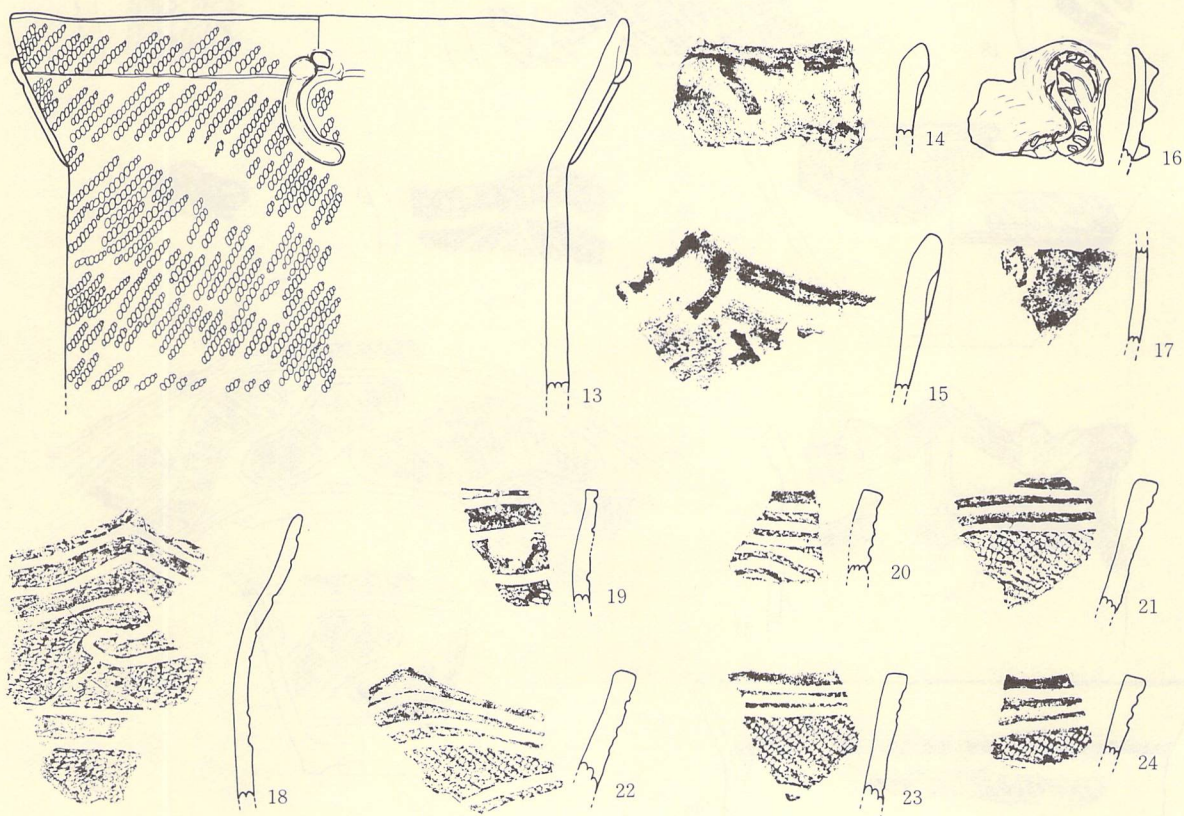


第15図 出土遺物 (C II a 3 住居址・遺構外出土遺物)

第II群土器



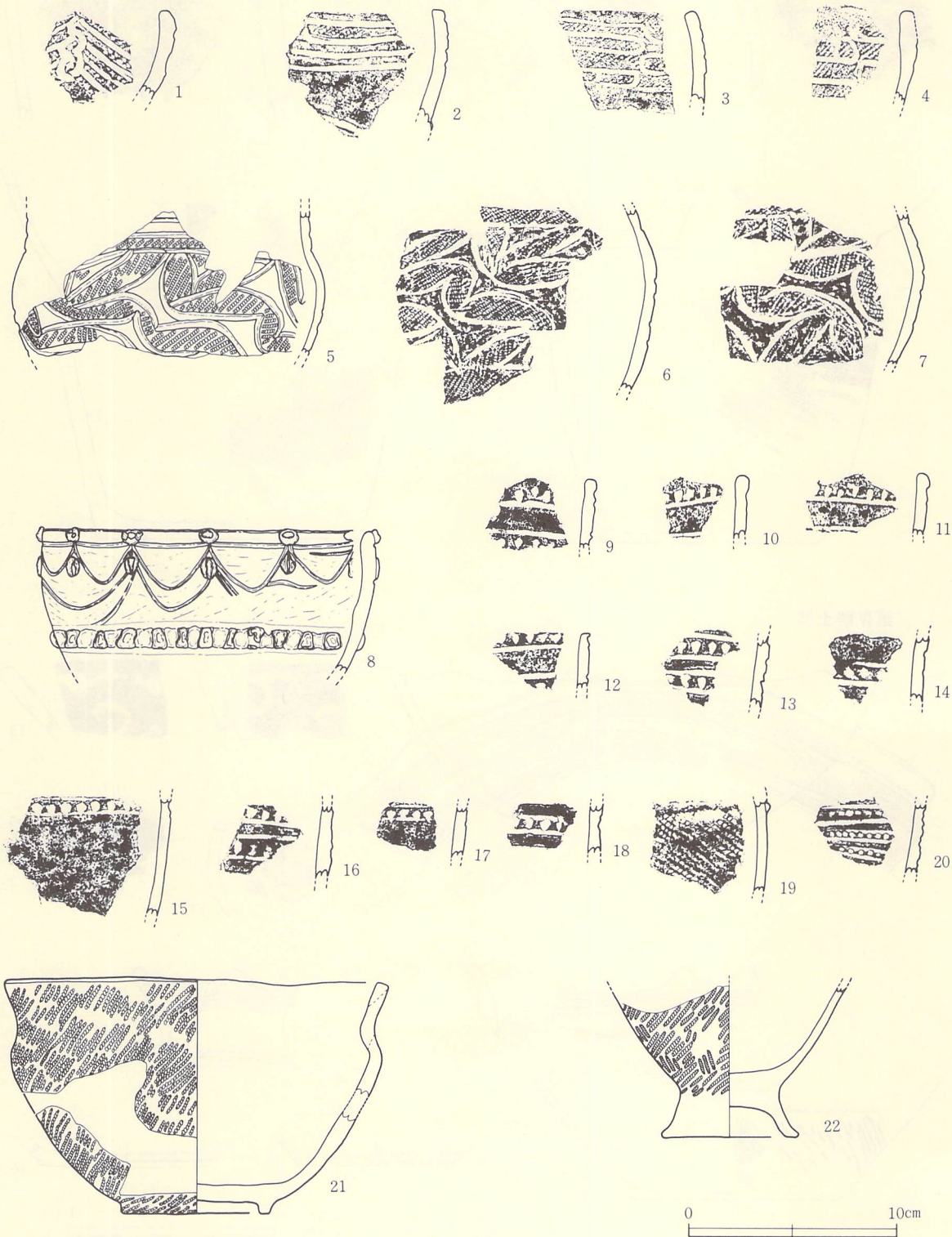
第III群土器



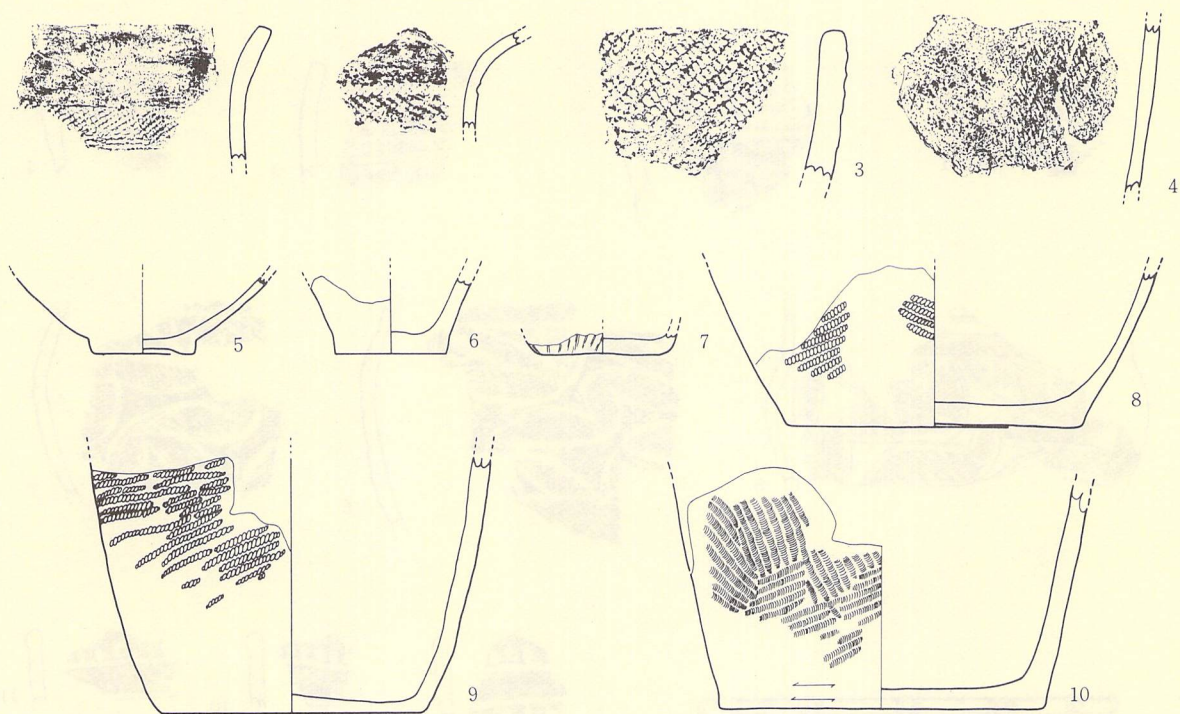
第16图 出土遺物 (遺構外出土遺物)



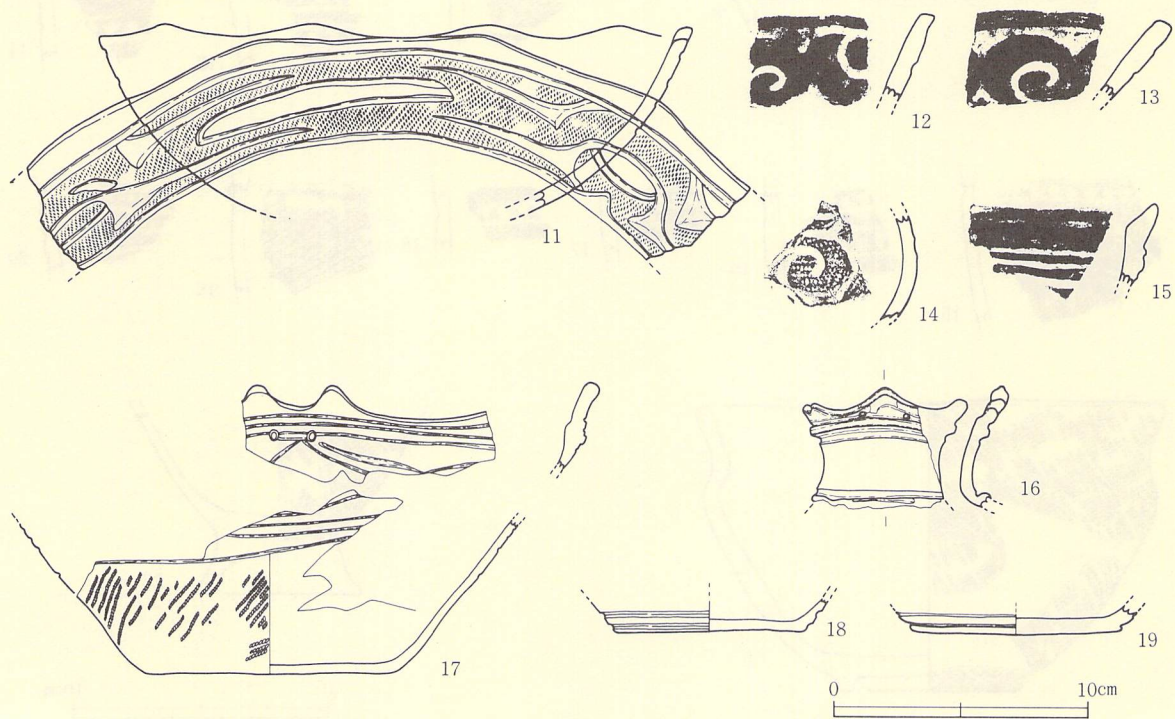
第17图 出土遺物（遺構外出土遺物）



第18图 出土遺物（遺構外出土遺物）

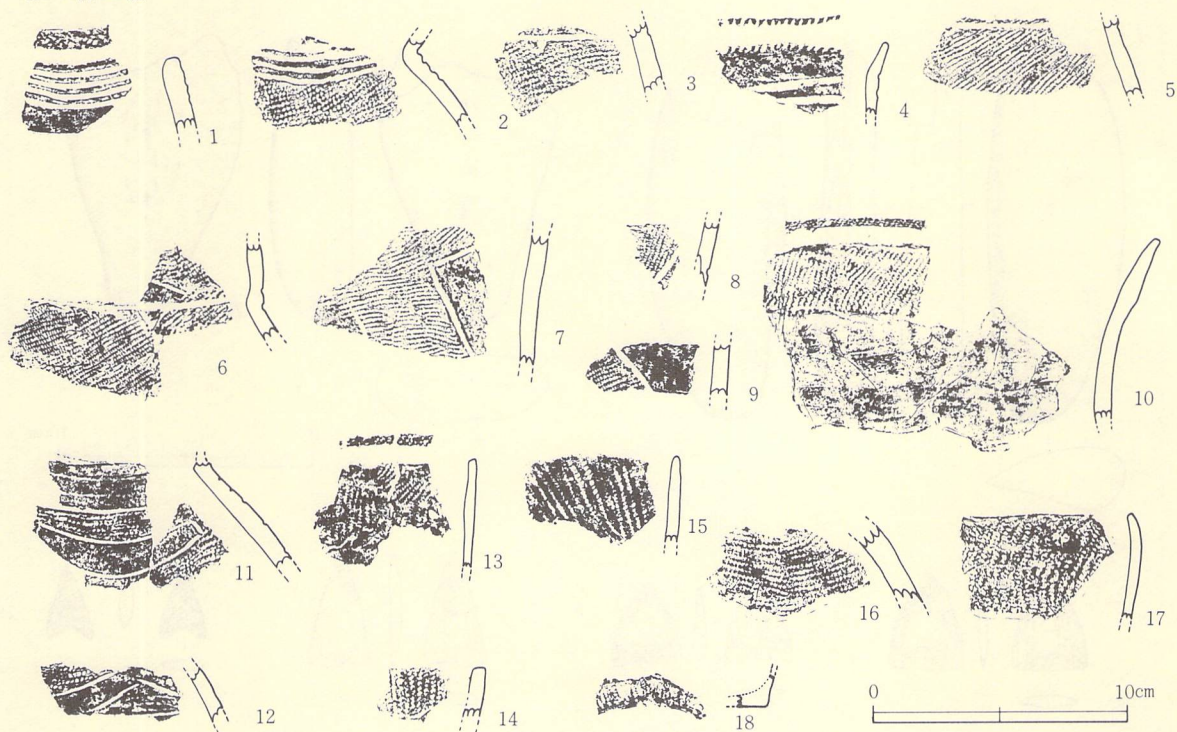


第IV群土器

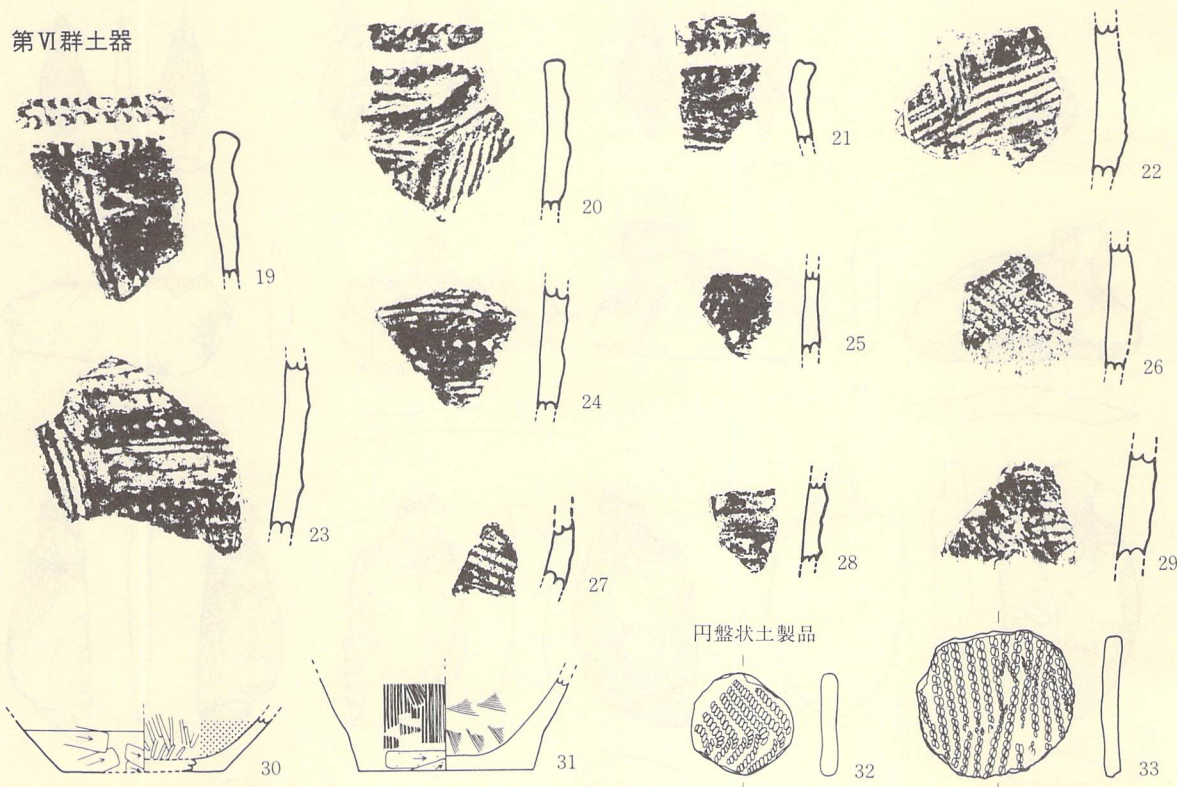


第19图 出土遺物（遺構外出土遺物）

第V群土器



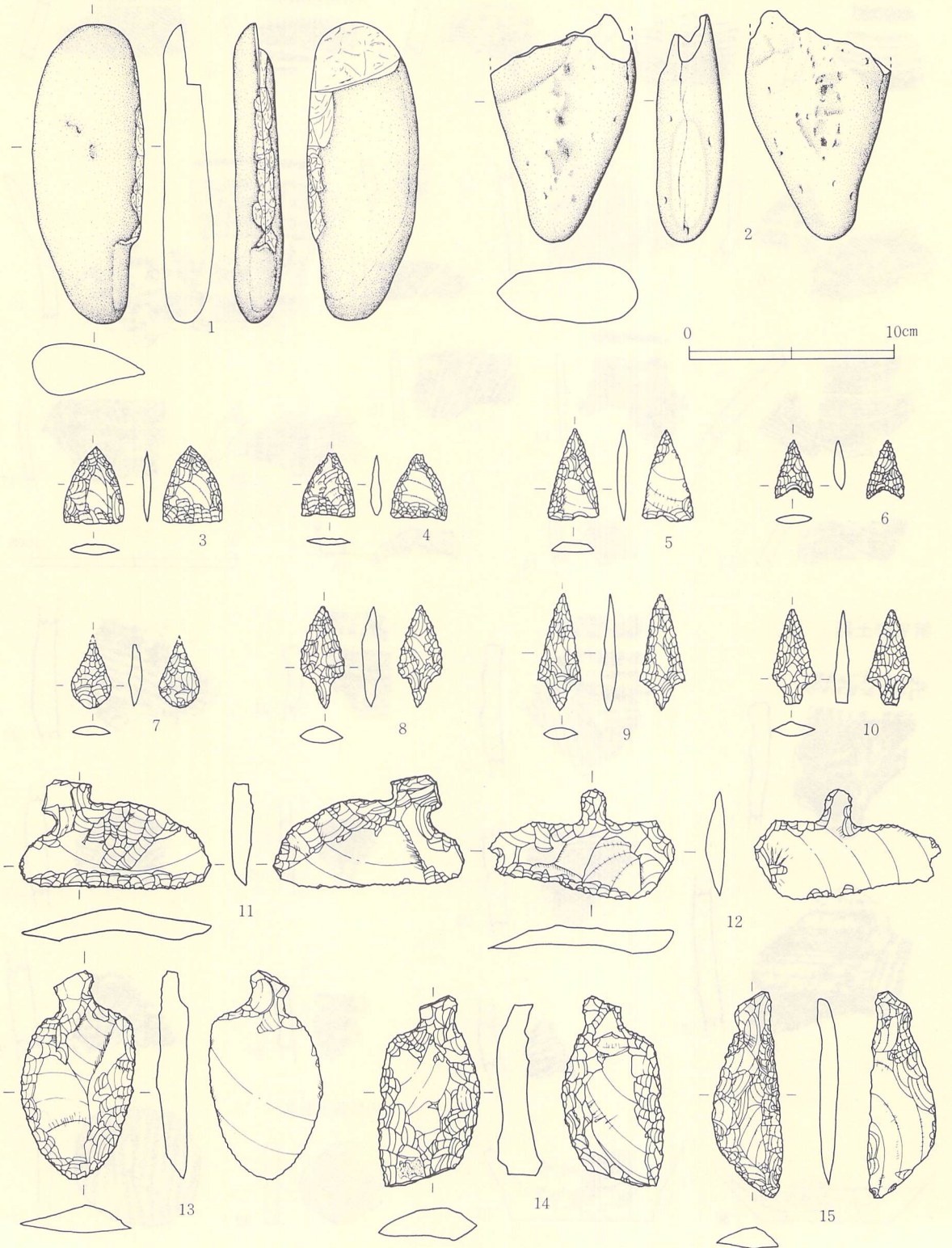
第VI群土器



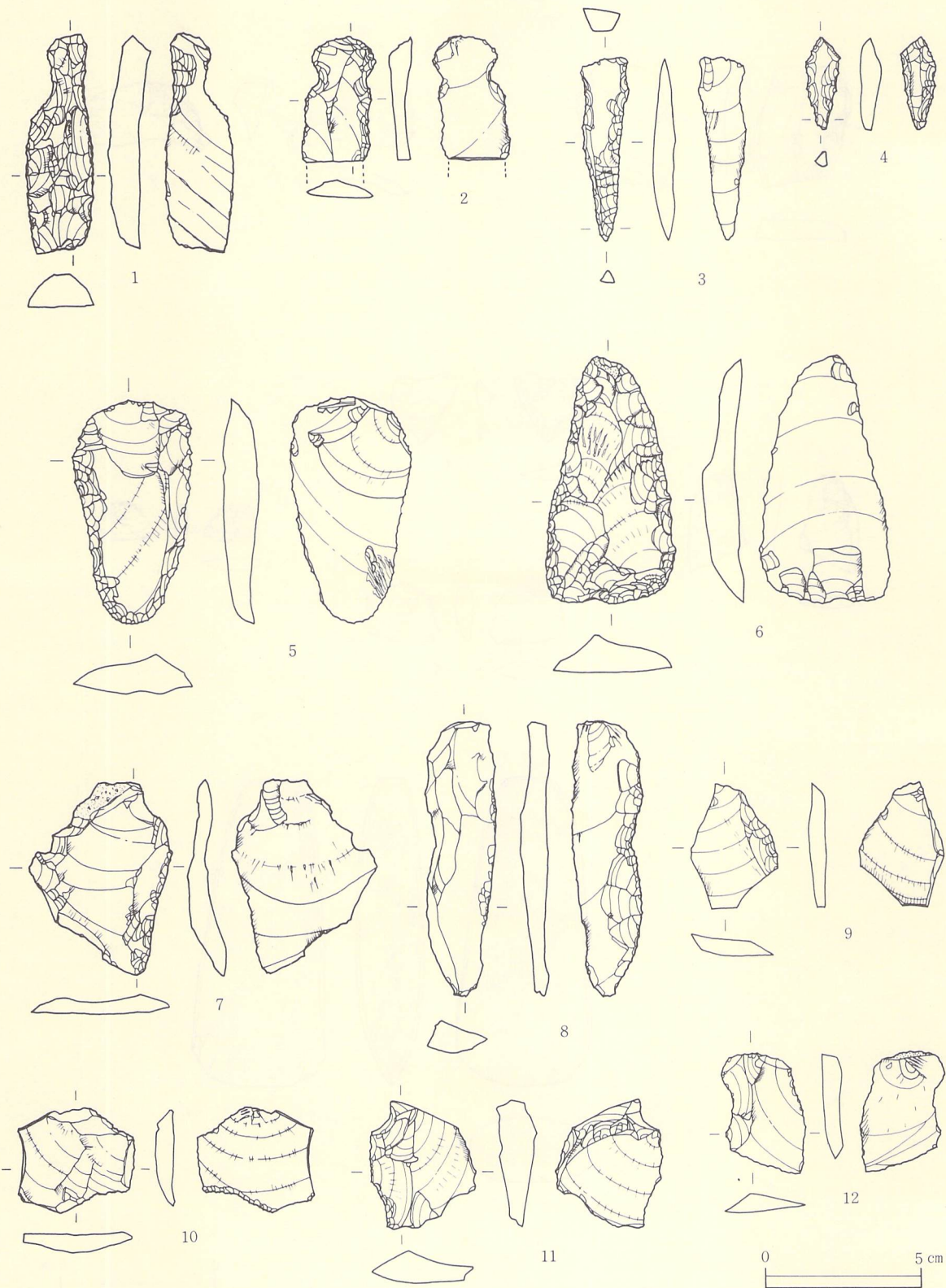
第20図 出土遺物（遺構外出土遺物）

※第VI群土器は1/2縮尺

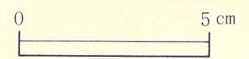
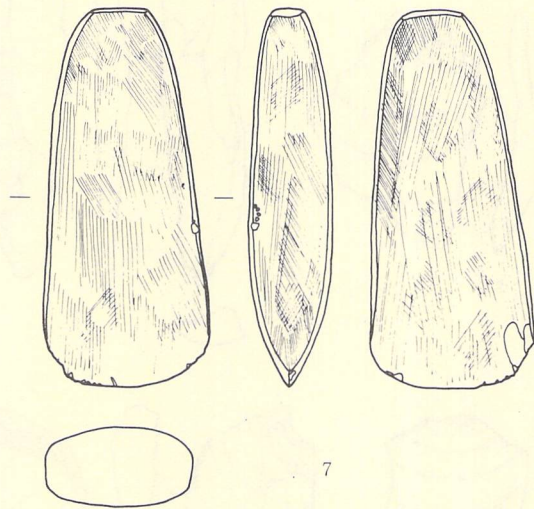
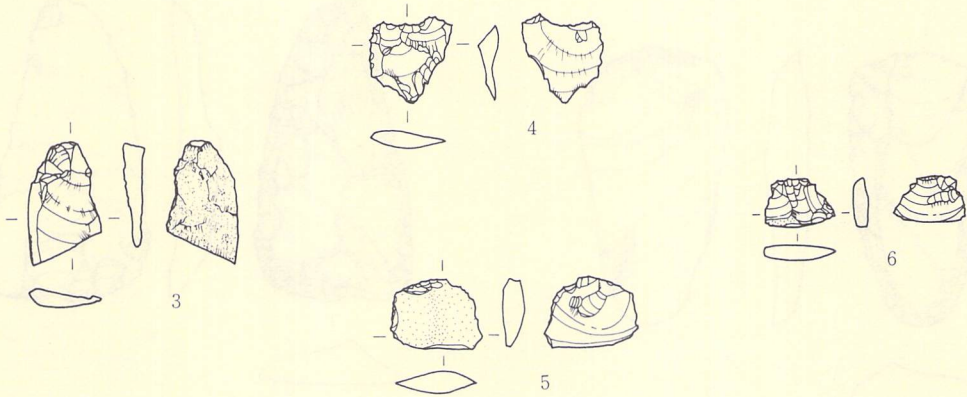
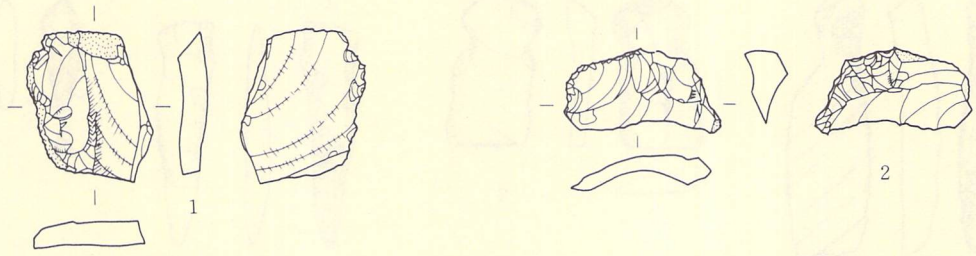
石器類



第21図 出土遺物（遺構外出土遺物）※3～15は1/2縮尺



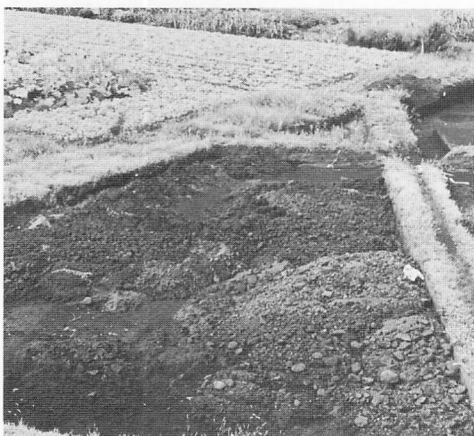
第22図 出土遺物（遺構外出土遺物）



第23図 出土遺物（遺構外出土遺物）



a区 (進入路部) C II・III ~ D II・III区 (調査状況)



a区 (本線部・北) A I・II ~ D I・II区 (調査状況)

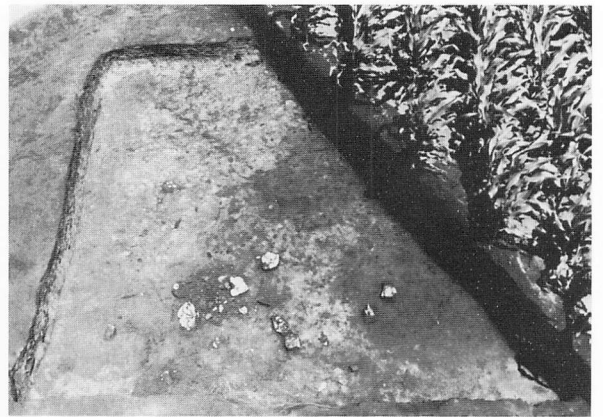


b区 (本線部・南) D I・II ~ F I・II区 (粗掘風景)

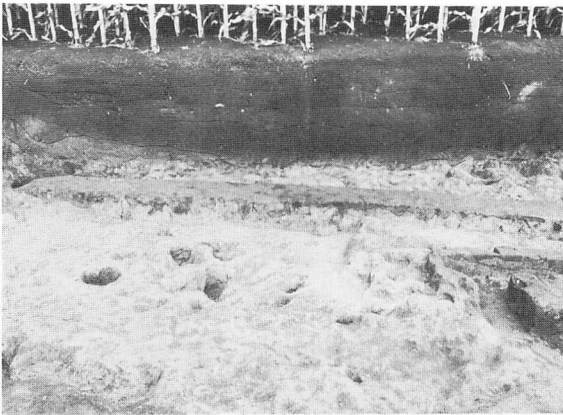
写真図版 1 調査区全景



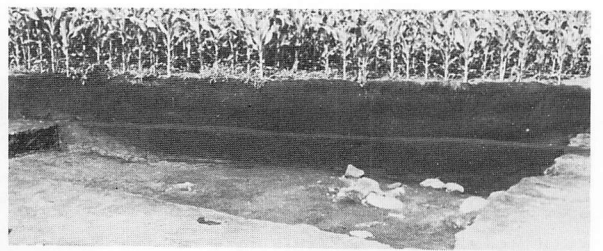
検出状況



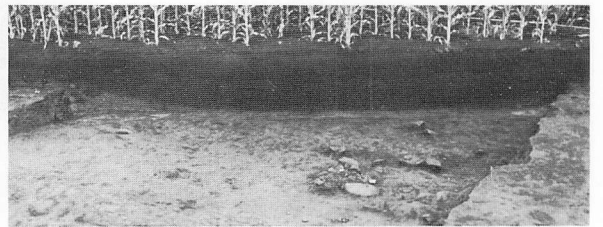
全景



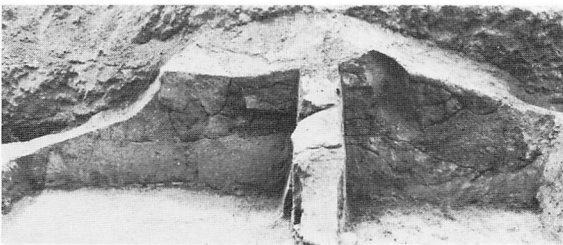
床面掘り方



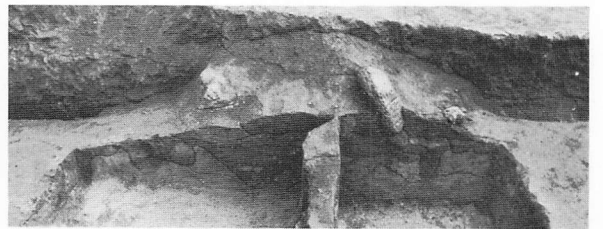
埋土断面



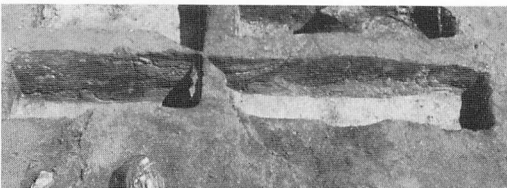
埋土断面及び土層断面



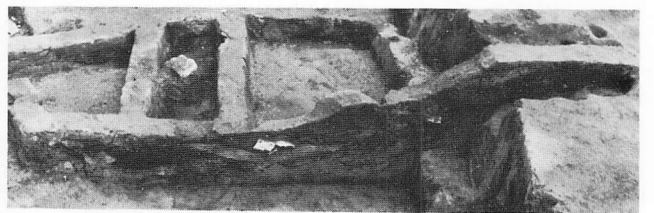
カマド横断面No.1 (北から)



カマド横断面No.2 (北から)

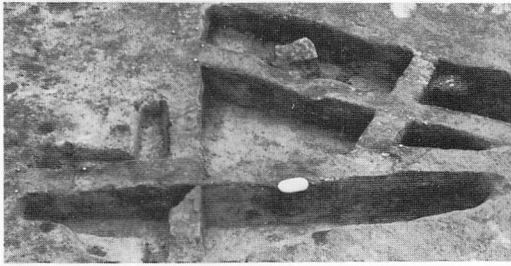


燃烧部横断面 (南から)

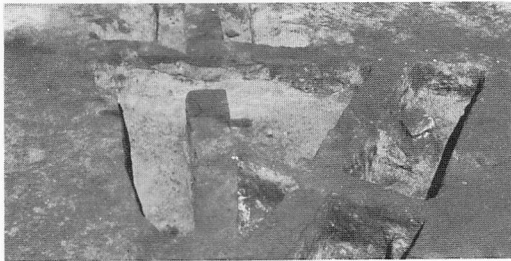


カマド縦断面 (西から)

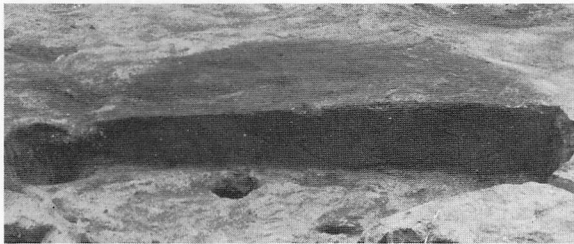
写真図版2 C II a 3 住居址



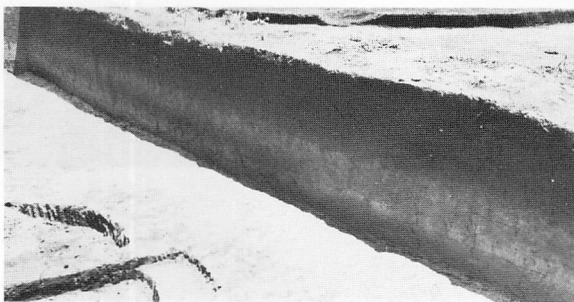
住居址内焼土断面（東西）



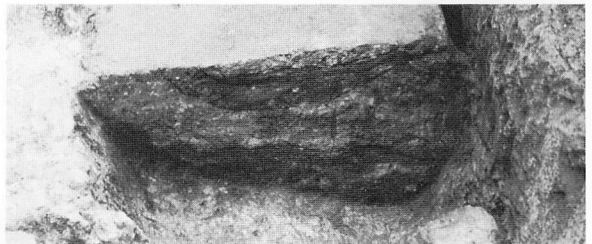
住居址内焼土断面（南北）



C II a 2 ピット



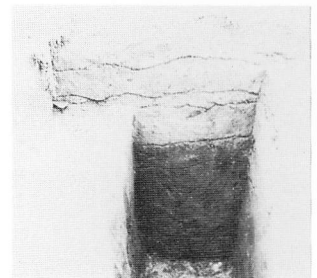
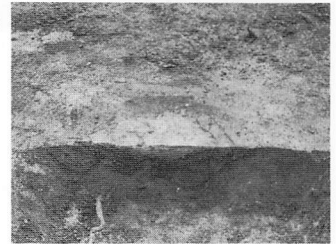
土層断面 B区 EW0~E15 N45付近



住居址内ピット

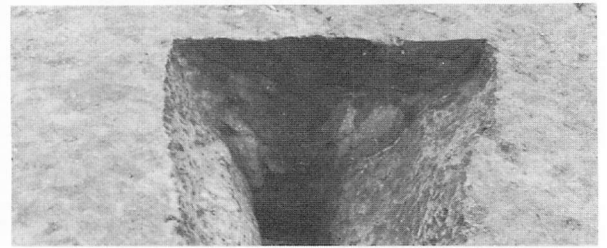
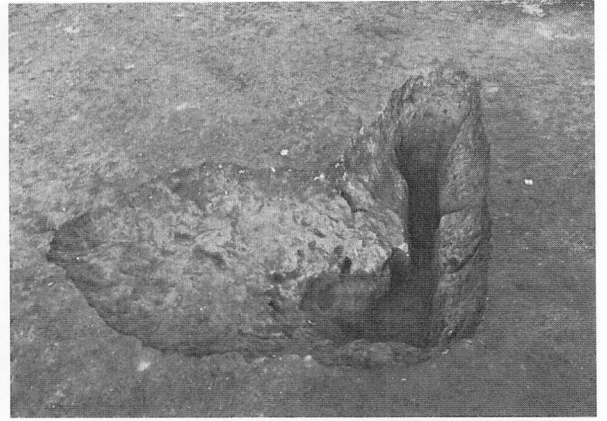


C I F 5 焼土遺構

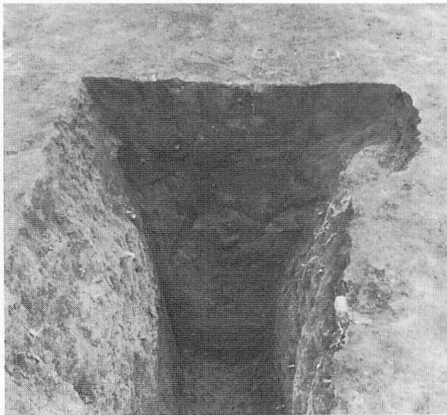


F区 EW0 S75 付近

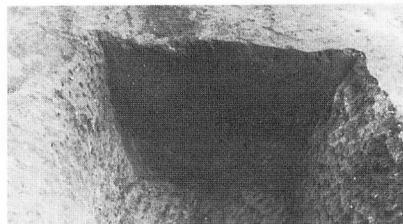
写真図版3 C II a 3住居址、焼土、ピット、土層断面



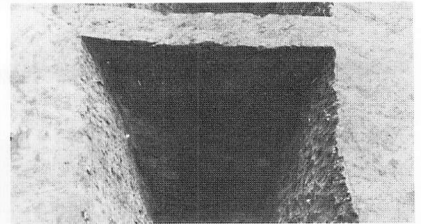
D III b 2 陥し穴状遺構



C II i 9 陥し穴状遺構

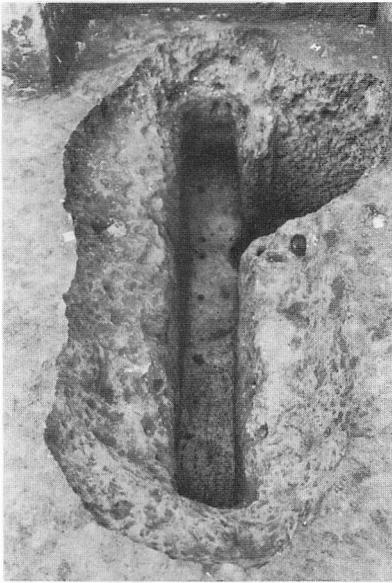


D II b 2-1 陥し穴状遺構



D II b 2-2 陥し穴状遺構

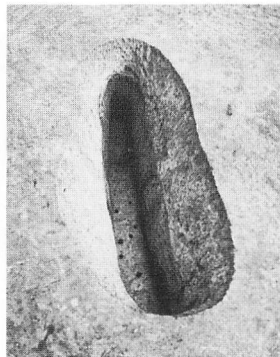
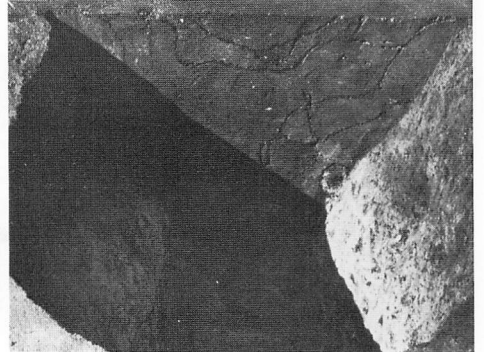
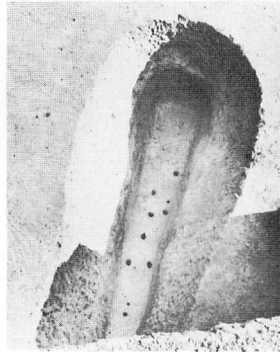
写真図版4 陥し穴状遺構No.1



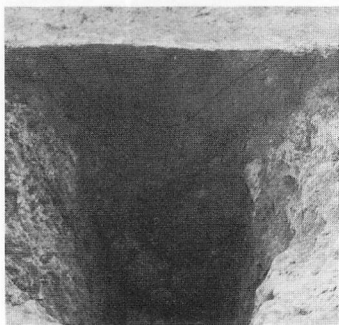
C III h 2-1 陥し穴状遺構



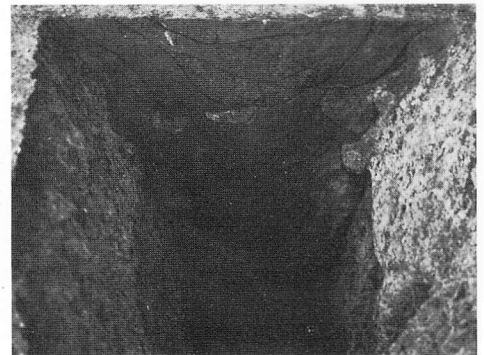
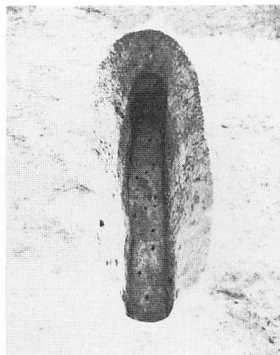
D I g 3 陥し穴状遺構



E I d 3 陥し穴状遺構

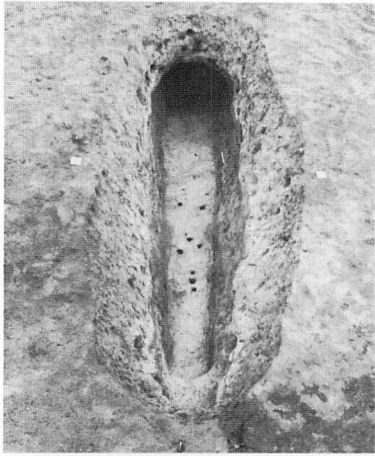


D II d 9 陥し穴状遺構

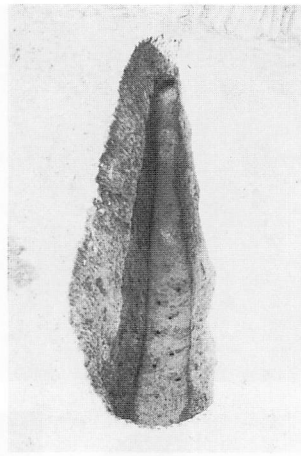


E I f 4 陥し穴状遺構

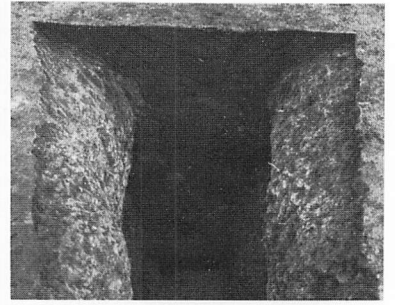
写真図版5 陥し穴状遺構No.2



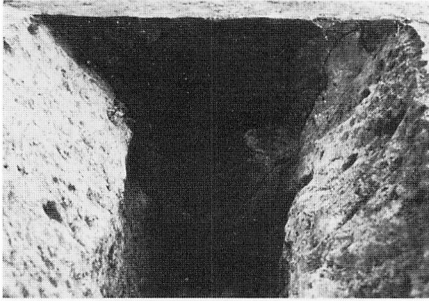
E II c 0 陥し穴状遺構



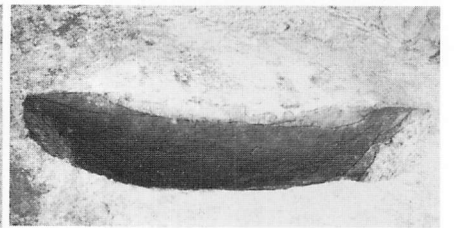
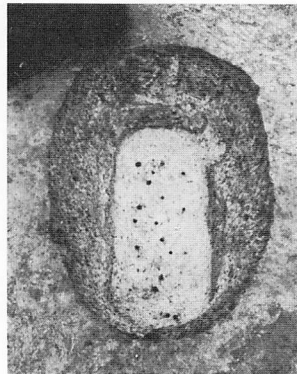
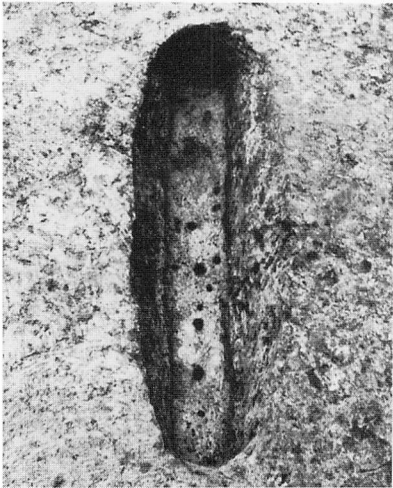
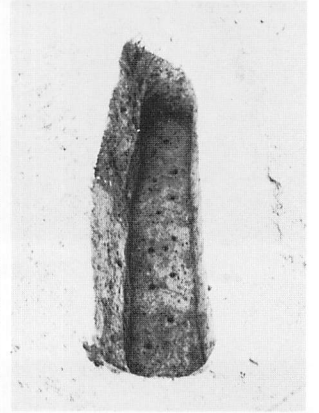
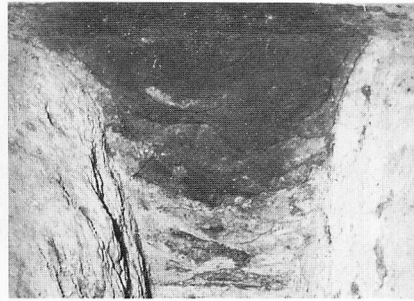
E I d 9 陥し穴状遺構



E I h 6 陥し穴状遺構

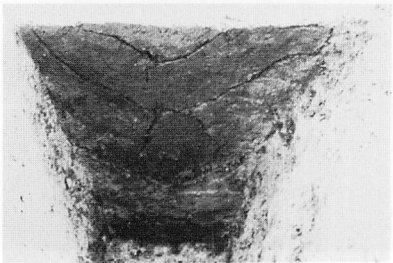


F I c 8 陥し穴状遺構



E I h 9 陥し穴状遺構

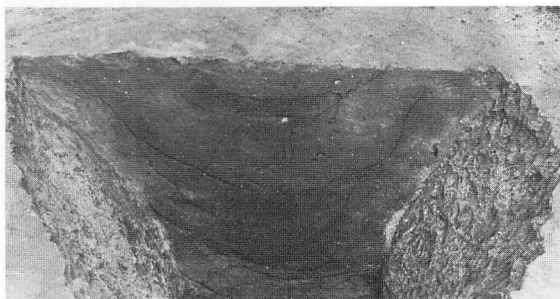
陥し穴状遺構調査状況



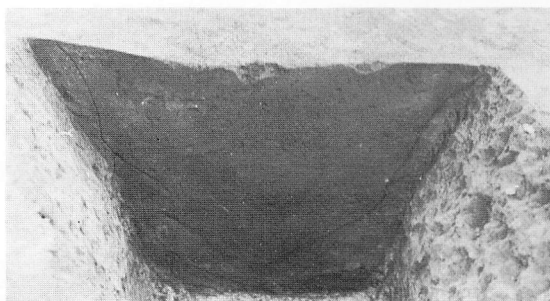
写真図版6 陥し穴状遺構No.3



D I b 9 陥し穴状遺構



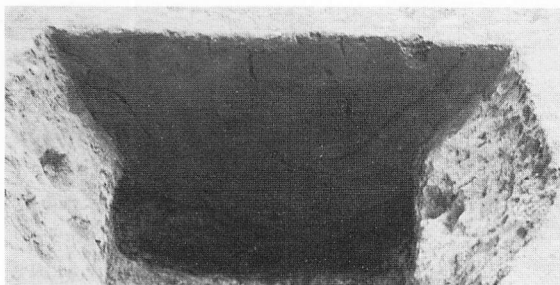
D II a 1 陥し穴状遺構



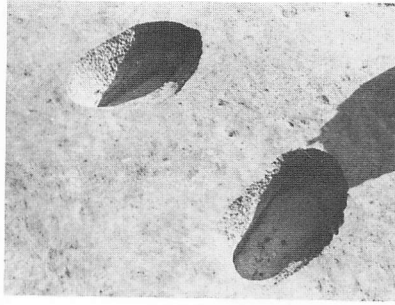
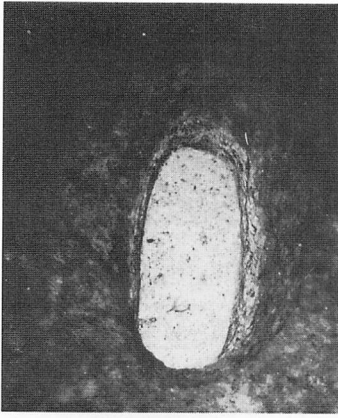
D I c 8 陥し穴状遺構



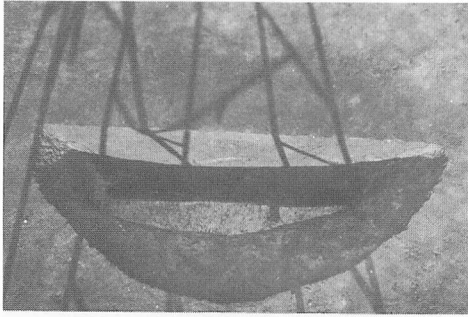
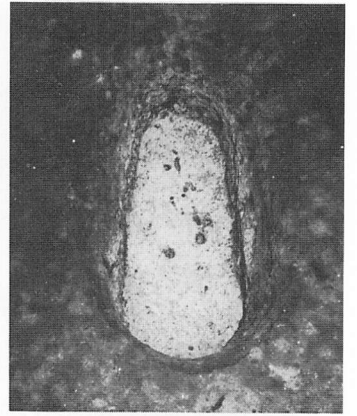
D I d 6 陥し穴状遺構



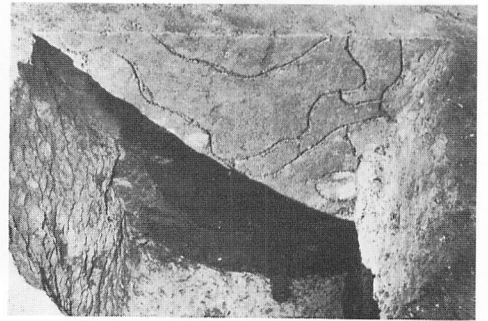
写真図版 7 陥し穴状遺構No.4



D I f 5、D I f 4 陥し穴状遺構



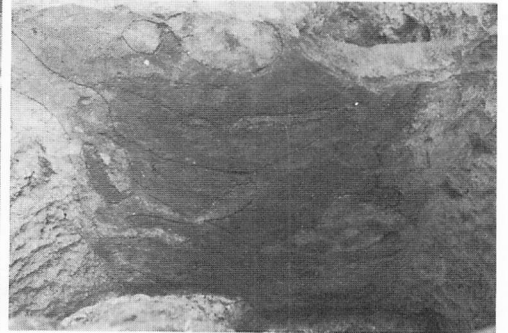
D I f 5
陥し穴状遺構



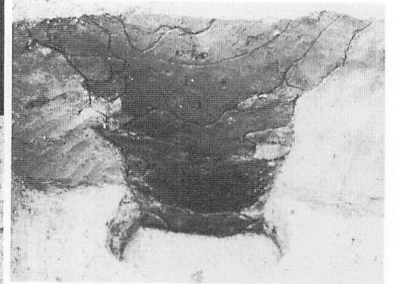
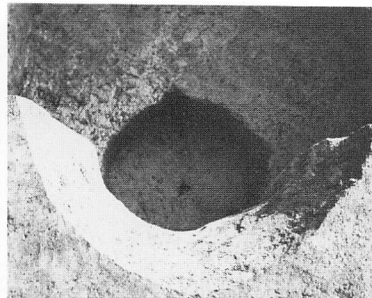
D I f 4 陥し穴状遺構



C III h 0 陥し穴状遺構

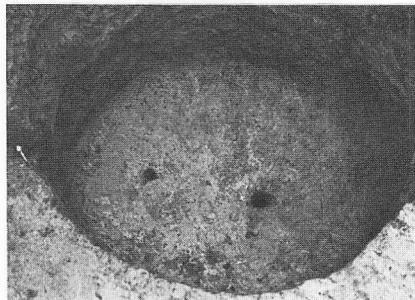
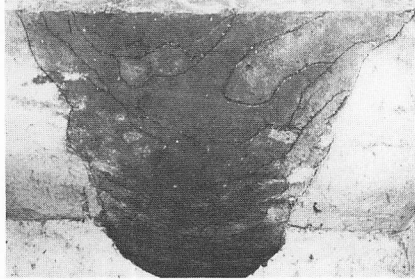


C III h 2-2 陥し穴状遺構

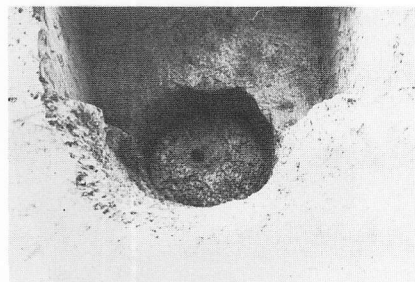


E II b 1 陥し穴状遺構

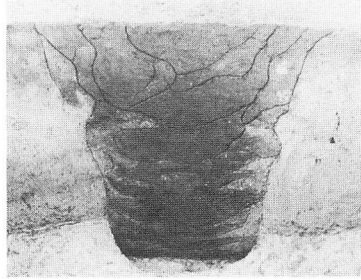
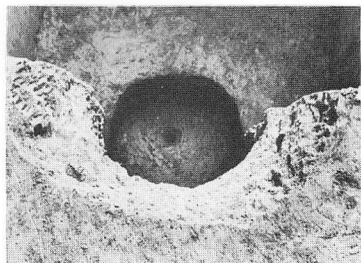
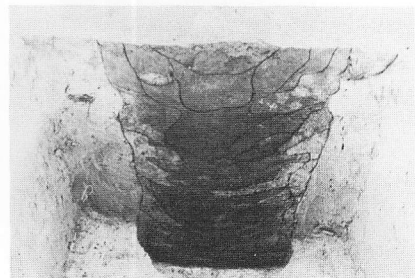
写真図版8 陥し穴状遺構No.5



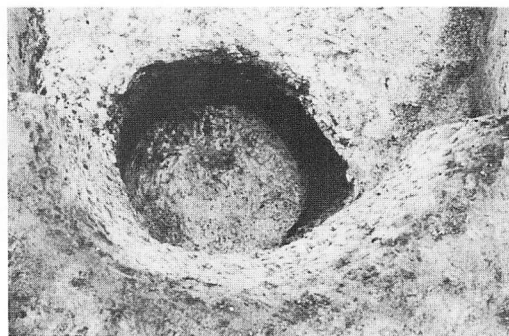
E I a 9 陥し穴状遺構



D I h 6 陥し穴状遺構



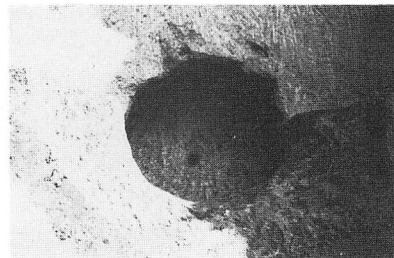
D I j 7 陥し穴状遺構



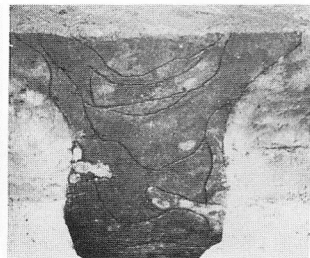
D I i 6 陥し穴状遺構



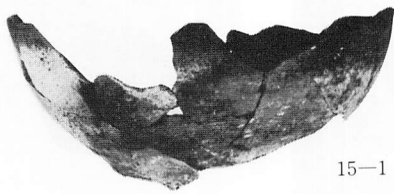
D I g 6 陥し穴状遺構



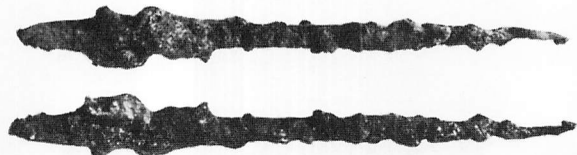
D I e 4 陥し穴状遺構



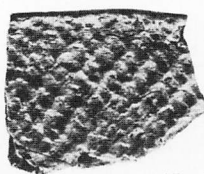
写真図版9 陥し穴状遺構No.6



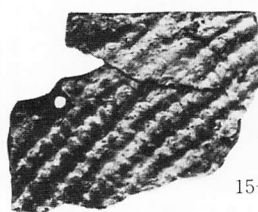
15-1



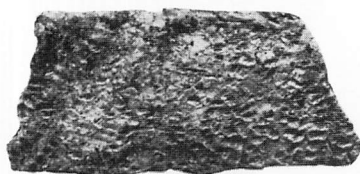
15-2



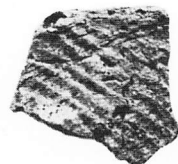
15-3



15-4



15-5



15-6



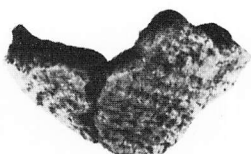
15-7



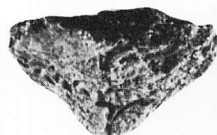
15-8



15-12



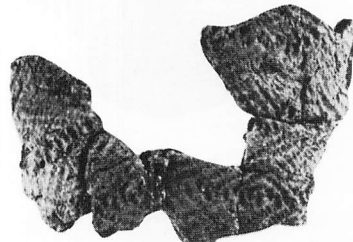
15-9



15-10



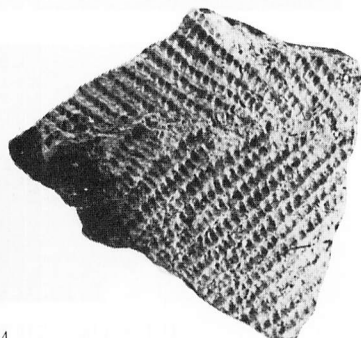
15-11



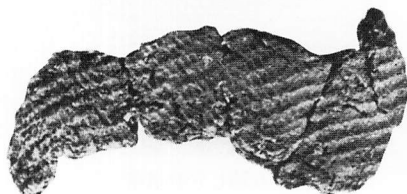
15-13



15-14



15-15



15-16

写真図版10 出土遺物

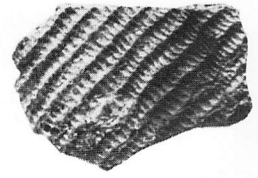
番号は図版に対応する



15-17



15-18



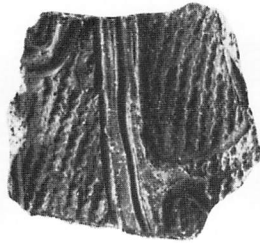
15-19



16-1



16-2



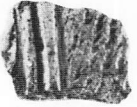
16-3



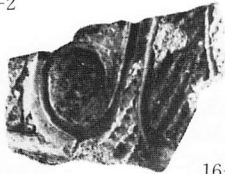
16-4



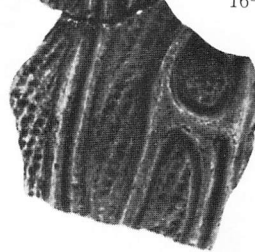
16-9



16-5



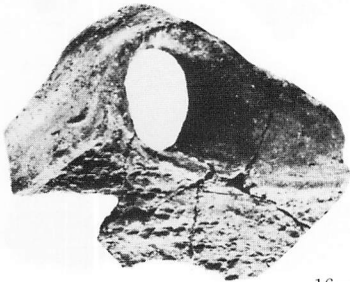
16-8



16-6



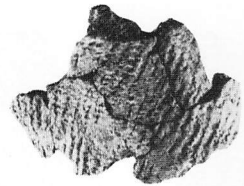
16-7



16-11



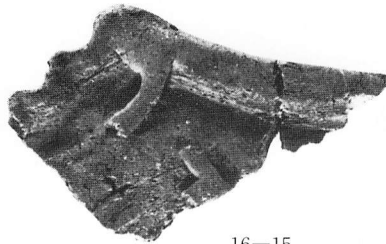
16-10



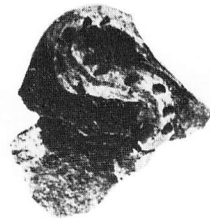
16-12



16-14



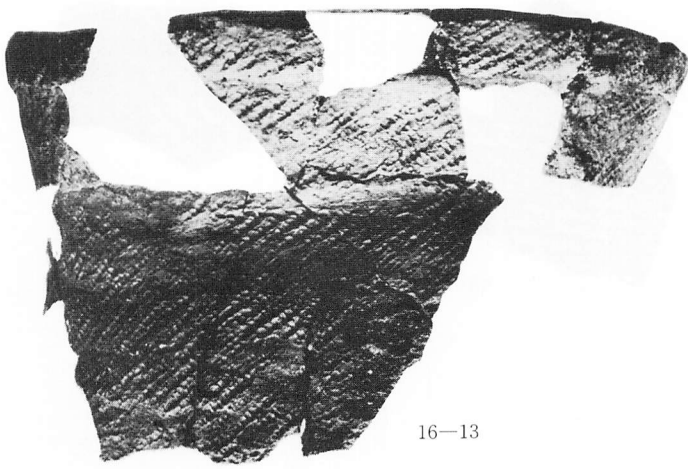
16-15



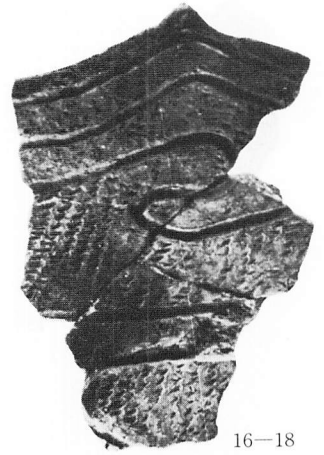
16-17



写真図版11 出土遺物



16-13



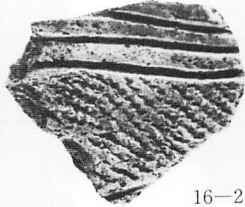
16-18



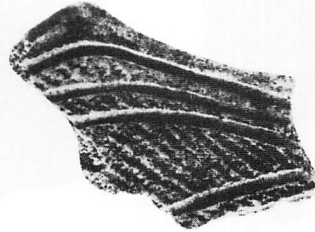
16-19



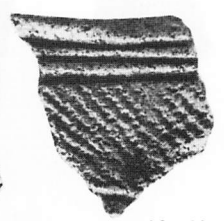
16-20



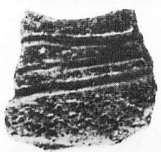
16-21



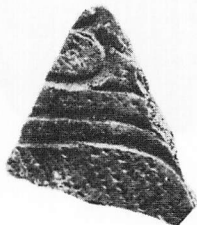
16-22



16-23



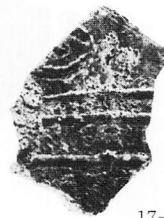
16-24



17-1



17-2



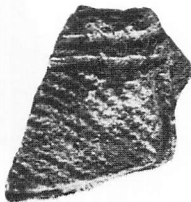
17-3



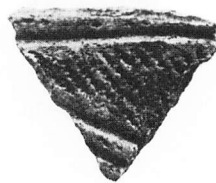
17-4



17-5



17-6



17-7



17-8



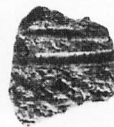
17-9



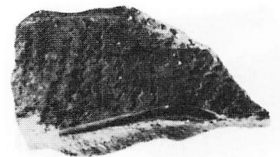
17-10



17-11



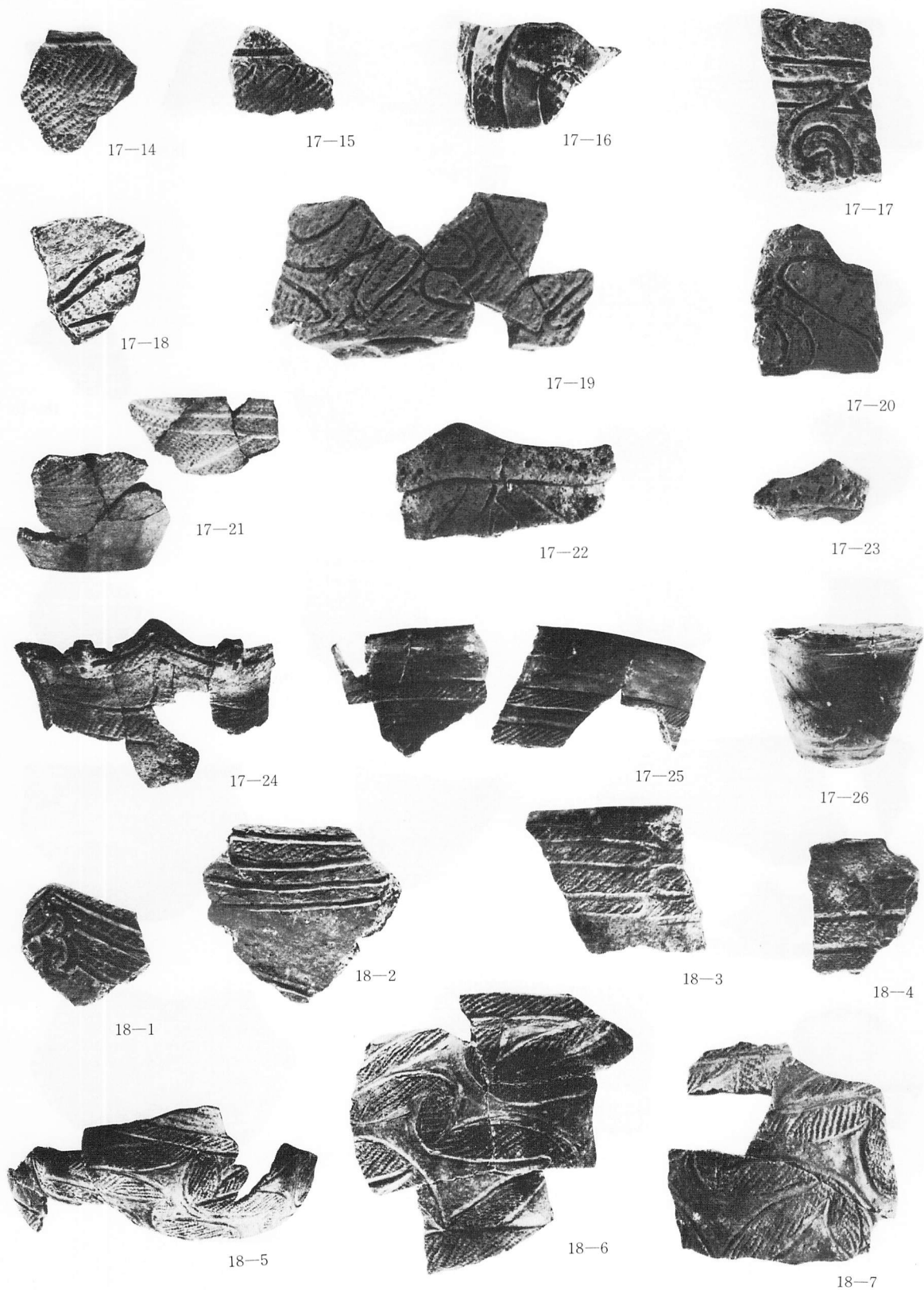
17-12



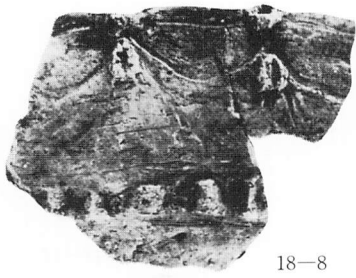
17-13

写真図版12 出土遺物

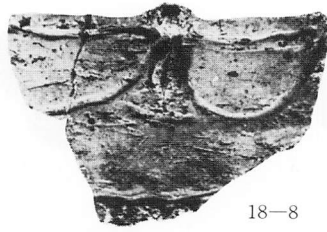
番号は図版に対応する



写真図版13 出土遺物



18-8



18-8



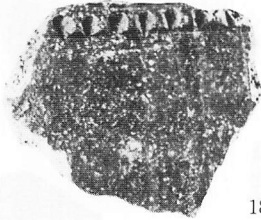
18-9



18-12



18-10



18-15



18-16



18-13



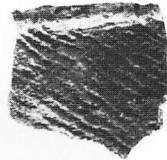
18-14



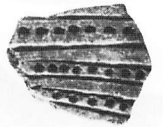
18-17



18-18



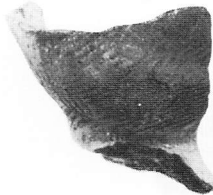
18-19



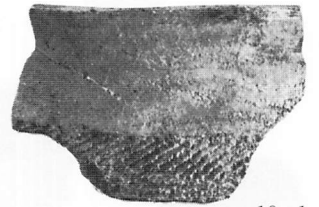
18-20



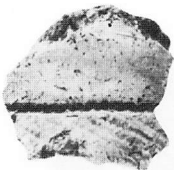
18-21



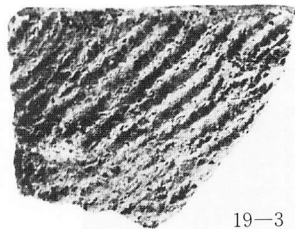
18-22



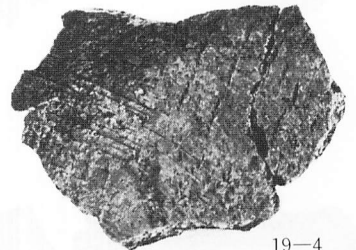
19-1



19-2



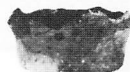
19-3



19-4



19-5



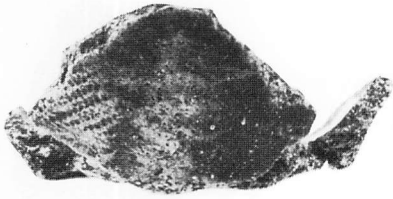
19-6



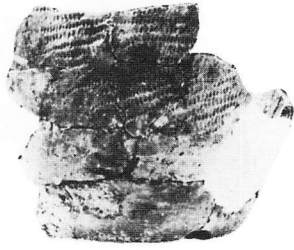
19-7

写真図版14 出土遺物

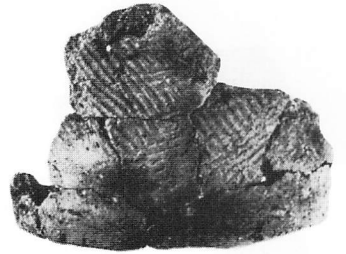
番号は図版に対応する



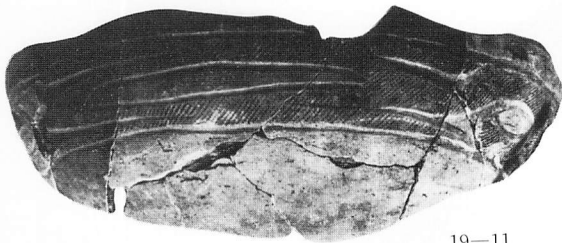
19-8



19-9



19-10



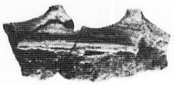
19-11



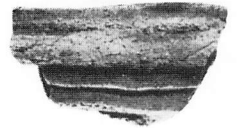
19-12



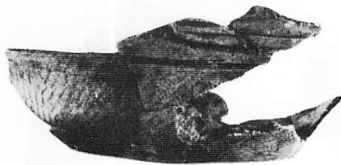
19-13



19-14



19-15



19-17



19-16



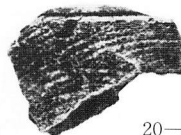
19-18



20-1



20-2

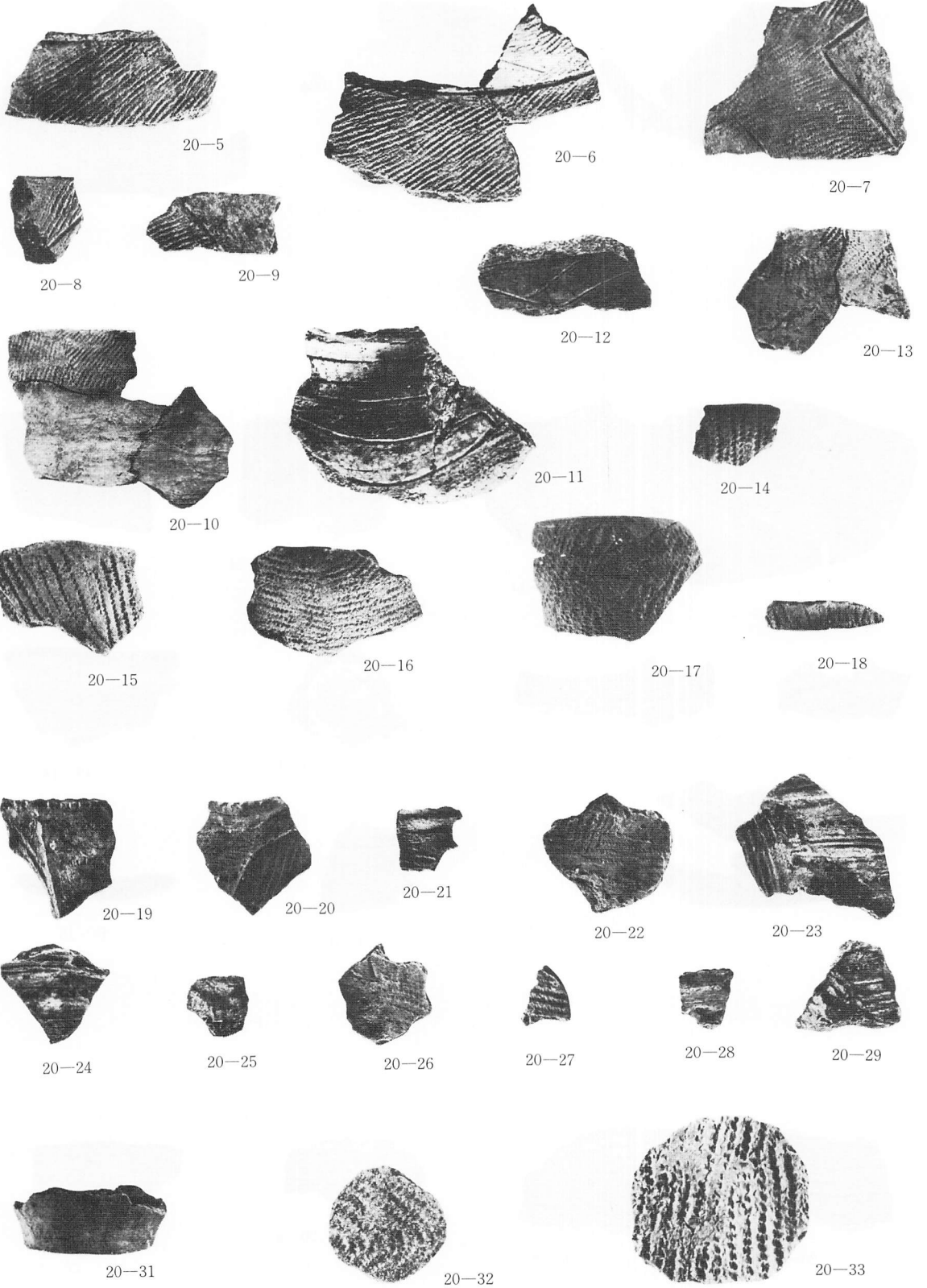


20-3



20-4

写真図版15 出土遺物

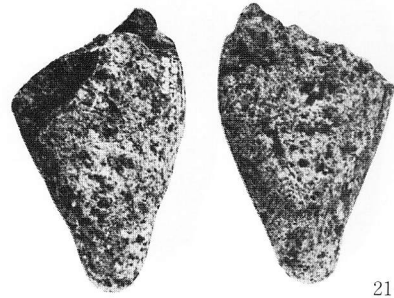


写真図版16 出土遺物

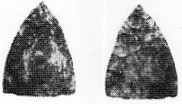
番号は図版に対応する



21-1



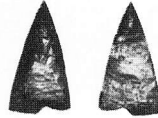
21-2



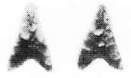
21-3



21-4



21-5



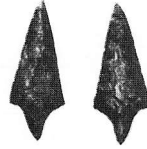
21-6



21-7



21-8



21-9



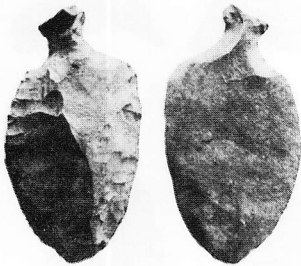
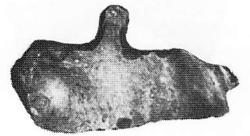
21-10



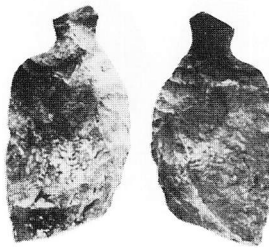
21-11



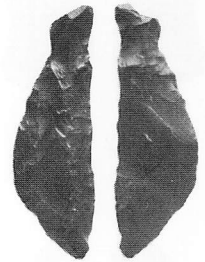
21-12



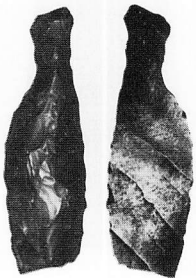
21-13



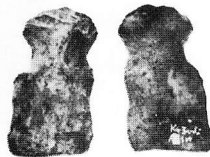
21-14



21-15



22-1



22-2

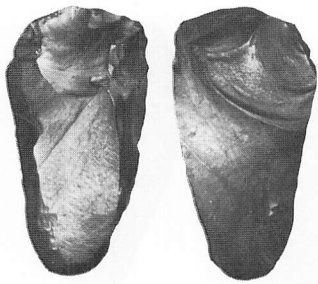


22-3



22-4

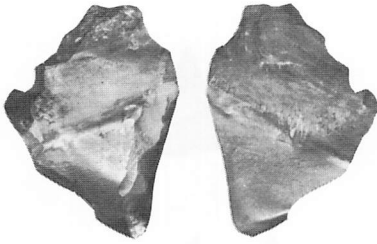
写真図版17 出土遺物



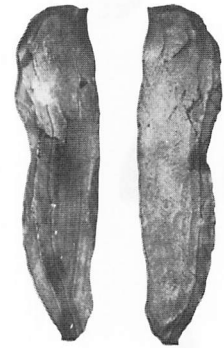
22-5



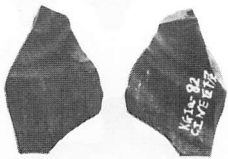
22-6



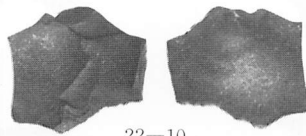
22-7



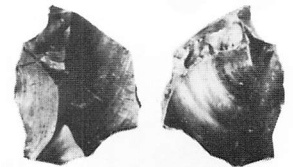
22-8



22-9



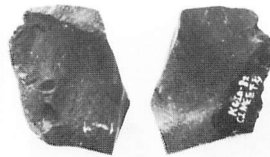
22-10



22-11



22-12



23-1



23-2



22-3



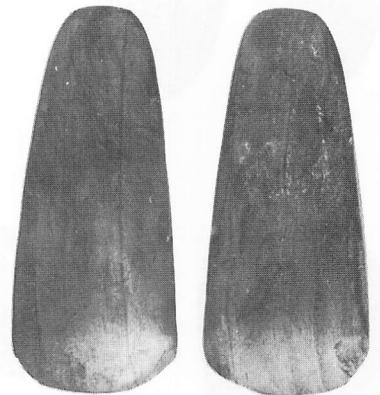
23-4



23-5



23-6



23-7

写真図版18 出土遺物 番号は図版に対応する

岩手県埋文センター文化財調査報告書第83集
国道4号川口バイパス関連遺跡発掘調査
川口 I 遺跡発掘調査報告書

印刷 昭和59年12月20日

発行 昭和59年12月25日

発行 (財)岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷
TEL (0196) 38-0001~2

印刷 川口印刷工業株式会社
〒020 岩手県盛岡市本町通二丁目13番8号
TEL (0196)23-3351
